広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第203集

灰塚ダム建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
(V)

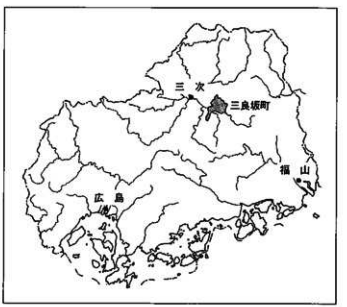
－横谷第9号古墳，寺山第1～4号古墳，萩原城跡，
清替屋古墓・清替屋遺跡，宗像神社境内遺跡の調査－

2003

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

灰塚ダム建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（Ⅴ）

－横谷第９号古墳，寺山第１～４号古墳，萩原城跡，
清替屋古墓・清替屋遺跡，宗像神社境内遺跡の調査－



2003

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

1　寺山第１～４号古墳遠景（北東から）

2　萩原城跡遠景（南西上空から）

例　言

1　本書は，灰塚ダム建設に伴って，平成11（1999）・平成12（2000）年度に発掘調査を実施した，双三郡三良坂町の横谷第９号古墳，寺山第１～４号古墳，萩原城跡，清替屋古墓・清替屋遺跡，宗像神社境内遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）江の川総合開発工事事務所から委託を受けて，財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3　萩原城跡については，一部を三良坂町教育委員会が実施した。

4　発掘調査の実施時期や担当者については，本文中のⅠ－１表に表示している。

5　出土遺物の整理・復元・実測，図面の整理，写真撮影などは糸賀省三（現高田郡吉田町立丹比西小学校），下津間康夫，橋坂久己（現山県郡筒賀村立筒賀中学校），山田繁樹が中心となって行った。

6　本書はⅠ，Ⅱ，Ⅲの２・５を橋坂が，Ⅲの１・３・４，Ⅳを下津間が分担して執筆し，下津間が編集した。

7　本書に使用した遺構の略記号は次のとおりである。
　ＳＢ：掘立柱建物跡　　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＫ：土坑　　ＳＸ：性格不明の遺構

8　図版の遺物番号は挿図の遺物番号と同一である。

9　横谷第９号古墳・寺山第１～４号古墳の遺物実測図の土器の断面について，須恵器は黒ヌリ，その他は白ヌキである。

10　Ⅱ－１図は，国土交通省国土地理院発行の１：25,000の地形図（三良坂，稲草，吉舎，上下）を使用した。

11　本書に表示した北の方位は，平面直角座標第Ⅲ系によるが，一部（Ⅲ－１－２・Ⅲ－１－３・Ⅲ－１－５・Ⅲ－３－14図）は磁北による。また，表示した平面直角座標第Ⅲ系の座標値は，発掘調査時の座標値（日本測地系）である。

12　横谷第９号古墳については，横谷第３号古墳として調査を実施したが，周辺遺跡との関係から，報告書では横谷第９号古墳に名称を変更した。また，寺山第１～４号古墳については，当初，寺山第１～５号古墳として調査を実施したが，第３・５号古墳は古墳ではなかった。そして，新たに古墳が１基確認され，最終的に寺山第１～４号古墳と名称を変更した。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 3

Ⅲ　調査の遺跡 …… 9

1　横谷第９号古墳 …… 9

2　寺山第１～４号古墳 …… 19

3　萩原城跡 …… 47

4　清替屋古墓・清替屋遺跡 …… 71

5　宗像神社境内遺跡 …… 89

Ⅳ　まとめ …… 105

挿図目次

Ⅱ－１図　周辺主要遺跡分布図（１：25,000） …… 5

Ⅱ－２図　横谷古墳群・寺山古墳群周辺遺跡分布図（１：5,000） …… 6

横谷第９号古墳

Ⅲ－１－１図　横谷第９号古墳周辺地形図（１：2,000） …… 9

Ⅲ－１－２図　横谷第９号古墳地形測量図（１：300） …… 10

Ⅲ－１－３図　横谷第９号古墳遺構配置図（１：200） …… 11

Ⅲ－１－４図　横谷第９号古墳土層断面図（１：100） …… 12

Ⅲ－１－５図　横谷第９号古墳埋葬施設実測図（１：20） …… 14

Ⅲ－１－６図　横谷第９号古墳出土遺物実測図（１：３） …… 15

寺山第１～４号古墳

Ⅲ－２－１図　寺山遺跡出土の石帯（１：２）…… 19
Ⅲ－２－２図　寺山第１～４号古墳地形測量図（１：500）…… 20
Ⅲ－２－３図　寺山第１～４号古墳東側調査区遺構配置図（１：150）…… 21
Ⅲ－２－４図　寺山第１号古墳埋葬施設実測図（１：30）…… 22
Ⅲ－２－５図　寺山第１号古墳土層断面図（１：60）…… 23
Ⅲ－２－６図　寺山第１号古墳出土遺物実測図（１：２，１：３）…… 24
Ⅲ－２－７図　寺山第１～４号古墳ＳＸ１実測図（１：30）…… 25
Ⅲ－２－８図　寺山第２号古墳埋葬施設実測図（１：30）…… 26
Ⅲ－２－９図　寺山第２号古墳土層断面図（１：60）…… 27
Ⅲ－２－10図　寺山第２号古墳出土遺物実測図（１：２，１：３）…… 28
Ⅲ－２－11図　寺山第３号古墳土層断面図（１：60）…… 30
Ⅲ－２－12図　寺山第３号古墳出土遺物実測図（１：３）…… 31
Ⅲ－２－13図　寺山第１～４号古墳西側調査区遺構配置図（１：150）…… 32
Ⅲ－２－14図　寺山第４号古墳実測図（１：40）…… 33
Ⅲ－２－15図　寺山第４号古墳埋葬施設実測図（１：30）…… 34
Ⅲ－２－16図　寺山第４号古墳出土遺物実測図（１：２，１：３）…… 35
Ⅲ－２－17図　寺山第１～４号古墳土塁状遺構土層断面図（１：60）…… 36
Ⅲ－２－18図　寺山第１～４号古墳土塁状遺構出土遺物実測図（１：３）…… 37
Ⅲ－２－19図　寺山第１～４号古墳ＳＫ１実測図（１：30）…… 37
Ⅲ－２－20図　寺山第１～４号古墳ＳＫ２実測図（１：30）…… 38
Ⅲ－２－21図　寺山第１～４号古墳ＳＫ２出土遺物実測図（１：３）…… 39
Ⅲ－２－22図　寺山第１～４号古墳ＳＫ３実測図（１：30）…… 40
Ⅲ－２－23図　寺山第１～４号古墳ＳＸ２実測図（１：60）…… 41
Ⅲ－２－24図　寺山第１～４号古墳ＳＸ２出土遺物実測図（１：３）…… 41
Ⅲ－２－25図　寺山第１～４号古墳作業風景…… 43

萩　原　城　跡

Ⅲ－３－１図　萩原城跡周辺地形図（１：5,000）…… 47
Ⅲ－３－２図　萩原城跡遺構図（１：500）…… 48
Ⅲ－３－３図　萩原城跡土層断面図１－郭１－（１：100）…… 49
Ⅲ－３－４図　萩原城跡出土遺物実測図１（１：３）…… 50
Ⅲ－３－５図　萩原城跡土層断面図２－郭２・郭３－（１：100）…… 52
Ⅲ－３－６図　萩原城跡出土遺物実測図２（１：３）…… 53
Ⅲ－３－７図　萩原城跡出土遺物実測図３（１：３）…… 54
Ⅲ－３－８図　萩原城跡出土古銭拓影（２：３）…… 55
Ⅲ－３－９図　萩原城跡出土遺物実測図４（１：３）…… 56
Ⅲ－３－10図　萩原城跡出土遺物実測図５（１：３）…… 57
Ⅲ－３－11図　萩原城跡一石経経塚実測図（１：40）…… 59

Ⅲ－3－12図　萩原城跡出土陽書経石実測図（1：2）…… 60
Ⅲ－3－13図　萩原城跡通路図（1：1,000）…… 62
Ⅲ－3－14図　萩原城跡高所部郭群測量図（1：2,000）…… 64
Ⅲ－3－15図　萩原城跡出土土錘寸法分布図…… 66

清替屋古墓・清替屋遺跡

Ⅲ－4－1図　清替屋古墓・清替屋遺跡周辺地形図（1：2,000）…… 71
Ⅲ－4－2図　調査前の清替屋古墓…… 72
Ⅲ－4－3図　清替屋古墓遺構図（1：80）…… 73
Ⅲ－4－4図　清替屋古墓埋葬施設実測図（1：20）…… 74
Ⅲ－4－5図　清替屋古墓出土遺物実測図1（1：3）…… 75
Ⅲ－4－6図　清替屋古墓出土遺物実測図2（1：6）…… 76
Ⅲ－4－7図　清替屋古墓出土石塔類実測図1（1：6）…… 77
Ⅲ－4－8図　清替屋古墓出土石塔類実測図2（1：6）…… 78
Ⅲ－4－9図　清替屋古墓出土石塔類実測図3（1：6）…… 79
Ⅲ－4－10図　清替屋古墓出土石塔類実測図4（1：6）…… 80
Ⅲ－4－11図　清替屋遺跡遺構配置図（1：300）…… 83
Ⅲ－4－12図　清替屋遺跡土層断面図1－上段－（1：100）…… 84
Ⅲ－4－13図　清替屋遺跡土層断面図2－下段－（1：100）…… 85
Ⅲ－4－14図　清替屋遺跡出土遺物実測図（1：3）…… 86
Ⅲ－4－15図　清替屋古墓の宝篋印塔（1：20）…… 87

宗像神社境内遺跡

Ⅲ－5－1図　宗像神社境内遺跡周辺地形図（1：2,000）…… 89
Ⅲ－5－2図　宗像神社境内遺跡遺構配置図（1：250）…… 90
Ⅲ－5－3図　宗像神社境内遺跡中央部北寄り地区遺構配置図（1：100）…… 91
Ⅲ－5－4図　宗像神社境内遺跡中央部西側地区遺構配置図（1：100）…… 92
Ⅲ－5－5図　宗像神社境内遺跡南西部地区遺構配置図（1：100）…… 93
Ⅲ－5－6図　宗像神社境内遺跡遺構実測図1
－SB1・SB2・SB3・SB4－（1：80）…… 94
Ⅲ－5－7図　宗像神社境内遺跡遺構実測図2－SD1・SD2－（1：80）…… 95
Ⅲ－5－8図　宗像神社境内遺跡遺構実測図3
－SK1・SK2・SK3・SK4・SK5－（1：40）…… 96
Ⅲ－5－9図　宗像神社境内遺跡遺構実測図4－SK11・SK12・SK13－（1：40）…… 97
Ⅲ－5－10図　宗像神社境内遺跡遺構実測図5－SX1・SX2・SX3－（1：80）…… 98
Ⅲ－5－11図　宗像神社境内遺跡遺構実測図6－SX2・SX3－（1：80）…… 99
Ⅲ－5－12図　宗像神社境内遺跡出土遺物実測図（1：2，1：3）…… 100
Ⅲ－5－13図　宗像神社境内遺跡出土の陶器小壺…… 103

表 目 次

Ⅰ－1表　調査遺跡一覧 …… 2
Ⅰ－2表　灰塚ダム建設に伴う調査遺跡一覧 …… 2

横谷第9号古墳
Ⅲ－1－1表　横谷第9号古墳出土遺物観察表 …… 16

寺山第1～4号古墳
Ⅲ－2－1表　寺山第1号古墳出土鉄鏃計測表 …… 25

萩 原 城 跡
Ⅲ－3－1表　萩原城跡出土古銭一覧 …… 55
Ⅲ－3－2表　萩原城跡出土土錘一覧 …… 57
Ⅲ－3－3表　萩原城跡一石経経塚出土墨書経石一覧 …… 61
Ⅲ－3－4表　萩原城跡土師質土器・輸入陶磁器出土数一覧 …… 65

清替屋古墓・清替屋遺跡
Ⅲ－4－1表　清替屋古墓出土石塔類一覧 …… 81

宗像神社境内遺跡
Ⅲ－5－1表　宗像神社境内遺跡出土遺物計測表 …… 101

図 版 目 次

巻頭図版　1　寺山第1～4号古墳遠景（北東から）
　　2　萩原城跡遠景（南西上空から）

横谷第9号古墳
図版1－1　a　調査前全景（東から）
　　b　全景（南東から）
　　c　遠景（南東から）
図版1－2　a　墳丘・周溝（北西から）
　　b　墳丘・周溝（南東から）
　　c　周溝（南西から）
図版1－3　a　埋葬施設遺物出土状況（南西から）
図版1－3　b　埋葬施設遺物出土状況（北東から）
　　c　埋葬施設（北東から）
図版1－4　a　埋葬施設（北西から）
　　b　埋葬施設完掘（北西から）
　　c　作業風景（北から）
図版1－5　出土遺物1　須恵器
図版1－6　出土遺物2　須恵器，土師器

寺山第１～４号古墳

図版２－１　a　丘陵先端部調査前全景（南西から）
　　b　調査前全景（南から）
　　c　遠景（東上空から）
図版２－２　a　東側調査区（南西から）
　　b　西側調査区（北東から）
　　c　遺跡見学会（南西から）
図版２－３　a　第１号古墳墳丘・周溝（南西から）
　　b　第１号古墳埋葬施設（東から）
　　c　第１号古墳埋葬施設遺物出土状況（南から）
図版２－４　a　ＳＸ１（東から）
　　b　第２号古墳墳丘・周溝（南西から）
　　c　第２号古墳埋葬施設遺物出土状況（南から）
図版２－５　a　第２号古墳埋葬施設完掘（東から）
図版２－５　b　第３号古墳墳丘・周溝（北西から）
　　c　土塁状遺構（南西から）
図版２－６　a　第４号古墳埋葬施設検出状況（西から）
　　b　第４号古墳埋葬施設壺石除去後（西から）
　　c　第４号古墳埋葬施設検出状況（北から）
　　d　第４号古墳埋葬施設壺石除去後（北から）
　　e　第４号古墳埋葬施設完掘（西から）
図版２－７　a　ＳＫ１（北東から）
　　b　ＳＫ２（東から）
　　c　ＳＫ３（北東から）
図版２－８　出土遺物１　須恵器，土師器，弥生土器
図版２－９　出土遺物２　須恵器，石製品
図版２－10　出土遺物３　鉄製品

萩原城跡

図版３－１　a　遠景（南西上空から）
　　b　遠景（北西上空から）
　　c　全景（北西上空から）
図版３－２　a　郭１全景－表土除去後－（北東から）
　　b　郭１全景－掘下げ後－（北東から）
　　c　郭１西側造成状況（東から）
図版３－３　a　郭２全景－表土除去後－（北東から）
　　b　郭２全景－掘下げ後－（北東から）
　　c　郭２岩盤面（南西から）
図版３－４　a　郭１から郭２への通路（南西から）
　　b　郭１から郭２への通路（南東から）
図版３－４　c　一石経経塚上部礫群（南から）
図版３－５　a　一石経経塚掘方内礫群（南から）
　　b　一石経経塚掘方内半割（南から）
　　c　一石経経塚完掘（南から）
図版３－６　a　一石経経塚墨書経石出土状況（北から）
　　b　郭２土師出土状況（東から）
　　c　郭２ふいごの羽口出土状況（南東から）
図版３－７　出土遺物１　土器，陶磁器
図版３－８　出土遺物２　土製品，石製品，鉄製品
図版３－９　出土遺物３　古銭，墨書経石

清替屋古墓・清替屋遺跡

図版４－１　a　遠景（南西上空から）
　　b　全景（上空から）
　　c　清替屋遺跡全景（西から）
図版４－２　a　清替屋古墓埋葬施設および
　　石塔類出土状況（北から）
　　b　清替屋古墓埋葬施設
　　（北から）
　　c　清替屋古墓埋葬施設
　　（西から）
図版４－３　a　清替屋遺跡下段東側の
　　自然石・礫群（北西から）
　　b　清替屋遺跡下段東側の
　　自然石・礫群（南西から）
　　c　清替屋遺跡ミニチュア土器
　　出土状況（東から）
図版４－４　出土遺物１　石塔類
図版４－５　出土遺物２　石塔類
図版４－６　出土遺物３
　　土器，陶器，土製品

宗像神社境内遺跡

図版５－１　a　全景（西上空から）
　　b　中央部西側地区遺構群
　　（北から）
　　c　ＳＸ１・ＳＤ１（西から）
図版５－２　a　ＳＸ２・ＳＸ３
　　（南西から）
　　b　ＳＫ１（西から）
　　c　ＳＫ３（南から）
図版５－３　a　ＳＫ４・ＳＫ５（西から）
　　b　ＳＫ11（西から）
　　c　ＳＫ12（南西から）
図版５－４　出土遺物１
　　土器，磁器，石製品
図版５－５　出土遺物２　土器，陶磁器

Ⅰ はじめに

江の川は，その源を中国山地に発し，三次市において，馬洗川・西城川・神野瀬川と合流し，島根県江津市において日本海に注いでいる。中国太郎と呼ばれ，長さ約194km，流域面積約3,870㎢の中国地方最大の河川である。灰塚ダムは，江の川総合開発事業の一環として計画された多目的ダムで，江の川の洪水調整，流水の正常な機能の維持と増進及び生活用水の供給確保を目的としている。双三郡三良坂町灰塚地区で，馬洗川の支流である上下川に建設が行われている。

建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）江の川総合開発工事事務所（以下，「建設省」という）は，昭和63（1988）年７月，当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて広島県教育委員会（以下，「県教委」という）と協議した。県教委ではこれを受けて現地踏査を行い，２か所の遺跡を確認したほか，19か所について試掘が必要である旨を回答した。その後，平成８（1996）年に宗像神社境内遺跡を，平成11（1999）年には，寺山第１～８号古墳，寺山遺跡，清替屋古墓・清替屋遺跡，横谷第８～11号古墳を現地踏査で確認した。また，荻原城跡については，事前に確認済みであった。これらの遺跡の取扱いについて県教委・三良坂町教育委員会（以下，「町教委」という）と建設省が協議を重ねた結果，事前に発掘調査することとなった。これを受け，建設省は文化財保護法第57条の３に基づいて，宗像神社境内遺跡については平成11（1999）年１月に，横谷第９号古墳，寺山第１～５号古墳，荻原城跡，清替屋古墓・清替屋遺跡については平成11年12月に文化庁長官あてに「埋蔵文化財発掘の通知」を提出し，センターに発掘調査の依頼を行った。センターは建設省と委託契約を結び，発掘調査を実施した。なお，調査の結果，寺山第１～５号古墳については，当初の第３号古墳と第５号古墳は古墳ではないことを確認したが，別に古墳１基を確認し，本報告書では寺山第１～４号古墳と訂正した。荻原城跡については，一部調査区の拡張が必要となり，この部分については町教委が発掘調査を実施した。また，横谷第３号古墳の名称を報告書では横谷第９号古墳に変更した。

調査期間中には町教委と共催で遺跡見学会を実施した。宗像神社境内遺跡については，平成11年10月24日に大谷遺跡，油免遺跡，土森遺跡と合同で開催し，約300名の参加があった。平成12（2000）年10月22日には，横谷第９号古墳，寺山第１～５号古墳，荻原城跡，清替屋古墓・清替屋遺跡について合同で開催し，約170名の参加があった。

本報告書は，以上のような経過のもとに行われた横谷第９号古墳，寺山第１～４号古墳，荻原城跡，清替屋古墓・清替屋遺跡，宗像神社境内遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであり，地域の歴史を解き明かす一助になれば幸いである。

最後に，発掘調査にあたっては，国土交通省中国地方整備局江の川総合開発工事事務所，三良坂町，三良坂町教育委員会，灰塚ダム建設対策同盟会及び地元の方々に多大なご協力をいただいた。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

Ⅰ－1表　調査遺跡一覧

遺跡名	所在地	内容	調査期間	調査担当者
横谷第9号古墳	三良坂町 大字灰塚字横谷1525-1	古墳時代中期 方墳か	2000年10月10日 ～2000年12月1日	横坂久己，山田繁樹
寺山第1～4号古墳	三良坂町大字灰塚 字横谷1540，1543，1544	古墳時代中期 円墳	2000年5月22日 ～2000年10月6日	横坂久己，山田繁樹 沢元保夫，立川敏之 河村靖宏
萩原城跡	三良坂町 大字大谷字大谷平53-2 大字灰塚字貝ノ平791 大字粟原字瀧山 150，151，152	中世～近世 郭群 一石経経塚	2000年7月3日 ～2000年10月27日 2001年4月3日 ～2001年4月6日	下津間康夫,糸賀省三 三良坂町教育委員会
清巻屋古墓・ 清巻屋遺跡	三良坂町 大字粟原字瀧山29,30,32	中世～近世 埋葬施設	2000年4月10日 ～2000年6月23日	下津間康夫,糸賀省三 石井哲之，河村靖宏
宗像神社境内遺跡	三良坂町 大字灰塚字土森1492外	中世～近世 掘立柱建物跡	1999年10月11日 ～1999年12月22日	横坂久己，山田繁樹

Ⅰ－2表　灰塚ダム建設に伴う調査遺跡一覧

遺跡名	所在地	内容	調査期間	掲載
寺津古墳群	吉舎町大字知和字加村36-1 字寺津41-2	古墳時代中期 前方後円墳・円墳	1989年10月30日 ～1990年3月9日	Ⅰ
見尾山第1・2号古墳	三良坂町大字灰塚 字遠ケ曽根1871	古墳時代後期 円墳	1989年11月13日 ～1990年3月16日	Ⅰ
見尾山第3・4号古墳	三良坂町大字灰塚 字遠ケ曽根1873	古墳時代後期 円墳	1992年1月6日 ～1992年3月13日	Ⅰ
見尾山遺跡	三良坂町大字灰塚 字遠ケ曽根1871	時期不明 積石遺構	1990年10月15日 ～1990年12月15日	Ⅰ
遠ケ曽根遺跡	三良坂町大字灰塚 字遠ケ曽根1870外	古墳時代後期 ～奈良時代 集落跡	1991年4月22日 ～1992年3月13日 1992年4月13日 ～1992年8月29日	Ⅱ
見尾東遺跡	三良坂町大字灰塚 字見尾13外	古墳時代後期 集落跡	1992年9月7日 ～1992年11月27日	Ⅲ
見尾西遺跡	三良坂町大字灰塚 字見尾11-1外	古墳時代後期 ～奈良時代 集落跡・横穴墓	1992年4月13日 ～1992年11月6日	Ⅲ
油免遺跡	三良坂町大字灰塚 字油免1406-1外，1400外	弥生時代後期 ～古墳時代 中・近世 集落跡	1998年4月13日 ～1998年11月27日 1999年4月12日 ～1999年11月26日	Ⅳ
大谷遺跡	三良坂町大字大谷 字横路167外	弥生時代後期 ～中・近世 集落跡	1999年4月12日 ～1999年12月22日	Ⅵ
土森遺跡	三良坂町大字灰塚 字土森1513外	弥生時代後期 ～古墳時代 集落跡	1999年4月12日 ～2000年2月26日 2000年4月10日 ～2000年5月26日	Ⅶ

※「掲載」の数字は，『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』の番号

Ⅱ 位 置 と 環 境

三良坂町は双三郡の東部に位置し，北は庄原市，南は双三郡吉舎町，東は甲奴郡総領町，西は三次市と接している。町の中央を南北に馬洗川が流れ，東西に蛇行する上下川が合流している。本書で報告する遺跡は，上下川流域に位置するものである。以下，これまでに町内で確認，発掘調査された遺跡を中心に歴史的環境を概観してみたい。

旧石器時代

塩ノ浦遺跡[1]から安山岩製のナイフ形石器，沖江滝王山遺跡[2]から黒曜石製の尖頭器が採集されており，生活の痕跡を示すものである。

縄文時代

油免遺跡では，前期後葉から後期中葉の土器片が出土し，陥穴の可能性がある土坑も検出されている。植松第1号古墳[3]では早期末頃の条痕文土器と石錐，植松第4号古墳[4]では石鏃や磨製石斧，皆瀬北遺跡[5]では後期の土器片と多量のやや小型の石錘，岡田山第3号古墳[6]では晩期後半の甕形土器片や剝片石器が出土している。

弥生時代

前期の遺跡は確認されていないが，中期以降の遺跡は増加する。集落跡としては，油免遺跡，土森遺跡，大谷遺跡で中期以降の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出されている。また，これらの遺跡からは，県北地域特有の「塩町式土器」が数多く出土している。ほかには，杉谷第2号遺跡[7]，杉谷第3号遺跡[8]，野曽原遺跡[9]，田利遺跡[10]，皇渡遺跡[11]などが存在する。

集落跡以外では墳墓群が知られる。杉谷第1号遺跡[12]では，土坑墓9基，小口配石土坑墓1基，箱式石棺墓2基，石蓋土坑墓3基の合計15基の墓が検出されており，時期は中期から後期にかけてのものと推定されている。大仙遺跡[13]では，後期末から古墳時代初頭の箱式石棺墓3基，土坑墓1基，土器棺墓1基が確認されている。

古墳時代

発掘調査が行われている集落跡として，油免遺跡，土森遺跡，大谷遺跡，宮風呂遺跡[14]，杉谷第2号遺跡，杉谷第3号遺跡，見尾西遺跡[15]，見尾東遺跡[16]，道ヶ曽根遺跡[17]がある。油免遺跡では両側に張り出しを持つ竪穴住居跡が検出され，土森遺跡では山陰系の甑形土器，大谷遺跡では山陰系の二重口縁の甕，筒形器台等の土師器が出土している。また，見尾西遺跡，見尾東遺跡，道ヶ曽根遺跡では，多量の鉄滓が出土し，鍛冶炉が検出されている。これらの遺跡は近接した位置にあり，鉄生産に携わった集団の集落跡と推定されている。

製鉄関連の遺跡として，白ヶ迫製鉄遺跡[18]があり，砂鉄を原料とした製錬炉が2基検出されている。また，半地下式で横口の構造を持つ窯で，付近の製鉄遺跡に炭を提供したと考えられている植松窯跡[19]が確認されている。

三良坂町内では，500基余りの古墳が確認されている。大半が横穴式石室導入以前の小円墳で古墳群を形成している。岡田山第３号古墳[92]は二重土坑を埋葬施設とする円墳で，既往の調査の中では最古となる５世紀前葉に比定されている。杉谷第９号古墳[93]は箱式石棺２基を埋葬施設とする円墳で，うち１基の石棺内から赤色顔料が付着した壮年男子と考えられる頭蓋骨が出土している。築造時期は５世紀初頭から６世紀初頭に推定されている。稲荷山Ｄ－２号古墳[94]は墳丘裾部に葺石を配し，土坑を埋葬施設とする円墳である。鉄製の鋸が出土しており，６世紀代の築造とされている。植松第１号古墳[95]は土坑と粘土郭の２つの埋葬施設をもつ円墳で，５世紀後半から６世紀前半と推定されている。植松第４号古墳[96]の箱式石棺から６世紀前葉の須恵器が出土しており，この時期頃から埋葬施設への須恵器の埋納が始まったものと考えられている。

６世紀後半になると横穴式石室を埋葬施設とする例が増加し，植松第２・３号古墳[97]，皇渡古墳[98]，見尾山第１～４号古墳[97]，田戸北第１・２号古墳[99]，田戸南第１～３号古墳[98]，田戸古墳[94]などがある。副葬品として，須恵器，勾玉等の装飾品，多量の鉄製品が出土しており，築造時期は６世紀後半から７世紀前半に比定されている。これらの古墳の多くは石室が無袖式で，玄室床面に須恵器を敷いたり仕切石を設けるなど，江の川とその支流域に顕著な地域的特色を持つ構造を有している。見尾西遺跡[96]のＳＴ１は小型の横穴式石室で，石室床面には板状の石が敷かれており，７世紀後半頃の築造とされている。

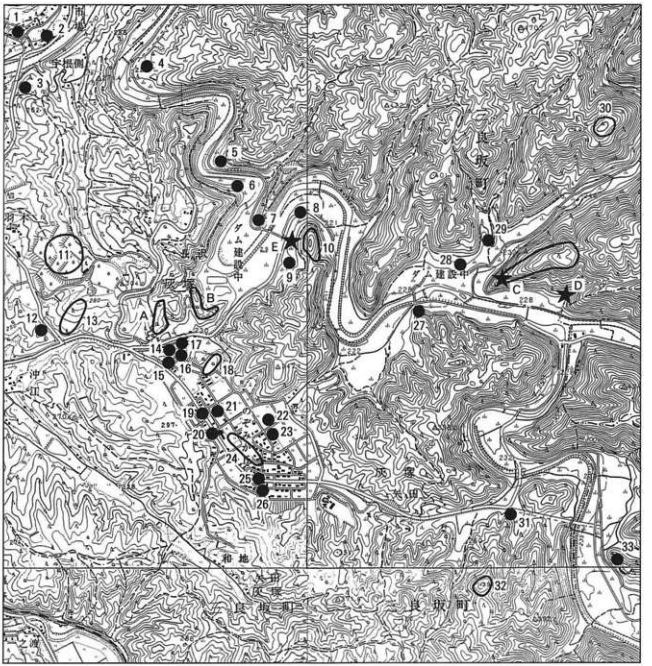
古　代

三良坂町は，備後国の三谿郡に属していたとされる。道ヶ曽根遺跡[99]は，古墳時代から鍛冶作業に携わる性格を有し，集落規模が拡大する７世紀後半段階では，より専業的な色彩を帯びた鍛冶作業を行ったことが指摘されている。また，７世紀後半から８世紀前半に位置づけられる円面硯が７点出土していることから，この時期の拠点的集落であったと考えられている。野竹遺跡（Ａ地点）[97]は７世紀前半から８世紀中頃，野竹遺跡（Ｂ地点）[94]は７世紀から10世紀，野竹遺跡（Ｃ地点）[98]は７世紀から12世紀の集落跡で，野竹遺跡（Ｂ地点）は鉄生産との関連が指摘されている。大谷遺跡では，古代末と推定される礎石建物跡が４棟検出されている。寺山遺跡では，試掘時に墓坑と考えられる落ち込みが検出され，石帯や須恵器が出土している。

中　世

各地に城館が築かれた時代で，三良坂町では11カ所が確認[98]されている。三谿郡において，在地領主・国人領主として勢力を伸ばしたのは広沢氏の一族である。上下川流域を支配領域としたのは，後に湯谷氏を名乗る田利広沢氏で，数カ所の城館との関わりが伝えられている。戦国時代に湯谷氏が本拠としたとされるのが萩原城跡で，驚の低丘陵には丸子山館跡がある。おこん城跡，矢田の陣山城跡は，萩原城跡と狼煙によって情報連絡がなされた可能性が指摘[97]されている。福山城跡[98]では，堀切状の溝，墓穴，土坑，焼土坑，ピット群などが検出されている。ピット群は一カ所に集中していることから，逆茂木を設けた穴ではないかと考えられている。また，福山城跡に近接する油免遺跡では，中世の掘立柱建物跡を検出している。

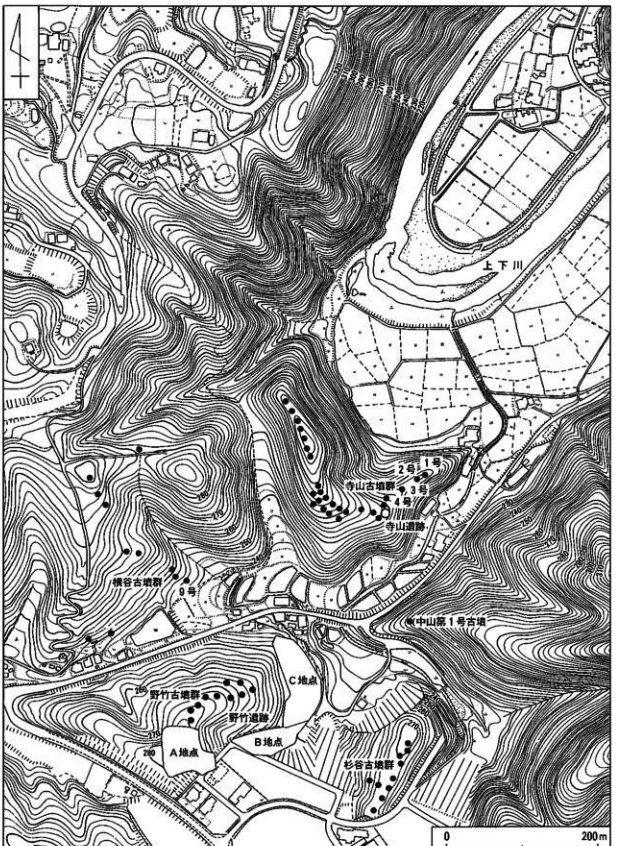
そのほか，田利古墓，寄国中世墳墓，矢田古墓[98]などの墳墓がある。矢田古墓は，湯谷氏によ



Ⅱ－１図　周辺主要遺跡分布図（１：25,000）

A．横谷古墳群　B．寺山古墳群　C．萩原城跡　D．清替屋古墓・清替屋遺跡　E．宗像神社境内遺跡

1．皇渡古墳	2．皇渡遺跡	3．兎峠古墳群	4．小塩野古墳	5．田戸北古墳群
6．田戸南古墳群	7．田戸古墳	8．油免遺跡	9．土森遺跡	10．福山城跡
11．長宇根古墳群	12．沖江滝王山遺跡	13．長宇根南古墳群	14．野竹古墳群	15．野竹遺跡（A地点）
16．野竹遺跡（B地点）	17．野竹遺跡（C地点）	18．杉谷古墳群	19．杉谷第１号遺跡	20．杉谷第２号遺跡
21．杉谷第３号遺跡	22．見尾西遺跡	23．見尾東遺跡	24．道ケ曽根遺跡	25．見尾山古墳群
26．見尾山遺跡	27．日野迫古墳群	28．大谷遺跡	29．丸小山館跡	30．おこん城跡
31．矢田古墓	32．陣山城跡	33．寺津古墳群		



Ⅱ－2図　横谷古墳群・寺山古墳群周辺遺跡分布図（1：5,000）

る創建と伝えられる顕徳寺の前面に位置している。宝篋印塔，刀子などが出土しており，室町時代後半の時期の武士の墓とされている。

近　世

油免遺跡で掘立柱建物跡と墓坑群，土森遺跡で墓坑群と麻窯跡，大谷遺跡で墓坑群が検出されている。また，灰塚地区では，宗像神社の石灯籠や手水鉢，廃白鷺寺の宝篋印塔や一字一石塔，日蓮宗関連の題目塔，読誦塔，供養塔や庚申塔，巡国塔などの石造物が確認されている。

註

(1)　広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『地宗寺遺跡発掘調査報告』 1982年

(2)　三良坂町教育委員会『稲荷山D－2号古墳』 1983年

(3)　河瀬正利・向田裕始「双三郡三良坂町植松第1号古墳発掘調査報告」『芸備』第3集　芸備友の会　1975年

(4)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植松遺跡群－植松第2号・3号・4号古墳・植松窯跡－』 1987年

(5)　広島県双三郡三次市史料総覧編集委員会編『広島県双三郡三次市史料総覧』第5篇　広島県双三郡三次市史料総覧刊行会　1974年　および註(3)

(6)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『岡田山第3号古墳発掘調査報告』 1984年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『三良坂町の原始・古代と岡田山第3号古墳発掘調査の記録』 1986年

(7)・(8)　三良坂町教育委員会によって1991～1992年度に発掘調査が行われている。

(9)・(10)　三良坂町誌編集委員会編『三良坂町誌』 三良坂町　1973年

(11)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『桑渡古墳発掘調査報告』 1987年

(12)　三良坂町教育委員会『杉谷A地点遺跡』 1997年

(13)　三良坂町教育委員会『大仙遺跡・御箱山1号古墳』 1994年

(14)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『宮風呂遺跡』 1994年

(15)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「見尾西遺跡」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ)』 1998年

(16)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「見尾東遺跡」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ)』 1998年

(17)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「道ケ曽根遺跡」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)』 1998年

(18)　三良坂町教育委員会『白ケ迫製鉄遺跡』 1994年

(19)　註(4)と同じ

(20)　註(6)と同じ

(21)　三良坂町教育委員会『杉谷第9号古墳』 1999年

(22)　註(2)と同じ

(23)　註(3)と同じ

(24)・(25)　註(4)と同じ

(26)　註(11)と同じ

(27)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「見尾山古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)』 1994年

(28) 三良坂町教育委員会によって1997年度に発掘調査が行われている。

(29)・(30) 三良坂町教育委員会によって1998年度に発掘調査が行われている。

(31) 註(15)と同じ

(32) 註(17)と同じ

(33)・(34)・(35) 三良坂町教育委員会『野竹遺跡群』 2002年

(36) 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第4集 1996年

(37) 新祖隆太郎「広島県灰塚ダム周辺の歴史環境－中世考古資料－」(「灰塚ダム湖とその周辺の生活」編集委員会編『灰塚ダム湖とその周辺の生活』) 灰塚ダム建設三町連絡協議会 1998年

(38) 三良坂町教育委員会によって1999年度に一部の発掘調査が行われている。

(39) 三良坂町教育委員会『矢田古墓』 1999年

(40) 藤村耕市・中畑和彦「広島県灰塚ダム周辺の歴史環境－歴史資料－」(「灰塚ダム湖とその周辺の生活」編集委員会編『灰塚ダム湖とその周辺の生活』) 灰塚ダム建設三町連絡協議会 1998年

Ⅲ 調 査 の 遺 跡

1 横谷第９号古墳

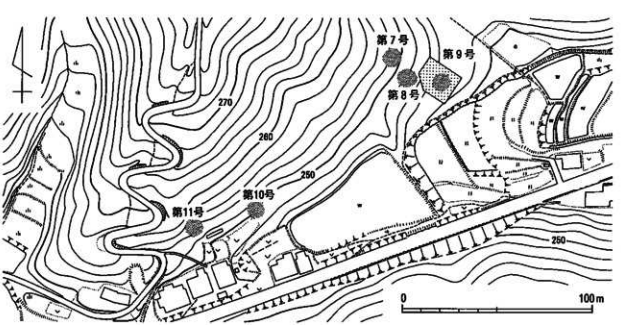
(1) 調査の概要

立地と環境（Ⅱ－２図，Ⅲ－１－１図）

三良坂町域のほぼ中央部にある才の峠は，三良坂町沖江地区と灰塚地区の境をなし，旧県道稲草三良坂線は，峠を東に越えてやがて上下川に沿うように走り，総領町と結ばれていた。横谷古墳群は，才の峠の北側の丘陵上及び斜面に立地している。北に入り込む谷を挟んで東側の丘陵上には寺山古墳群（27基），旧県道を挟んで南側の丘陵上には野竹古墳群（10基），丘陵斜面には野竹遺跡，野竹遺跡と対峙する丘陵上には杉谷古墳群（10基）が存在している。三良坂町教育委員会の発掘調査により，杉谷第９号古墳[1]（現地保存）は５世紀初頭から６世紀初頭の間の古墳と推定され，野竹遺跡[2]では，Ａ地点で７世紀前半から８世紀中頃，Ｂ地点で７世紀から10世紀，Ｃ地点で７世紀から12世紀の集落跡が確認されている。横谷古墳群・寺山古墳群・野竹古墳群・杉谷古墳群は，いずれも径が10m前後の円墳を中心とする古墳群で，石室部分と見られる石材は露出していない。なお，これらの遺跡や古墳群を一望し，寺山古墳群と杉谷古墳群に挟まれる丘陵上に立地する中山第１号古墳は横穴式石室墳である。

横谷古墳群を含むこれらの遺跡は，上下川に注ぐ小河川に沿って形成された谷と，さらに分枝した小谷に面した現境にある。谷は奥部まで開墾され，棚田状の水田が近年まで営まれている。それぞれの谷間には，集落間を結ぶ生活道が通っていた。

横谷古墳群は11基の古墳で構成され，丘陵頂部（３基）・尾根上（３基）・丘陵裾部（５基）の



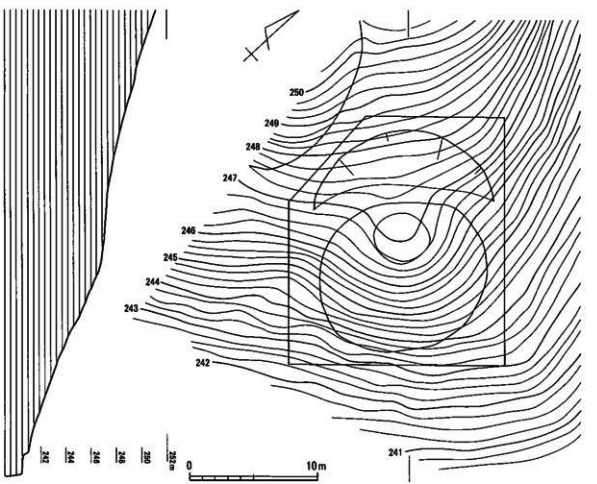
Ⅲ－１－１図　横谷第９号古墳周辺地形図（１：2,000）

3支群に分かれる。裾部の5基については，位置的に西側の2基（第10・11号）と東側の3基（第7・8・9号）に分かれ，両者は直線距離で約110m離れている。横谷第9号古墳は，東側3基の中の東側にあるもので，標高はこれらの中で最も低い247m前後になる。

調査の概要

横谷第9号古墳の墳頂部と麓の水田との標高差は約8.5mあり，調査前は山林となっていた。古墳から南西へ40mの地点に溜池があり，周辺は堰堤構築時の土取りや水路などにより旧地形が保たれていない。また，古墳の南側では堰堤に至る道と水田保護のため，コンクリートブロックによる護岸工事が行われている。地表面の観察では，墳頂部や斜面に石材の露出は確認できなかった。

調査はまず地形測量を実施し，径が12m前後の円墳であることを想定した。次いで，土層観察の畦を2方向に設定し，表土から順次掘り下げていった。その結果，山側に周溝を掘り込み，その土を盛ることによって墳丘を造っており，一辺9mの方墳の可能性があることが判明した。埋葬施設はほとんど流出していたが，石材の一部が残存しており，その配置状況から長辺1.8m，

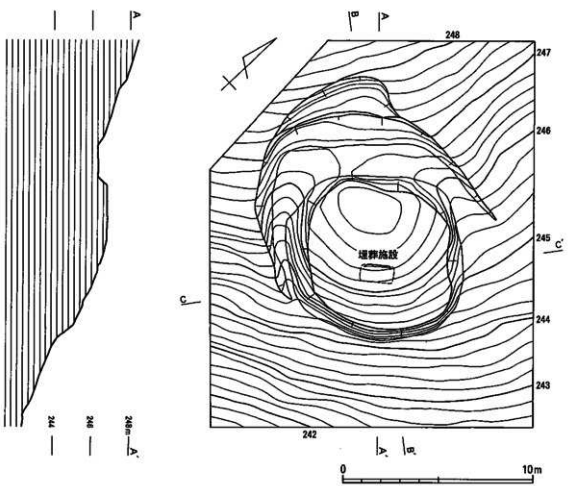


Ⅲ－1－2図　横谷第9号古墳地形測量図（1：300，方位の北は磁北）

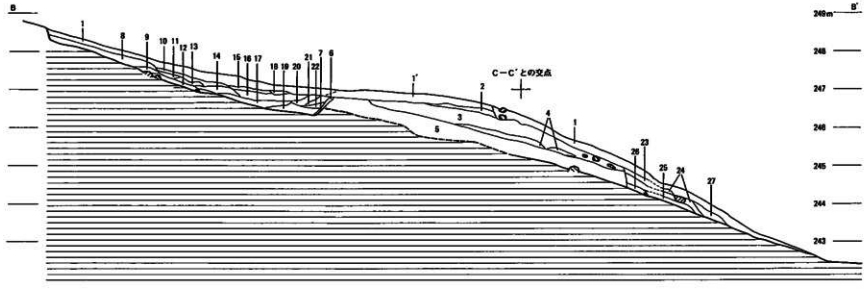
短辺0.9mの墓坑が設けられ，内部には石材を竪穴式石室状に積み上げていたことが推定できる。

遺物には，埋葬施設の石材の外周から出土した須恵器があり，その特徴から古墳の年代は6世紀前半と考えられる。そして，周溝から墳丘の上部にかけて，北西側の斜面から流れ込んだ土が堆積しており，周溝の上層部分からは，器表面にタタキ目が残る土師器や輪状のつまみの付く須恵器杯蓋が出土している。7～8世紀代のものと推定され，野竹遺跡群と重複する年代になる。また，第9号古墳と西側の第10・11号古墳の間の緩斜面に，7～8世紀代の集落跡などが存在した可能性もある。

横谷第9号古墳の北西側には，第8号古墳が近接している。第9号古墳の調査区内で，第8号古墳の周溝が検出できれば，両古墳の構築の前後関係が確認できる可能性もあったが，第8号古墳の周溝は検出できず，この点は明らかにならなかった。また，調査区内の北側や東側の斜面に，20～50cm大の河原石が散乱していた。調査区外でも河原石が確認され，近辺に集石による遺構が存在した可能性がある。



Ⅲ－1－3図　横谷第9号古墳遺構配置図（1：200，方位の北は磁北）



1 黄褐色土
1′ 黄褐色土（1より暗い）
2 黄灰褐色土
3 暗茶灰褐色土
（小礫・黄褐色土塊を含む）
4 淡茶灰褐色土
（小礫多く，黄褐色土を含む）
5 黒褐色土（黒ボク層）
6 暗茶灰褐色土
7 暗灰褐色土（淡黄褐色土を含む）
8 淡茶灰褐色土
9 淡暗茶褐色土
10 暗茶褐色土
11 暗灰褐色土
12 淡暗灰褐色土
13 淡暗灰褐色土
（12より暗い，淡黄褐色土を含む）
14 暗茶灰褐色土
15 淡茶褐色土（小礫を含む）
16 暗茶灰褐色土（小礫を含む）
17 灰褐色土（小礫を含む）
18 茶褐色土
19 暗灰褐色土
20 淡灰褐色土
21 淡灰褐色土（小礫を含む）
22 暗灰褐色土
23 暗茶灰褐色土
24 黒灰褐色土
25 暗灰褐色土
26 暗茶灰褐色土
27 灰褐色土
28 暗茶灰褐色土
29 黒灰褐色土
30 黒褐色土
31 暗灰褐色土
32 暗灰褐色土
33 暗茶灰褐色土
34 黒灰褐色土
35 暗茶褐色土

0 5m

Ⅲ－1－4図 横谷第9号古墳土層断面図（1：100）

(2) 遺構と遺物

墳丘・周溝（Ⅲ－1－3・Ⅲ－1－4図，図版1－2a・b・c）

墳丘部分の基本的な層序は，上層から腐植土（表土），黄褐色土，茶灰褐色土，黒褐色土（「黒ボク」層），黄褐色粘質土（礫を含む・無遺物層）である。古墳周辺の層序は，表土，黒褐色土，黄褐色粘質土が堆積しており，墳丘部分の茶灰褐色土が人為的に盛られた層，黄褐色土は北西側の斜面から流れ込んだ層になる。

墳丘の構築に際しては，基本的な平面形を設定し，山側になる北から西側の斜面に溝を掘り込み，排出された土を盛ったものと推定される。墳丘の整形は，南側を除いて地盤を削り出すことによってなされ，南側は盛り土によるものである。溝の平面形と墳丘の南側を除く形状が直線的であることから，一辺が9m程度の方墳であった可能性がある。

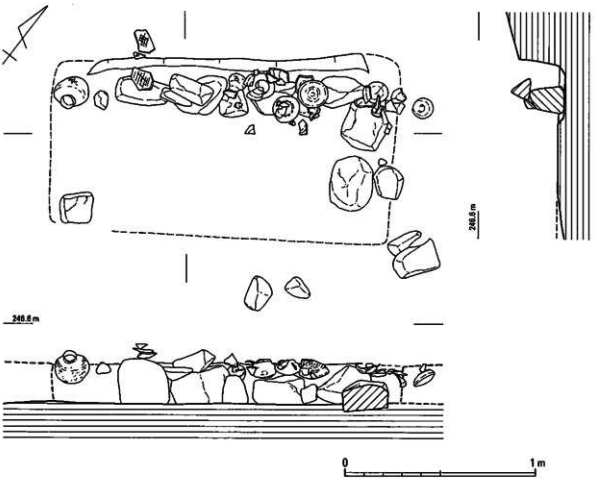
墳丘斜面の傾斜角度は約60°であるが，本来の高さは墳丘上部の流失により不明である。ただ，南東側の墳裾部は標高244.4m，現存する墳丘部分の最高所は標高246.9mで，2.5mの標高差がある。また，埋葬施設の床面の標高は246.2mで盛り土内にある。なお，南東側の墳裾部付近の盛り土中には，40cm大の円礫が散在しており，盛り土の流出を防ぐためのものと想定される。

周溝は墳丘の北側から西側・南西側に掘り込まれている。検出した規模は，外周の長さでは，北側で7.5m，北西側7.0m，南西側8.5mである。底面については，西側から南西側の遺存状況が良好で，緩やかにくぼんでいる。幅は西側で最大1.8mあり，徐々に細くなり，南西側では0.7～0.3mになる。北側は底面の幅が2.0mと広がって終結する。なお，北西側では，掘り込みの外周が崩れた様子が土層観察からうかがえる。現存する墳丘からの深さは，北側で0.6m，西側で0.5m，南西側で0.7mになる。出土遺物には，埴土上層の土師器甕，須恵器の杯蓋・甕がある。

埋葬施設（Ⅲ－1－5図，図版1－3a・b・c，1－4a・b）

埋葬施設は墳頂部の中心からやや南東寄りに構築されている。石材が並び，これに伴う掘方を持つものである。しかし，墳丘については，北西部から南東側へ向かっての盛り土の流出が顕著で，それに伴って埋葬施設も大部分が流出しており，形状や構造は明らかでない。ただ，石材の遺存状況や掘方の壁がほぼ垂直に立ち上がることから，長辺1.8m，短辺0.9mの規模になる埋葬施設であったと想定される。長軸の方向はN47°Eと東へ振れ，頭位は不明であるが，寺山古墳群の調査例からすれば，北東側の可能性がある。検出した掘方の上面から床面までの深さは約25cmで，床面はほぼ平坦である。なお，玉類などの装飾品は出土しなかった。

石材は北西側と北東側のものが残り，さらに南隅と推定されるものがある。本来は，4面に石材が積まれていたと想定される。残る石材は比較的小さく，平坦面を持つ河原石である。北西側が埋葬施設の長辺，北東側が短辺になる。北西側の状況をみると，15×30cm前後のやや大きい長方形の石材の広口面を内側へ向け，掘方の壁に沿うように配置している。これらの石材の間隙にはやや小さい石材が組まれ，平坦面が内側に向けられている。そして，一部ではあるが2段目の石材が残っていた。ただ，この状況では遺体を納めるだけの高さは確保できず，さらに数段の石



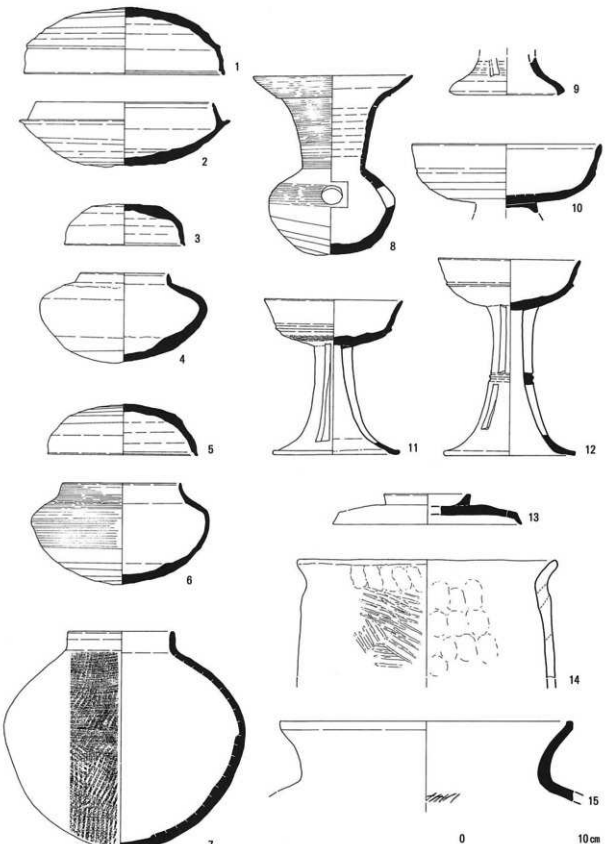
Ⅲ－１－５図　横谷第９号古墳埋葬施設実測図（１：20，方位の北は磁北）

材が積まれていたであろう。北東側の石材は，北西側の石材より大きく，20×30㎝の方形に近いものを２個使用している。南隅の石材と併せると，内部の規模は長辺1.2m，短辺0.5mに復元できる。

出土遺物は全て須恵器で，点数は少ないがほとんど図化できた。蓋杯，蓋付短頸壺（２組）・短頸壺，𤭯，無蓋長脚高杯などがあり，器種構成は豊富である。個々の出土状況をみると，セットになる杯蓋と杯身が天地逆の状態で出土し，この杯身は部分的に短頸壺の上部に被さっていた。出土品の多くは石材の上面に位置し，床面に接するものはないことから，ほとんどは原位置を保っていないと考えられる。おそらく，盛り土の流出時に移動したものであろう。なお，北東から南西へ向けて，高杯，杯身，杯蓋，短頸壺の順で出土しており，本来の位置関係を示す可能性もある。このほか，甕の破片がある。

出土遺物（Ⅲ－１－６図，図版１－５，１－６）

１～12は埋葬施設から出土した須恵器である。１の杯蓋と２の杯身，３の蓋と４の短頸壺，５の蓋と６の短頸壺は，それぞれセットになる。１・３・５は，いずれも口縁端部内側に明瞭な段



Ⅲ－１－６図　横谷第９号古墳出土遺物実測図（１：３）

を持つ。1の外面には，体部と天井部の境に比較的明瞭な段が残り，天井部付近にはヘラ削りが施される。3の外面天井部は，ヘラ削りの後にナデによる調整がなされている。7は短頸壺で，上部と下部を別に作り，胴部最大径よりやや下の部位で接合している。外面下半にはタタキ目が残るが，上半は調整により不明瞭な部分が多い。内面も下半には同心円文が明瞭に残るが，上半は部分的である。8の鐙の外面には，肩の部分にある孔の周辺と頸部から口縁部にかけてカキ目，底部に回転ヘラ削りが施される。9は高杯の脚部で，透しが確認できる。10は高杯の杯部で，体部の外面には段がある。11・12は無蓋長脚の高杯である。11の杯部の外面は，体部に段があり，底部周辺に6条の波状文が施される。脚部には3方に1段の透しがある。12の杯部の外面体部にも段がある。脚部には3方に2段の透しがあり，上下の透しの間に凹線状のくぼみが2条ある。

13～15は周溝の上層の埋土から出土したもので，この埋土は北西側の斜面から流れ込んだものである。13は壷で，天井部に輪状のつまみを貼り付けている。14は土師器の長胴甕である。内面にあて具を使用せず外面にタタキを施したとみられ，口縁部は指頭による成形の後にナデている。15は須恵器の甕である。口縁部は直立気味で端部は平坦になり，体部内面には同心円文が明瞭に残り，外面にはロクロによるナデが行われている。

Ⅲ－1－1表　横谷第9号古墳出土遺物観察表(1)

番号	品種	出土位置	寸法（cm）		成形・調整		色調	焼成	備考
			口径	器高	外面	内面			
1	須恵器 杯蓋	埋葬施設	15.8	5.3	天－回転ヘラ削り後 未調整　体－明瞭な後 口－回転ナデ	回転ナデ　口端－段	淡青灰色	硬	時計逆回転
2	須恵器 杯身	埋葬施設	14.0	5.2	底－回転ヘラ削り 体～口－回転ナデ 受－段	回転ナデ	淡青灰色	硬	時計逆回転
3	須恵器 蓋	埋葬施設	9.5	3.2	天－回転ヘラ削り後ナデ 体～口－回転ナデ	回転ナデ　口端－段	青灰色	硬	自然釉
4	須恵器 短頸壺	埋葬施設	7.0	7.1	底－回転ヘラ削り 体～口－回転ナデ	底－指頭 体～口－回転ナデ	青灰色	硬	時計逆回転 自然釉 胴径13.1cm
5	須恵器 蓋	埋葬施設	11.8	4.9	天－回転ヘラ削り 口－回転ナデ	回転ナデ　口端－段	淡青灰色	硬	時計逆回転
6	須恵器 短頸壺	埋葬施設	9.3	8.0	底－回転ヘラ削り 体～口－カキ目	回転ナデ	淡青灰色	硬	時計逆回転 胴径14.0cm
7	須恵器 短頸壺	埋葬施設	8.4	16.3	口－回転ナデ 体上－タタキ後カキ目 体下～底－タタキ	口～回転ナデ 体上－ナデ 体下～底－同心円文	淡青灰色	硬	
8	須恵器 鐙	埋葬施設	(12.5)	14.2	口～頸－カキ目 底－ヘラ削り	回転ナデ	淡青灰色	硬	時計回転 自然釉 胴径9.9cm 孔径1.7cm

Ⅲ－１－１表　横谷第９号古墳出土遺物観察表(2)

番号	品種	出土位置	寸法（cm）		成形・調整		色調	焼成	備考
			口径	器高	外面	内面			
9	須恵器 高杯脚	埋葬施設			透周辺－凹線状の窪み 回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色	硬	底径9.0cm
10	須恵器 高杯杯	埋葬施設	(15.0)		底－回転ヘラ削り 体－明瞭な稜	回転ナデ	淡緑灰色	硬	透－３方
11	須恵器 高杯	埋葬施設	10.9	12.2	透－１段・３方 杯・口～体－回転ナデ 杯・底－波状文（６状）	杯－回転ナデ	淡緑色～ 淡青灰色	硬	自然釉 底径10.0cm
12	須恵器 高杯	埋葬施設	11.2	15.5	透－２段・３方 回転ナデ 杯・体－明瞭な稜	杯－回転ナデ	淡緑色	硬	底径10.4cm
13	須恵器 蓋	周溝上層	(14.9)		つまみ－貼り付け 回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色	硬	
14	土師器 甕	周溝上層	(20.4)		ロ－指頭ナデ 体－タタキ	ロ－指頭ナデ	乳褐色	中	
15	須恵器 甕	周溝上層	(23.2)		回転ナデ	ロ－回転ナデ 頸－同心円文	青灰色	硬	

※寸法の（　）は復元値

(3) 小　結

横谷古墳群は11基の古墳で構成され，第９号古墳は最も標高の低い場所に位置している。調査の結果，一辺が９ｍ程度の方墳であった可能性がある。古墳の年代について，1989年に調査が行われた寺津古墳群[3]（吉舎町）から出土した須恵器と比較することで考えてみたい。

寺津古墳群は，上下川と田総川が合流する地点から南側へ約1.5kmの位置にあり，丘陵尾根上に立地する６基の古墳で構成されている。第３号古墳が前方後方墳，そのほかの５基は円墳である。第１・２号古墳から出土した須恵器は，胎土分析により「陶邑産」の可能性が高く，ＴＫ10型式[4]の前後に相当するものである。そして，第１号古墳が第２号古墳よりやや時期が新しく，前者を６世紀中葉，後者を６世紀前葉の築造と捉えている。横谷第９号古墳から出土した須恵器について，杯蓋は天井部と体部の境が明瞭であり，口縁部内側に明瞭な段を持つことや，器種の構成などに両古墳からの出土品と類似していることが認められる。原位置から移動しているが，埋葬施設に伴うものであろう。こうした点から，築造段階までは明らかでないが，横谷第９号古墳は６世紀前半のものであろう。

横谷第９号古墳の埋葬施設については，流出により構造は不明確である。ただ，石材を方形に配置し数段積んでいた可能性があることと，短辺に２個の石材が使用されていることから，箱式石棺でなく竪穴式石室の可能性を指摘できる。そして，埋葬施設の墳丘上の位置は，墳頂部の中心でなく，やや南東寄りに構築されている。寺津第２号古墳も，埋葬施設は墳頂部の中心からず

れて構築されている。この点については，後に埋葬施設が構築される空間として準備された可能性が指摘[5]されている。

横谷第９号古墳は，横谷古墳群の中で最も標高の低い場所に位置し，６世紀前半のものになる。横谷古墳群に近接する丘陵には杉谷古墳群があり，高所の第９号古墳は５世紀初頭から６世紀初頭の間と推定[6]されている。また，寺津古墳群では，丘陵の頂部から下部に向けて，順次古墳が築造されている[7]。こうしたことから，横谷古墳群では，第９号古墳が最後に築造された可能性があり，近辺の土森遺跡や油免遺跡で５世紀代の集落が確認されていることからすれば，本古墳群は５世紀代から築造され始めたと考えることができる。

註

(1) 三良坂町教育委員会『杉谷第９号古墳』 1999年

(2) 三良坂町教育委員会『野竹遺跡群』 2002年

(3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺津古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)』1994年

(4) 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年

(5)・(6) 註(1)と同じ

(7) 註(3)と同じ

2　寺山第１～４号古墳

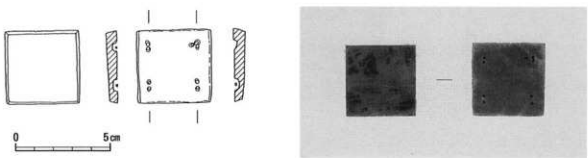
(1)　調査の概要

寺山古墳群は，三良坂町大字灰塚に所在し，谷を挟んで200m西側の丘陵上には横谷古墳群が存在している。第１号古墳より南西側から北側に向けて高まっていく丘陵尾根上に，現段階で27基が確認されている。当初，寺山第１～５号古墳として調査を行ったが，結果として第３号古墳は古墳ではなく，第５号古墳も土墓状の遺構であることが判明した。よって，当初の第４号古墳を第３号古墳に，新たに確認された箱式石棺を第４号古墳とし，寺山第１～４号古墳と訂正した。

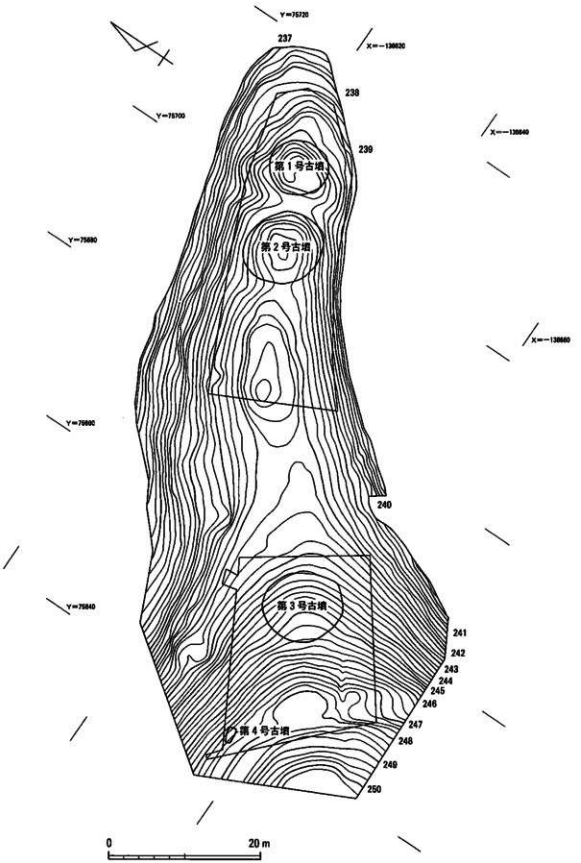
第１・２号古墳は標高240～242mに位置し，第１号古墳が丘陵最先端部に，第２号古墳がその南西側に接して築造されている。第１号古墳は径7.5m，第２号古墳は径9.5～10.5mの円墳である。埋葬施設として，共に１基の土坑を検出した。遺物は，第１号古墳は埋葬施設から鉄刀と鉄鏃，第２号古墳は埋葬施設から鉄剣，墳裾部の平坦面から鉄鎌・砥石・敲石がまとまった状態で出土した。第３号古墳は第１・２号古墳から南西に向けて高まる丘陵尾根の標高243～245mに位置している。径9.5mの円墳で，周溝を検出したが墳丘はかなり流出しており，埋葬施設は確認できなかった。第４号古墳は第３号古墳の約16m西の標高247mに位置する。墳丘の流出が激しく，調査区外に延びるため全容は明らかでない。埋葬施設は箱式石棺である。遺物は周溝と考えられる溝内から鉄鎌，石棺の蓋石の上部から須恵器片が出土した。

古墳以外には，第１号古墳の墳丘盛り土の下部から河原石が散在する性格不明の遺構（ＳＸ１），第３号古墳の南西側で幅３m，長さ16m以上の溝を掘り込み，排出した土を盛った土墓状の遺構，北西側で陥穴と考えられる土坑（ＳＫ１），北側で須恵器の甕を２個体分破砕して床面に敷く，いわゆる須恵器敷床の土坑（ＳＫ２），東側で焚火跡の可能性がある小土坑（ＳＫ３），ＳＫ２と重複し，弥生土器が出土している性格不明の遺構（ＳＸ２）を検出した。

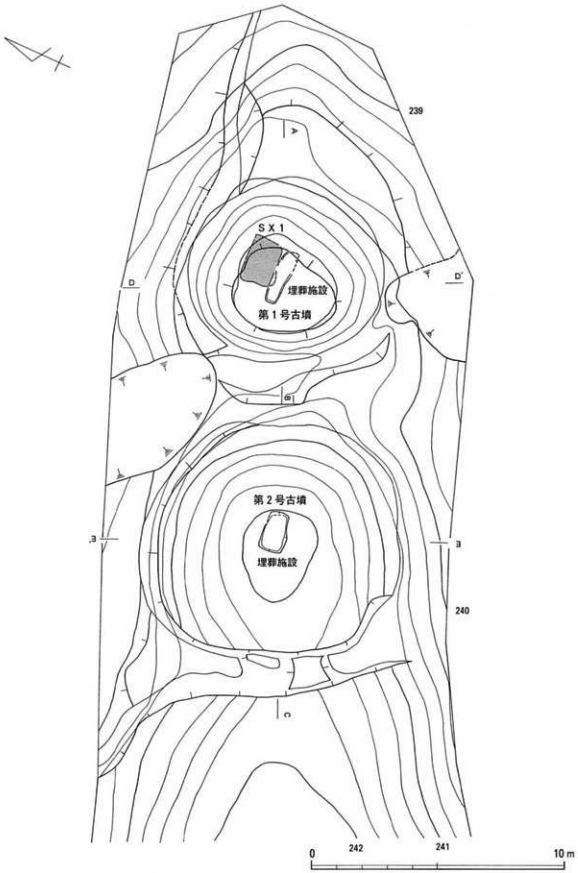
なお，試掘調査時に第４号古墳の南側に位置する寺山遺跡[1]より石帯（Ⅲ－２－１図）が出土している。形態は巡方で，縦3.9cm，横3.9cm，厚さ0.45～0.65cm，重さ17.3ｇである。４隅に潜り孔があるが，１か所は破損によりあらためて穿たれている。色調は淡茶色が混じる淡緑灰色で，石材は蛇紋岩[2]である。



Ⅲ－２－１図　寺山遺跡出土の石帯（１：２）



Ⅲ－2－2図　寺山第1～4号古墳地形測量図（1：500）



Ⅲ－２－３図　寺山第１～４号古墳東側調査区遺構配置図（１：150）

(2) 寺山第１号古墳

寺山古墳群の存在する丘陵上の最先端部に位置する円墳である。尾根筋の傾斜が比較的緩やかになっている付近に立地している。調査前の観察では，墳丘の人為的な高まりが認められ，その南西側に周溝と考えられる窪みが確認できた。頂部に径1.0m，深さ0.4m程度の近年の攪乱と考えられる痕跡がある。尾根筋上の南西側には第２号古墳が近接して築造されている。

墳丘・周溝（Ⅲ－２－３・Ⅲ－２－５図，図版２－３ａ）

古墳築造に伴う地山整形は主に周溝の掘削である。旧地表面である橙褐色の角礫層を僅かに平坦に整えて，暗灰褐色土や淡暗灰褐色土などを盛って墳丘を構築している。残存する盛り土の厚みは最大0.6mである。現存する墳丘の規模は径7.5m，墳丘高は北東側の墳端から1.2m，南西側の周溝底面から1.2mである。

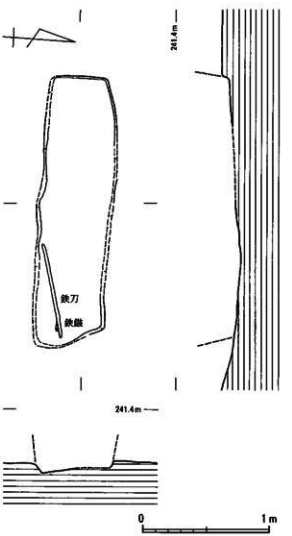
周溝は幅0.6～1.7mで，尾根筋上方の第２号古墳側が特に広くなっている。深さは周溝の外側から底面まで0.4mである。北側及び南側は斜面が急となっており，しだいに浅くなり消滅する。周溝の断面は地山が角礫層のため一部で高低差が認められるが，ほぼ緩やかな「U」字状を呈している。

埋葬施設

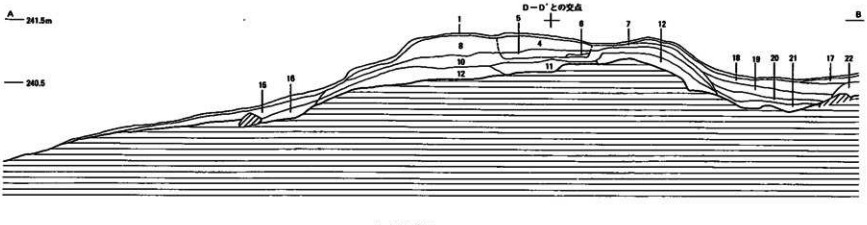
（Ⅲ－２－４図，図版２－３ｂ・ｃ）

埋葬施設は，墳丘のほぼ中央部で検出した土坑である。平面形は不整な長方形で，長さ2.1m，幅0.5～0.6mである。底面はほぼ平坦であるが，南側で若干低くなっている。土坑の長軸方向はN88°Eで，ほぼ東西方向となっている。

遺物は鉄刀と鉄鏃が土坑内の南東部で出土している。鉄刀は切先をほぼ西方向に向けている。鉄鏃は７個体分あり，鉄刀の柄にあたる部分の直下から５個体分が出土している。これらは土坑内の底部からの出土で，副葬品と考えられる。なお，木棺が存在したかどうかは確認できなかった。



Ⅲ－２－４図　寺山第１号古墳
埋葬施設実測図（１：30）



1 腐葉土
2 撹乱
3 暗灰褐色土
4 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を含む，10より明るい）
5 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を含む，10より暗い）
6 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を含む，10より暗い，小礫を含む）
7 暗黄褐色土（橙褐色土を含む）
8 暗灰褐色土（橙褐色土を多く含む）
9 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を含む，小礫を含む）
10 淡暗灰褐色土（橙褐色土を含む）
11 暗灰褐色土
12 暗灰褐色土（角礫を多く含む）
13 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を含む，小礫を含む）
14 暗灰褐色土
15 淡暗灰褐色土（橙褐色土を少し含む）
16 橙灰褐色土（小礫を含む）
17 淡暗灰褐色土（橙褐色土を多く含む）
18 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を少し含む，小礫を含む）
19 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を含む，小礫を含む）
20 暗灰褐色土
21 黒灰褐色土
22 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を少し含む，小礫を多く含む）
23 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を少し含む，小礫を多く含む）
24 暗灰褐色土（小礫を多く含む）
25 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を少し含む，小礫を含む）
26 淡暗灰褐色土（橙褐色土を含む）
27 暗灰褐色土（角礫を多く含む）
28 黒灰褐色土

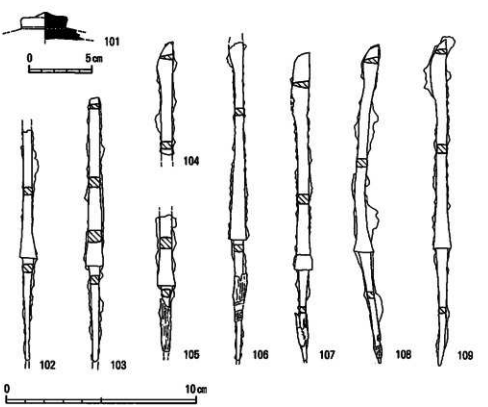
Ⅲ－２－５図　寺山第１号古墳土層断面図（１：60）

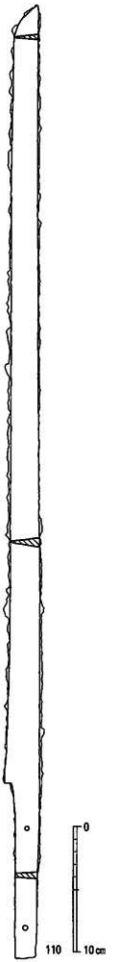
出土遺物（Ⅲ－２－６図，図版２－８・２－10）

101は須恵器の杯蓋で，擬宝珠状つまみが付く。調整は回転ナデで，胎土は１㎜以下の砂粒を含む。焼成は良好である。墳丘検出作業中に出土した。

102～110は埋葬施設内から出土した鉄鏃・鉄刀である。鉄鏃（102～109）はその形態的特徴からすべて長頸鏃に属し，刃部は片刃形（平片刃造），頸部の関は台形である。105～108の茎部には木質痕が部分的に残存する。103については，刃部が明確でなく頸部断面が正方形に近い。他の鉄鏃と比較すると重量があり，鏑の可能性も考えられる。

鉄刀（110）は全長75.5㎝の長大な平造りの直刀である。切先はややふくらみをもち，背は平背である。刀身部については，長さ61.6㎝，幅は関寄りで2.5㎝，切先寄りで1.9㎝，背厚は0.5～0.8㎝で，断面形は逆二等辺三角形をなす。関は片関で刃部側は角関である。茎部については，長さ13.9㎝，幅1.8～2.1㎝，厚さ0.5㎝で，断面は刃部側で厚みをやや減じて台形をなす。目釘孔は２か所にあり，共に孔径0.4㎝である。この鉄刀の重量は414ｇである。





Ⅲ－２－６図　寺山第１号古墳出土遺物実測図
（１：２，101・110は１：３）

Ⅲ－２－１表　寺山第１号古墳出土鉄鏃計測表〔(　) 内の数値は現存値〕

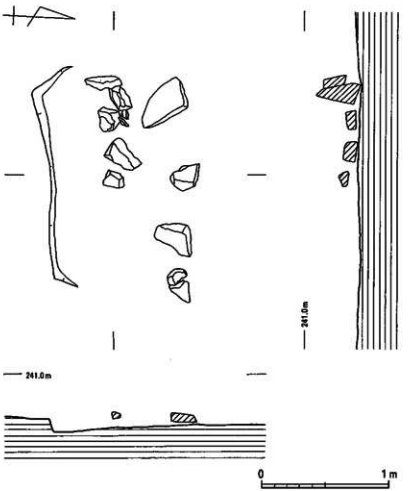
番号	出土位置	全長（cm）	刃部厚（cm）	茎部厚（cm）	重量（g）	備　考
102	鉄刀柄の下	(12.0)		0.45×0.45	(8.1)	
103	埋葬施設内	(13.9)		0.6×0.45	(20.3)	鏃の可能性あり？
104	埋葬施設内	(5.9)	0.3		(4.7)	105と同一個体か？
105	埋葬施設内	(7.2)		0.6×0.4	(6.6)	104と同一個体か？
106	鉄刀柄の下	(16.7)		0.6×0.35	(11.8)	
107	鉄刀柄の下	(16.3)	0.3	0.6×0.35	(14.9)	
108	鉄刀柄の下	16.7	0.3	0.6×0.35	(15.4)	
109	鉄刀柄の下	17.1	0.3	0.6×0.35	(13.4)	

性格不明の遺構

ＳＸ１

（Ⅲ－２－７図，
図版２－４ａ）

墳頂部からやや北側，古墳築造以前の旧地表面で検出した。南側の掘方部分について，長さ1.8m，深さ10cmが残存している。古墳築造時に撹乱を受けたものと推測され，平面形や規模は不明であるが，10～30cm程度の河原石が12個存在している。河原石の配列に規則性は認められないが，比較的平坦面のある石がほとんどである。西側の石は人為的に配置されたものと考えられ，石槨であった可能性がある。遺物は出土していない。



Ⅲ－２－７図　寺山第１～４号古墳ＳＸ１実測図（１：30）

(3)　寺山第２号古墳

第２号古墳は，第１号古墳の南西側に隣接する円墳である。丘陵尾根筋の傾斜が比較的緩やかになっている場所に立地している。調査前の観察で円墳状の高まりが確認できた。周溝が存在す

ると考えられる南西側は斜面が緩やかとなっており，僅かな窪みが確認できる程度であった。

墳丘・周溝（Ⅲ－２－３・Ⅲ－２－９図，図版２－４ｂ）

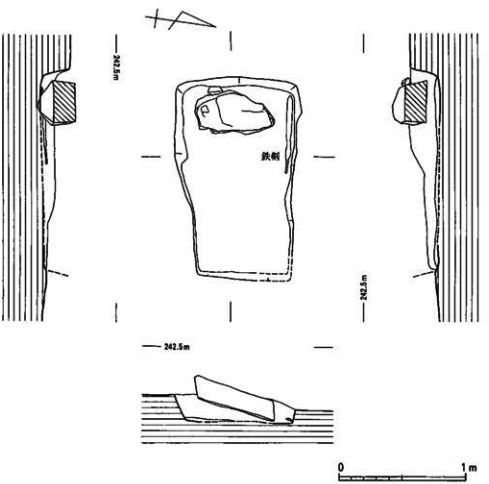
古墳築造に伴う地山整形は，周溝の掘削と北西側に見られるテラス状の削り出しである。旧地表面である橙褐色の角礫層の上に，周溝の掘削などによって排出された暗灰褐色土，黒褐色土，橙灰褐色土などを盛って墳丘を構築している。残存する盛り土の厚さは，最大1.1ｍである。現存する墳丘の規模は，北東～南西方向が径9.5m，北西～南東方向が径10.5ｍで，墳丘高は南西側の周溝底面から1.0ｍである。

周溝は南西側を中心に掘り込まれている。底面には部分的に高まりがあり，北西側は丘陵上方に向かって広がっている。規模は幅1.5～3.1m，深さ0.6ｍで，断面は緩やかな「Ｕ」字状である。

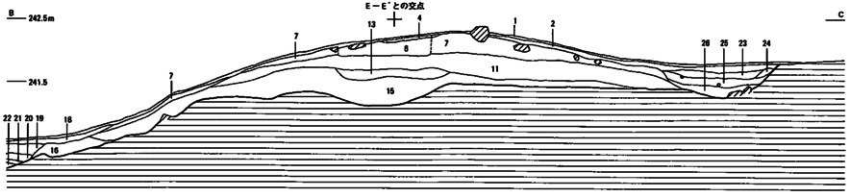
遺物は，西側墳裾部の平坦面から鉄鎌・砥石・敲石がまとまった状態で出土した。

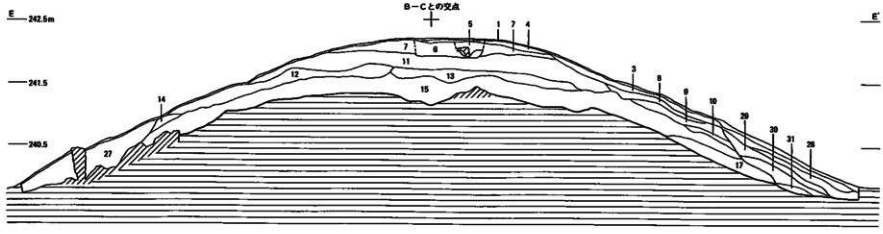
埋葬施設（Ⅲ－２－８図，図版２－４ｃ・２－５ａ）

埋葬施設は，墳丘ほぼ中央部で検出した土坑である。平面形は不整な長方形で，長さ1.6m，



Ⅲ－２－８図　寺山第２号古墳埋葬施設実測図（１：30）

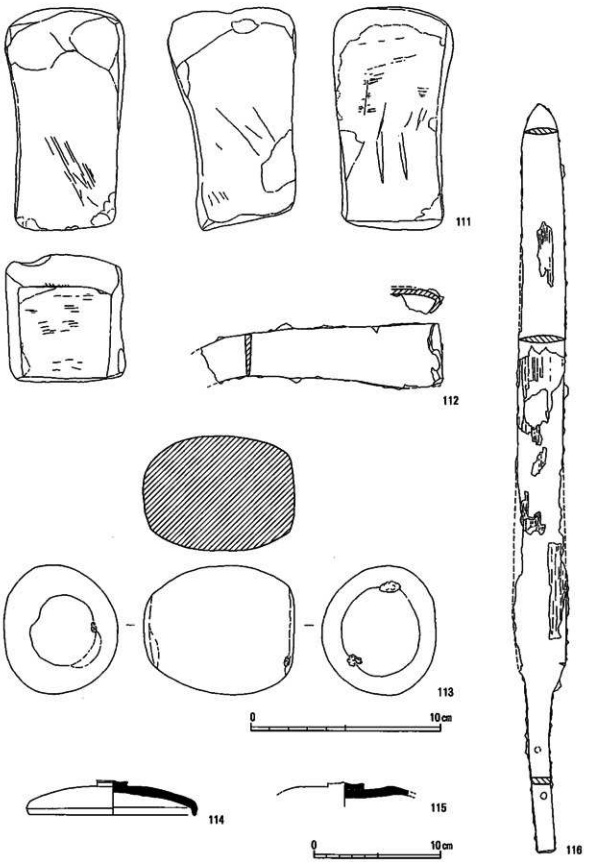




1 腐葉土
2 淡暗灰褐色土（橙褐色土を多く含む）
3 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を含む，小礫を少し含む）
4 淡橙灰褐色土（小礫を多く含む）
5 暗茶褐色土
6 淡橙褐色土
7 淡暗灰褐色土（橙褐色土を含む）
8 淡暗灰褐色土（橙褐色土を少し含む）
9 淡暗灰褐色土
10 暗灰褐色土（橙褐色土を少し含む）
11 橙灰褐色土
12 淡暗灰褐色土（角礫を含む）
13 黒褐色土
14 淡暗灰褐色土（橙褐色土を少し含む）
15 暗灰褐色土
16 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を少し含む，小礫を多く含む）
17 暗灰褐色土（橙褐色土を多く含む）
18 淡暗灰褐色土（橙褐色土を多く含む）
19 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を少し含む，小礫を含む）
20 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を含む，小礫を含む）
21 暗灰褐色土
22 黒灰褐色土
23 橙灰褐色土（橙褐色土を含む）
24 淡灰褐色土
25 淡暗灰褐色土
26 黒褐色土
27 淡暗灰褐色土
（橙褐色土を少し含む，小礫を多く含む）
28 淡暗灰褐色土（橙褐色土を少し含む）
29 淡暗灰褐色土
30 暗灰褐色土（橙褐色土を少し含む）
31 黒褐色土

0 5m

Ⅲ－2－9図　寺山第2号古墳土層断面図（1：60）



Ⅲ－２－10図　寺山第２号古墳出土遺物実測図（111～113は１：２、114～116は１：３）

幅0.8～1.0mである。底面はほぼ平坦であるが，東側にかけて若干高くなっている。土坑の長軸方向はN88°Eで，第1号古墳と同様にほぼ東西方向となっている。土坑内西側では，径60×30cm，上下面とも平坦な石を検出した。石は南北に傾いており，土坑内の本来の位置を示すものではなく，上部にあったものが沈み込んだことが考えられる。木棺が存在したかどうかは確認できなかった。

遺物は鉄剣が土坑内の北西部で出土しており，切先は西方向に向けられている。

出土遺物（Ⅲ－2－10図，図版2－8・2－9・2－10）

埋葬施設内から鉄剣（116），西側の墳裾部から鉄鎌（112）・砥石（111）・敲石（113）が出土した。

111は長さ11.7cm，幅5.8～6.3cm，厚さ5.1～6.7cm，重量670gである。断面は方形で，小口の両面を除く4面を使用しており，小口面は表面を整えるために擦られている。石材は細粒硅長岩である。

112は曲刃鎌で，刃部の先端を欠損している。現存長は12.3cm，最大幅3.4cm，厚さ0.4cmである。基部の折り返しは全体にわたっており，端部を刃に対して「横U字形」に曲げて木柄を装着したものと考えられる。重量は44.8gである。

113は長さ8.0cm，幅6.8cm，厚さ6.05cm，重量486gである。使用面以外を丁寧に研磨している。敲打痕が認められる面は敲石，対の面は磨石として使用されたものと考えられる。石材は細粒半花崗岩である。

116は全長59.0cmの長茎式の長剣である。刃部長44.1cm，刃部幅は中央部で3.6cm，関部で4.0cmである。関部は切れ込みを持たず，刃部からなだらかに茎に移行している。刃部には部分的に木質痕が残る。刃部の断面形は凸レンズ状で，厚さ0.6cmである。茎部は長さ14.9cm，幅は先端で1.4cmになり，2か所に径が0.5cmと0.6cmの目釘孔がある。この鉄剣の重量は368gである。

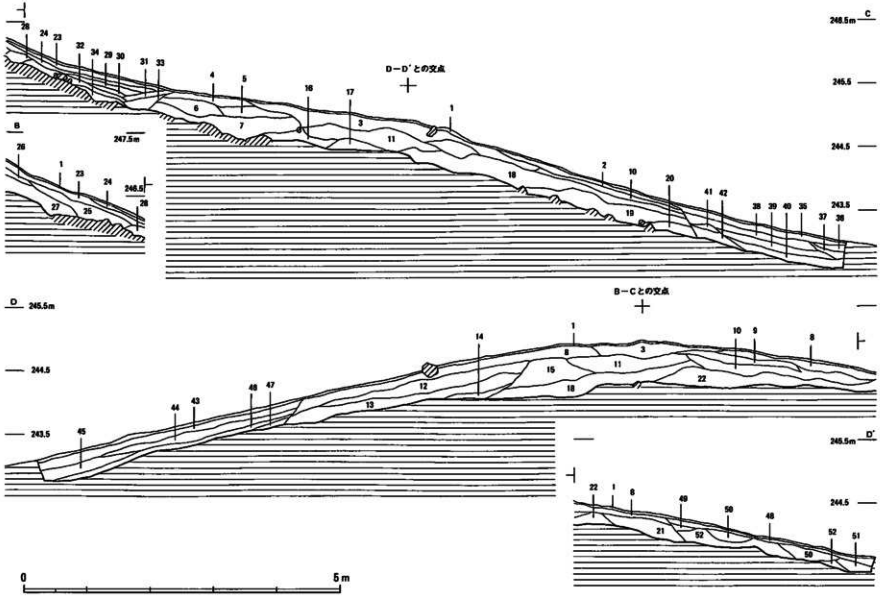
114・115は，調査区内の表土除去の際に出土した須恵器の杯蓋である。114は，復元口径13.0cm，器高2.75cmで，天井部外面は回転ヘラ切り後に回転ナデ，内面は回転ナデである。胎土は1～2㎜の砂粒を含み，焼成は良好である。115は，天井部内外面ともに回転ナデの調整で，胎土は1㎜程度の砂粒を含む。焼成は良好である。

(4) 寺山第3号古墳

第3号古墳は，第2号古墳から約40m南西に立地する円墳である。丘陵斜面が比較的緩やかとなる傾斜変換点に位置している。調査前には，丘陵斜面に僅かな高まりが認められる程度であった。表土層を除去し，トレンチにより周溝を確認した。

墳丘・周溝（Ⅲ－2－11・Ⅲ－2－13図，図版2－5b）

古墳築造に伴う地山整形は，主に周溝の掘削によるものと考えられる。旧地表面の上に，周溝



Ⅲ－2－11図　寺山第3号古墳土層断面図（1：60，B－C・D－D'はⅢ－2－13図）

の掘削によって排出した橙色の角礫や小礫を多く含む淡灰褐色土や暗灰褐色土などを盛って墳丘を構築している。残存する盛り土の厚さは，最大0.8mである。

現存する墳丘の規模は，北東～南西方向が径9.0m，北西～南東方向が径9.5mで，墳丘高は北東側の墳端から1.8m，南西側の周溝底面から0.3mである。墳丘の西側部分は，盛り土の流出が顕著である。

周溝は墳丘の西から南西側にかけて検出し，幅1.0～3.5m，深さ1.0mである。西側部分は二段に落ち込み，東側の断面は緩やかな「U」字状を呈している。

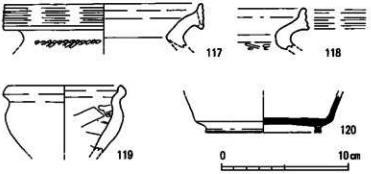
なお，埋葬施設は検出できなかった。

出土遺物（Ⅲ－2－12図，図版2－8）

北西から北側にかけての墳裾部周辺から，弥生土器（117・118），土師器（119），須恵器（120）が出土している。

117・118は弥生土器の壺である。117は復元口径15.4cmで，口縁部外面には4条の凹線，頸部外面にはヘラ状工具による刺突文が施されている。調整は内外面ともにヨコナデである。胎土は1mm以下の砂粒を含み，焼成は良好である。118は口縁部外面に3条の凹線が施されている。調整は内面肩部は横方向のヘラ削り，頸部から外面にかけてはヨコナデである。胎土は1～2mmの砂粒を含み，焼成は良好である。

119は土師器の小型の甕で，復元口径は8.8cmになる。調整は口縁部から頸部外面にかけてヨコナデ，胴部外面は不明瞭であるがナデと見受けられ，胴部内面は不定方向のヘラ削りである。外面には煤が付着している。胎土は1～2mmの砂粒



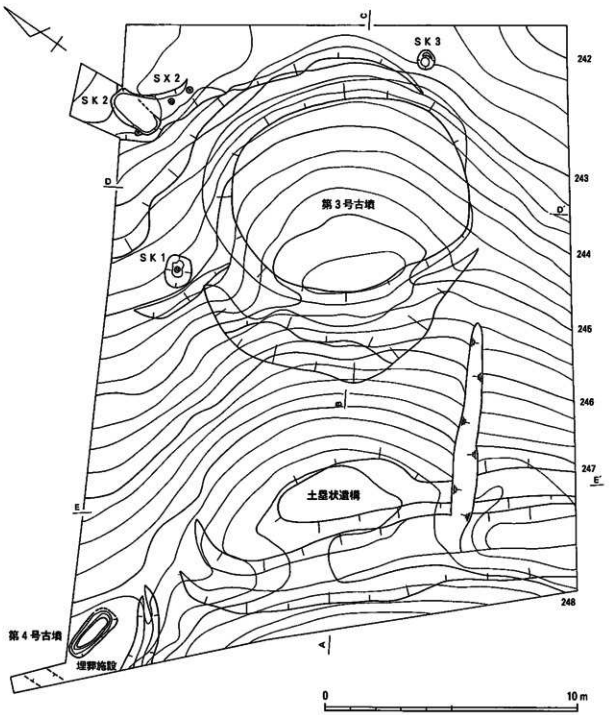
Ⅲ－2－12図　寺山第3号古墳出土遺物実測図（1：3）

Ⅲ－2－11図　土層説明

1 耕作土
2 淡灰褐色土（淡黄褐色土を多く含む）
3 淡灰褐色土（淡黄褐色土を多く含む，角礫を多く含む）
4 淡灰褐色土
5 灰褐色土（角礫を多く含む）
6 灰褐色土（淡黄褐色土を多く含む）
7 暗灰褐色土（角礫を多く含む）
8 淡灰褐色土（淡黄褐色土を多く含む）
9 灰褐色土（暗灰褐色土を少し含む，角礫を少し含む）
10 灰褐色土（暗灰褐色土を多く含む）
11 黒褐色土（小礫を多く含む）
12 灰褐色土（暗灰褐色土を多く含む）
13 暗灰褐色土
14 暗灰褐色土（角礫を少し含む）
15 灰褐色土（角礫を多く含む）
16 暗褐色土（小礫を多く含む）
17 黒褐色土
18 暗灰褐色土（角礫を多く含む）
19 暗灰褐色土（18より角礫が多い）
20 暗灰褐色土（角礫を少し含む）
21 暗灰褐色土（角礫を多く含む）
22 暗灰褐色土
23 淡灰褐色土（淡黄褐色土を含む）
24 淡灰褐色土
25 暗灰褐色土
26 暗灰褐色土（灰褐色土を多く含む）
27 黒褐色土
28 暗灰褐色土（角礫を多く含む）
29 灰褐色土
30 淡褐灰色土
31 暗灰褐色土（灰褐色土を多く含む）
32 暗灰褐色土
33 黒褐色土（小礫を多く含む）
34 黒褐色土
35 暗灰褐色土
36 灰褐色土（暗灰褐色土を多く含む）
37 黒褐色土（小礫を少し含む）
38 灰褐色土
39 暗灰褐色土
40 淡黄灰褐色土（角礫を多く含む）
41 暗灰褐色土（角礫を少し含む）
42 灰褐色土（角礫を多く含む）
43 淡灰褐色土（淡黄褐色土を少し含む）
44 灰褐色土
45 灰褐色土（暗灰褐色土を多く含む）
46 暗灰褐色土
47 暗灰褐色土（角礫を少し含む）
48 淡灰褐色土（淡黄褐色土を少し含む）
49 暗灰褐色土
50 灰褐色土
51 暗灰褐色土（白色の砂粒土を含む）
52 灰褐色土（角礫を多く含む）

を含み，焼成は良好である。

120は須恵器の杯である。高台を貼り付けており，復元高台径は9.0cmである。調整は体部内外面ともに回転ナデ，底部内面は不定方向の雑なナデ，底部外面は回転ヘラ切り後のナデである。胎土は1㎜以下の砂粒を含み，焼成は良好である。



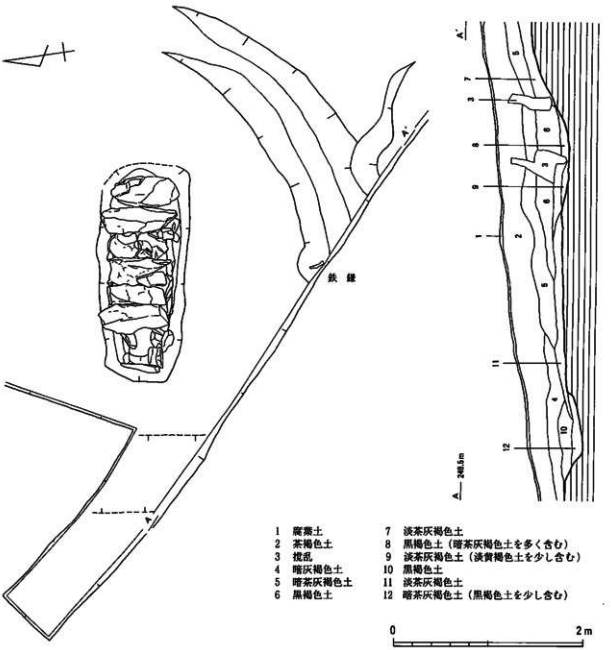
Ⅲ－2－13図　寺山第1～4号古墳西側調査区遺構配置図（1：150）

(5) 寺山第4号古墳

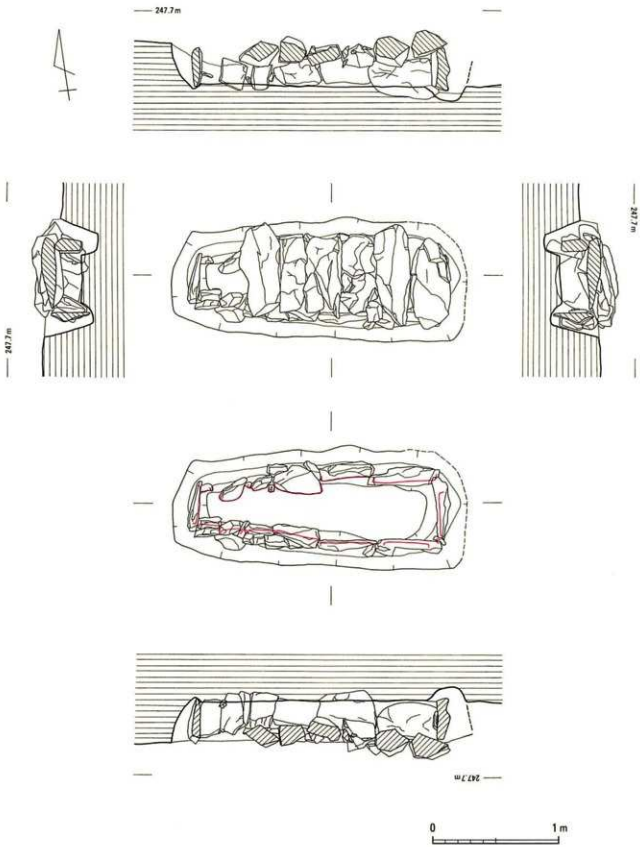
第4号古墳は，調査区北西端に位置する。遺構検出作業中に埋葬施設である箱式石棺を確認した。また，周溝と考えられる溝の一部を検出したが，調査区外に延びており，全容は不明である。

墳丘・周溝（Ⅲ－2－13・Ⅲ－2－14図）

比較的急峻な斜面に位置するため盛り土の流出が著しく，墳丘はほとんど確認できなかった。周溝と考えられる溝の現存規模は，幅0.9m，深さ0.2mである。



Ⅲ－2－14図　寺山第4号古墳実測図（1：40）



Ⅲ－２－15図　寺山第４号古墳埋葬施設実測図（１：30）

埋葬施設（Ⅲ－２－15図，図版２－６ａ・ｂ・ｃ・ｄ・ｅ）

埋葬施設は箱式石棺で，表土を除去した状況で蓋石の一部が露出していた。西側の蓋石１個を失っており，この蓋石と推定される石を，埋葬施設から約５ｍの斜面下方で検出した。主軸方位はＮ９°Ｗである。掘方の平面形は隅丸長方形で，長さ2.3m，幅は東側で0.9m，西側で0.7m，深さ0.45mである。

現存する蓋石は，長さ60～80cmほどの石を６個用いており，移動した西側の石を含めると７個になる。東側から３番目の石がほぼ中央部で割れていた。これらの石の間隙には，長さ12～30cmの石を詰めている。

石棺の内法の長さは188cm，幅は東端部で48cm，西に向かって徐々に狭くなり，西端部では側石を失っており明確ではないが，25cm程度と推定される。小口の石も，東側が西側より大きい。側石は長さ30～90cmほどの石を用いている。南北両側ともに，東側に大型の石，西側に小型の石を配置し，前者は横方向，後者は縦方向に据えて，これらの石の間隙に小石を詰めている。なお，西小口側では，北側で石が失われ，南側で石が２列となっている。

出土遺物

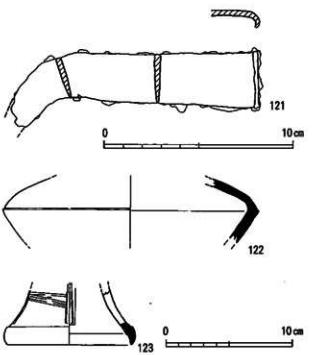
（Ⅲ－２－16図，図版２－８・２－10）

蓋石の上から須恵器（123），周溝と考えられる溝内の上層から鉄鎌（121），遺構検出作業中に須恵器（122）が出土している。

121は曲刃鎌で，刃部の先端を欠損している。現存の長さは13.4cm，最大幅3.0cm，厚さ0.3cm，重さ34.9ｇである。基部の折り返しは全体にわたっており，端部を刃に対してほぼ直角に折り返している。

122は須恵器の長頸壺と考えられる。内外面とも回転ナデで，胎土は１㎜以下の砂粒を含む。焼成は良好である。

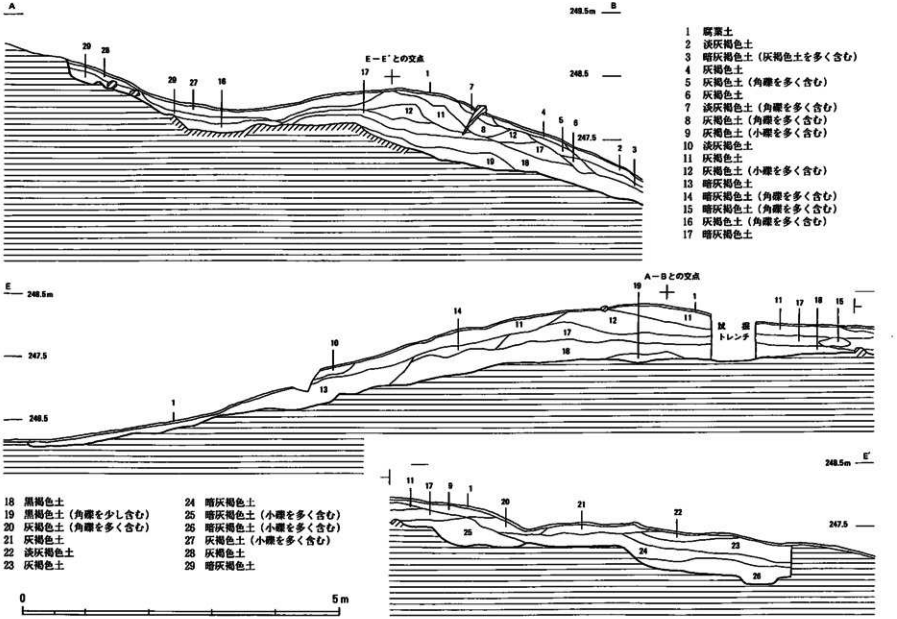
123は須恵器の高杯の脚部で，復元底径は9.8cmである。調整は内外面とも回転ヨコナデ，外面にカキ目，透しが入る。胎土は緻密で焼成は良好である。



Ⅲ－２－16図　寺山第４号古墳出土遺物実測図
（121は１：２，122・123は１：３）

(6) 土壇状遺構（Ⅲ－２－13・Ⅲ－２－17図，図版２－５ｃ）

第３号古墳の周溝外周から南西側へ３ｍの位置にある。調査前の状況は，比較的急峻な丘陵斜面に僅かな高まりが認められる程度であった。当初は第５号古墳として調査を実施したが，盛り



Ⅲ－２－17図　寺山第１～４号古墳土塁状遺構土層断面図（１：60）

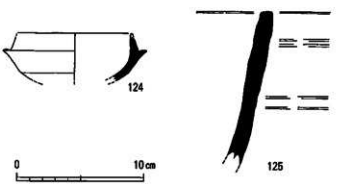
土の形状が先端部から直線的に調査区外まで延びていること，背面の溝も直線的に調査区外まで延びていることから，古墳ではなく土塁状の遺構であることが判明した。溝の掘削によって排出された灰褐色土，暗灰褐色土を盛っている。盛り土は，現存規模で長さ11.7m以上，幅0.8～2.1m，高さは最大0.8mである。溝は，現存規模で長さ15.8m以上，幅2.1～3.0m，深さ0.8mである。なお，溝内から須恵器片が出土している。

出土遺物

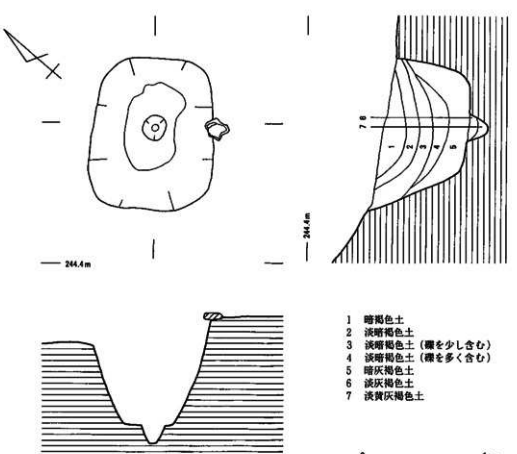
（Ⅲ－2－18図，図版2－8）

124は遺構検出作業中に出土した須恵器の杯で，復元口径11.2cmである。調整は内外面とも回転ナデで，受部に蓋とセットで焼成した痕跡が残る。胎土は精緻で焼成は良好である。

125は溝内から出土した須恵器で，鉢と考えられる。内外面とも回転ナデ



Ⅲ－2－18図　寺山第1～4号古墳土塁状遺構出土遺物実測図（1：3）



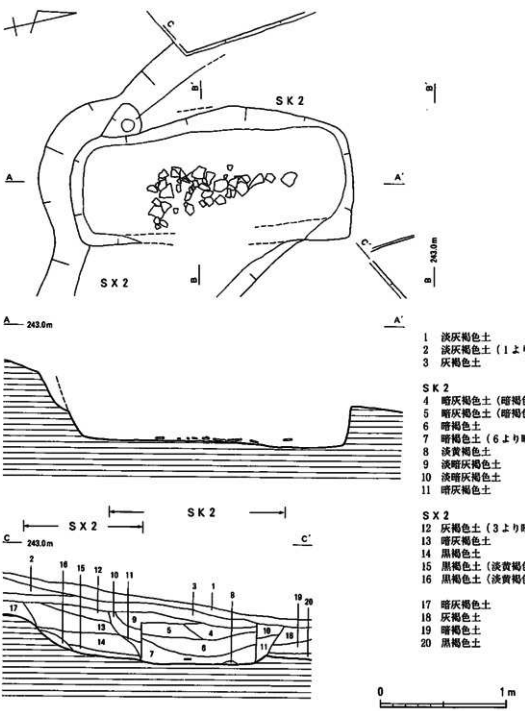
Ⅲ－2－19図　寺山第1～4号古墳ＳＫ1実測図（1：30）

である。外面に条線が刻まれている。胎土は1㎜以下の砂粒を含み，焼成は良好である。

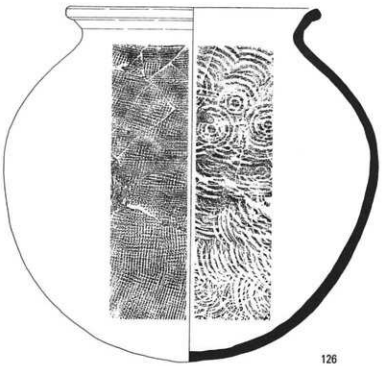
(7) その他の遺構と遺物

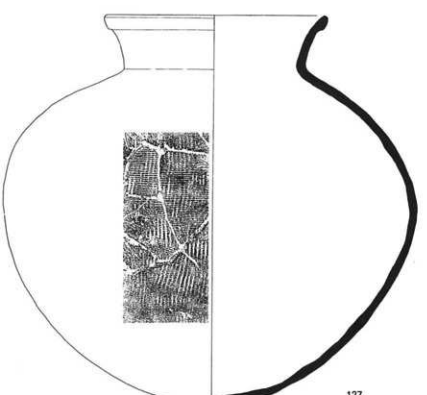
ＳＫ１（Ⅲ－２－19図，図版２－７ａ）

第３号古墳の西側，標高243mに位置する土坑である。平面形は不整な隅丸長方形で，長辺1.2



Ⅲ－２－20図　寺山第１～４号古墳ＳＫ２実測図（１：30）





Ⅲ－２－21図　寺山第１～４号古墳ＳＫ２出土遺物実測図（１：３）

m，短辺1.0m，深さ0.8mを検出した。底面に径20cm，深さ14cmの円形のピットがある。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

ＳＫ２（Ⅲ－２－20図，図版２－７ｂ）

第３号古墳の北側，標高242mに位置する土坑である。ＳＸ２と重複し，ＳＸ２より新しい。東側の一部が撹乱を受けているが，平面形は不整な長方形と推定され，長さ2.2m，幅1.0m，深さ0.3mを検出した。底面には，須恵器の甕２個体分を破砕した破片を敷いており，１点以外は外面を上にした状態にある。埋土の堆積状況から，須恵器片の上に木棺を埋置したものと考えられる。土坑の主軸方位はＮ５°Ｅとほぼ南北方向となっている。

なお，底面に敷かれていた須恵器の甕と同個体の破片が，床面から10cm程度上層でもまとまった状態で出土しており，須恵器敷床に使用した破片の残りを棺の上部に埋置した可能性がある。

出土遺物（Ⅲ－２－21図，図版２－９）

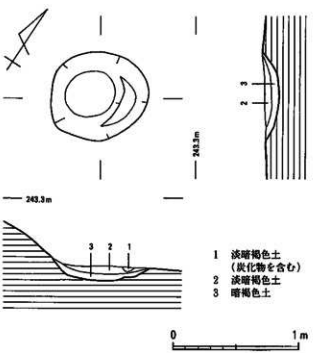
126・127ともに須恵器の甕である。126は復元口径19.6cm，器高27.9cm，体部最大径29.5cmになる。調整は口縁部から頸部にかけて回転ヨコナデ，体部外面は格子目叩きの後にカキ目，体部内面は同心円文が残る。胎土は１mm以下の砂粒を若干含み，焼成はやや不良である。127は復元口径17.2cm，器高30.5cm，体部最大径32.2cmになる。調整は126と同様である。胎土は１～２mmの砂粒を若干含み，焼成はやや不良である。

ＳＫ３（Ⅲ－２－22図，
図版２－７ｃ）

第３号古墳の東側，標高242mに位置する。墳裾部に近接する土坑である。平面形は不整な楕円形で，長径0.8m，短径0.7m，深さ0.2mを検出した。埋土の一部には炭化物が混入していた。遺物は出土していない。

ＳＸ２（Ⅲ－２－20・Ⅲ－２－23図）

第３号古墳の北側，標高242mに位置する。ＳＫ２と重複し，ＳＫ２よりも古い。北側は調査区外に延びており，全容は不明である。溝状に掘り込み，南東から北方向に向かって緩やかに曲線を描きながら調査区外に延びている。



Ⅲ－２－22図　寺山第１～４号古墳ＳＫ３実測図（１：30）

長さ4.8m，幅1.1～2.0m，深さ0.4mを検出した。なお，底面で径25cm・深さ17cmと径28cm・深さ19cm，壁際でＳＫ２と重複する径32cm・深さ34cmの計３基のピットを検出した。

遺物は，埋土下層より弥生土器が出土している。

出土遺物（Ⅲ－２－24図，図版２－８）

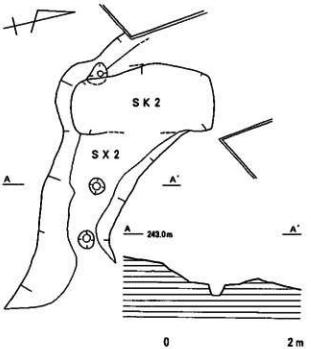
弥生土器の甕がある。128・130は口縁部片，129は底部片である。

128は復元口径19.8cmになり，口縁部外面に２条の凹線が施されている。調整は内面頸部から外面までヨコナデ，内面体部はヘラ削りである。胎土は１～２mmの砂粒を含み，焼成は良好である。

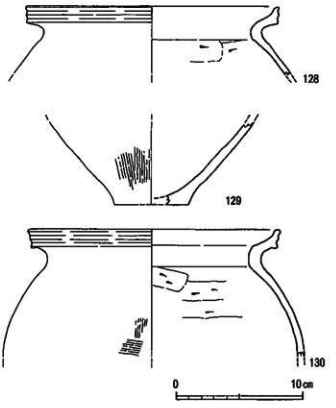
129は復元底径5.8cmになり，調整は内面がヘラ削り，外面が縦方向のハケ目である。体部は１～２mmの砂粒を含み，焼成は良好である。

130は復元口径19.6cmになり，口縁部に２条の凹線が施されている。調整は内面頸部から外面頸部までヨコナデ，体部内面はヘラ削りで，部分的にヘラ削り後にヨコナデを施している。体部外面は縦方向と横方向のハケ目である。胎土は１～２mmの砂粒を含み，焼成は良好である。

これらの土器は，弥生後期中頃から後半の時期のものであろう。



Ⅲ－２－23図　寺山第１～４号古墳ＳＸ２実測図（１：60）



Ⅲ－２－24図　寺山第１～４号古墳ＳＸ２出土遺物実測図（１：３）

(8) 小　結

寺山古墳群は，丘陵尾根上に27基の古墳から構成されている。丘陵頂部に７基，頂部下から中腹にかけて12基がまとまり，中腹から先端部の尾根筋に８基が築造されている。今回の調査は，先端部に位置する第１号～第４号古墳を実施した。調査の結果，古墳４基のほか土壙状の遺構１基，土坑３基，性格不明の遺構２基を検出した。以下，遺構と遺物について若干の検討を加え小結とする。

寺山第１～４号古墳

第１号古墳は丘陵の最先端部にあり，尾根筋上の南西側には第２号古墳が近接する。埋葬施設として共に土坑を検出した。第１号古墳では埋葬施設内から鉄刀と鉄鏃，第２号古墳では埋葬施設内から鉄剣，墳裾部から鉄鏃・砥石・敲石が一括して出土している。墳裾部の遺物については，墳丘上から流出したのではなく，意図的に墳裾部に埋置したものと推定される。

第１号・第２号古墳の年代については，共伴する土器類がなく，その時期を把握することは難しい。ただ，埋葬施設として土坑を検出しており，横穴式石室導入以前の古墳と想定できる。周辺地域で土坑や木棺を埋葬施設にする円墳として，植松第１号古墳[3]（三良坂町），稲荷山Ｄ－２号古墳[4]（三良坂町），岡田山第３号古墳[5]（三良坂町），寺津第１・２号古墳[6]（吉舎町），燎東古墳[7]（吉舎町）などがある。岡田山第３号古墳の５世紀前半を除いては，すべて５世紀後半から６世紀中頃までのものである。このことを踏まえて，第１号・第２号古墳の年代を考えてみたい。

第１号古墳は，埋葬施設内から鉄鏃が出土しており，うち５点は鉄刀の柄にあたる部分の直下にまとまっていた。これらは長頸鏃で，鏃身部が残存するものは片刃式である。鏃身部と頸部の境には，緩やかな傾斜の鏃身関部がある。また，頸部と茎部の境の関部については，いずれも台形関である。

長頸片刃式の鉄鏃について，鏃身関部は出現期の５世紀後半には鋭角で逆刺をなしているが，６世紀代に退化の方向で推移し，やがて無関のものが６世紀末頃には登場することが指摘[8]されている。第１号古墳の鉄鏃の鏃身関部は，かなり退化したものと見受けられる。また，頸部と茎部の境の関部については，中心であった台形関から，６世紀後半に現れる棘状関に変化することが指摘[9]されている。これらのことから，第１号古墳の鉄鏃は６世紀代のもので，周辺の古墳の様相を併せると，第１号古墳の年代は６世紀前半から中頃と考えられる。

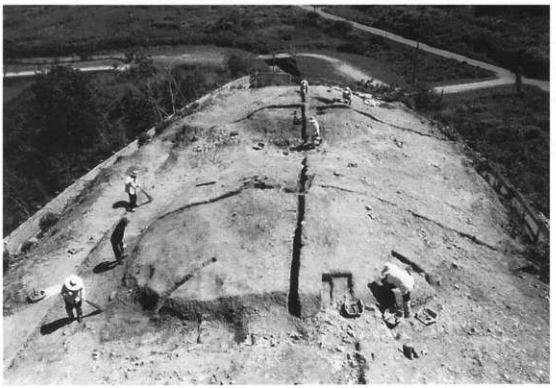
第２号古墳は，埋葬施設から長さ59.0㎝の鉄剣が出土している。広島県内で長さ50㎝以上の鉄剣が出土した例には，田戸古墳[10]（三良坂町），田戸南第１・２号古墳[11]（三良坂町），田戸北古墳[12]（三良坂町），大久保第５号古墳[13]（三次市），酒屋高塚古墳第２号主体[14]（三次市），大風呂古墳[15]（庄原市），中央山第２号古墳[16]（東城町），池の内遺跡第４号古墳[17]（広島市安佐南区），空長第１号古墳[18]（広島市安佐南区），禅昌寺西遺跡Ａ主体[19]（広島市東区），城ノ下第１号古墳[20]（広島市佐伯区），月見城古墳群ＳＴ５[21]（広島市佐伯区）などがある。三良坂町内の田戸，田戸南，

田戸北古墳の埋葬施設はいずれも横穴式石室で，時期は７世紀前半とされるが，ほかは横穴式石室以外を埋葬施設とし，５世紀から６世紀初頭までの時期である。また，池渕俊一氏による鉄剣の分類と編年[29]によれば，第２号古墳の鉄剣は「長剣の長茎（長）グループ」に相当し，主に５世紀前葉から中葉に見られることが指摘されている。

第２号古墳は，第１号古墳と近接しており，埋葬施設の長軸方向は共にN88°Eで，方位が一致する。この点から，両古墳の被葬者の世代差はかけ離れたものではないと想定される。第１号古墳の年代や鉄剣からすれば，第２号古墳の年代は５世紀後半頃と考えられる。

第３号古墳は，第２号古墳から約40m南西に位置している。墳丘の流出が顕著で，埋葬施設は検出できなかった。ただ，石室に伴うような石材は確認されず，埋葬施設には石材が用いられていなかった可能性がある。年代については特定できないが，第１号・第２号古墳と同様に，横穴式石室導入以前の段階になる可能性がある。

第４号古墳は，箱式石棺を埋葬施設としている。蓋石の１個は斜面下方に移っていたが，遺存状況は比較的に良好であった。側石の石材の使用法は，頭位と考えられる東側から大型の石を横方向，西側では小型の石を縦方向に据えている。蓋石の上から出土した須恵器高杯の脚部は，短脚の１段透しで，ＴＫ23型式からＴＫ47型式[30]に相当するものと考えられる。三良坂町内で箱式石棺を埋葬施設とする古墳の時期は，杉谷第９号古墳[31]が５世紀初頭から６世紀初頭の間，植松第４号古墳[32]が６世紀前半である。こうした点から，第４号古墳の年代は５世後半から６世紀前半と考えられる。



Ⅲ－２－25図　寺山第１～４号古墳作業風景

土塁状遺構

第3号古墳の丘陵上部に近接している。盛り土が先端部から直線的に調査区外に延び，背面の溝も盛り土に沿うようになっている。現段階では遺構の性格を明確にすることはできず，出土遺物も須恵器片が若干あるのみで時期も特定することができない。ただ，石帯が出土している寺山遺跡にも近接しており，関わりをもつ遺構の可能性がある。

土坑

ＳＫ1は底面にピットを有しており，形状から陥穴の可能性が考えられる。同様の土坑が油免遺跡（三良坂町）でも検出されている。加藤光臣氏は，松ケ迫Ａ地点遺跡[58]（三次市），緑岩遺跡[59]（三次市）などの例を挙げ，広島県北部での陥穴の存在を指摘[59]している。丘陵尾根上から傾斜面にかけて，複数の陥穴が並ぶという特徴がある。ＳＫ1は単独の存在であるが，調査区の端部に位置しており，調査区外に陥穴が並ぶ可能性がある。

ＳＫ2は土坑墓で，底面に須恵器の甕2個体分を破砕した破片を敷いており，この上には木棺を埋置していたものと考えられる。広島県内で須恵器を底面や床面に敷く埋葬施設は，江の川流域を中心に分布し，時期は6世紀後半から7世紀前半である点が指摘[60]されている。ほとんどが横穴式石室で，三良坂町内の例には植松第2・3号古墳[50]，皇渡古墳[50]，見尾山第1・4号古墳[50]，田戸南第3号古墳[50]がある。横穴式石室以外に，松ケ迫Ｂ地点遺跡[56]（三次市）では，小児用の石蓋土坑墓の底面に，6世紀末から7世紀初頭と考えられる甕の破片を敷きつめていた。ＳＫ2の年代については，須恵器の甕が松ケ迫Ｂ地点遺跡出土の甕とも類似しており，6世紀後半から7世紀前半頃と考えられる。

ＳＫ3は墳裾部に位置する。埋土中に炭化物が混入しており，焚火跡の可能性が考えられる。古墳周辺から焼土坑が検出された例には，見尾山第1号古墳（三良坂町），植松第3号古墳（三良坂町），寺津第1・2・3号古墳[54]（吉舎町），月貞寺第28号古墳[50]（庄原市）などがある。なかでも，月貞寺第28号古墳は，4基の焚火跡が石室を中心にしてほぼ対称の位置という意識的な配置にあり，埋葬祭祀に伴うものとされている。ＳＫ3についても，1基のみの検出ではあるが同様の意味をもつ可能性が考えられる。

寺山古墳群は丘陵尾根筋に沿って27基の円墳で構成されており，今回の調査では尾根先端部からの4基を実施した。埋葬施設として土坑と箱式石棺を検出し，横穴式石室導入以前の古墳と考えられる。三良坂町域では，6世紀後半になると横穴式石室が導入される例が多い。寺山第1～4号古墳は5世紀後半から6世紀中頃にかけて築造されたものであろう。なお，谷を挟んで200m西側の丘陵に位置する横谷古墳群は，5世紀代から6世紀前半にかけての古墳群と推定されている。ほぼ時期を同じくしていることから，同一の地域集団によって築造された古墳群の可能性が考えられる。

また，陥穴の可能性がある土坑や，6世紀後半から7世紀前半頃と考えられる須恵器敷床の墓

坑などがあり，古墳以外にも人々の営みの姿が確認できた。

註

(1) 寺山遺跡の位置はⅡ－2図に示した。なお，石帯のほか，平安時代の須恵器片が確認されている。
(2) 寺山第1～4号古墳の出土遺物で，石材の材質については，地質考古学研究所・柴田喜太郎氏より教示を得た。
(3) 河瀬正利・向田裕始「双三郡三良坂町植松第1号古墳発掘調査報告」『芸備』第3集　芸備友の会　1975年
(4) 三良坂町教育委員会『稲荷山D－2号古墳』 1983年
(5) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『岡田山第3号古墳発掘報告』 1984年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『三良坂町の原始・古代と岡田山第3号古墳発掘調査の記録』 1986年
(6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺津古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)』 1994年
(7) 吉舎町教育委員会『塚東古墳』 1995年
(8) 尾上元規「古墳時代鉄鏃の地域性－長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として－」『考古学研究』157号　考古学研究会　1993年
(9) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」(橿原考古学研究所編『橿原考古学研究所論集　第8』) 吉川弘文館 1988年
(10)・(11) 三良坂町教育委員会が1998年度に発掘調査。
(12) 三良坂町教育委員会が1997年度に発掘調査。
(13) 広島県教育委員会『大久保遺跡群』『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)』 1979年
(14) 広島県教育委員会『酒屋高塚古墳』 1983年
(15) 広島県教育委員会『大風呂古墳発掘調査概報』 1976年
(16) 河瀬正利編『広島県比婆郡東城町　中央山古墳群の発掘調査』 広島大学文学部考古学研究室　1978年
(17) 広島市教育委員会『池の内遺跡発掘調査報告』 1985年
(18) 広島市教育委員会『空長古墳群発掘調査報告書』 1978年
(19) 禅昌寺西遺跡発掘調査団『禅昌寺西遺跡発掘調査報告』 1980年
(20) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『城の下A地点遺跡発掘調査報告』 1991年
(21) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』 1987年
(22) 池淵俊一「鉄製武器に関する一考察－古墳時代前半期の刀剣類を中心にして－」『古代文化研究』第1号　島根県古代文化センター　1993年
(23) 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店　1981年
(24) 三良坂町教育委員会『杉谷第9号古墳』 1999年
(25) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植松遺跡群－植松第2号・3号・4号古墳・植松窯跡－』 1987年
(26) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『松ケ迫遺跡群発掘調査報告』 1981年
(27) 広島県教育委員会『緑岩古墳』 1983年
(28) 加藤光臣「中国山間地域の縄文時代の陥穴－広島県北部山間地域の事例を中心にして－」『研究紀要－汗と夢－』第3号　広島県立廿日市西高等学校　1994年
(29) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『皇渡古墳発掘調査報告書』 1987年

(30) 註(29)と同じ

(31) 註(29)と同じ

(32) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「見尾山古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）』 1994年

(33) 註(00)と同じ

(34) 註(24)と同じ

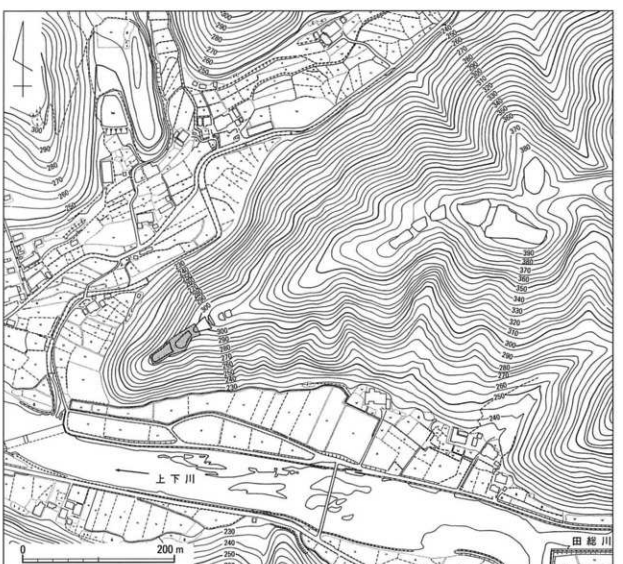
(35) 註(6)と同じ

(36) 広島県教育委員会「月貞寺古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』 1978年

3　萩原城跡

(1)　調査の概要

萩原城跡は，三良坂町と総領町との町界が走る山塊に位置する。西側に延びる尾根筋に沿って，東西600m，高低差120mにわたって築かれており，戦国時代の山城と伝えられている。最高所の標高は400m，麓からの比高は180mになる。南麓では田総川と合流して上下川が東流し，西麓で北麓を東流する大谷川と合流する。城跡は，高所部の郭群と南西に延びる尾根先端部の郭群に分かれている。地表面での観察[1]では，高所部の郭群が中核となり，3カ所の郭を中心に，井戸・土塁・虎口・堀切・竪堀などが構築されている。この頂上部の郭群から西へ250m離れて尾根先端部の郭群が階段状にある。中核の郭群と比すると小規模で土塁等の遺構は見られず，構築内容に格差が生じている。発掘調査は，尾根先端部郭群の西半部が対象で，3カ所の郭にかけて，西

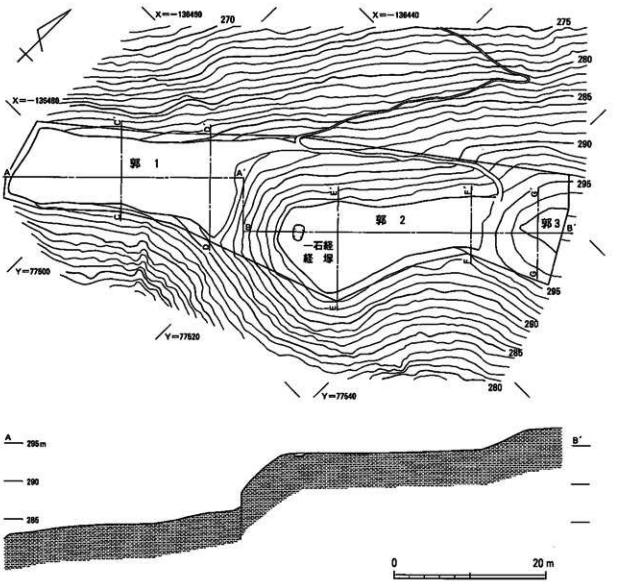


Ⅲ－3－1図　萩原城跡周辺地形図（1：5,000，アミ目は調査区）

側から郭１・郭２・郭３として実施した[2]。

調査の結果，郭群の構築に際して，大規模な土木工事が行われたことが明らかになった。尾根筋の岩盤を切り崩し，切り出された土石を山の斜面に盛って，各郭を設けている。また，郭１と郭２を結ぶ通路を検出し，地表面で確認された麓からの通路と繋がるものとなった。ただ，調査した範囲では，土塁・柵・建物などは確認されなかった。郭群の構築に際して造成・整地がなされており，その土中や直上の位置から，土器・陶磁器，土錘，ふいごの羽口，古銭，砥石などが出土した。土器・陶磁器類は時期的に中世に位置づけられ，貯蔵・調理・飲食に使用されるもので，この城で人の生活が営まれたことを示している。

なお，郭２で，一字一石経を埋納した一石経経塚を検出した。造営の時期や趣旨については，発掘調査では直接に明らかにできないが，一石経経塚は江戸時代に盛行したと言われている[3]。

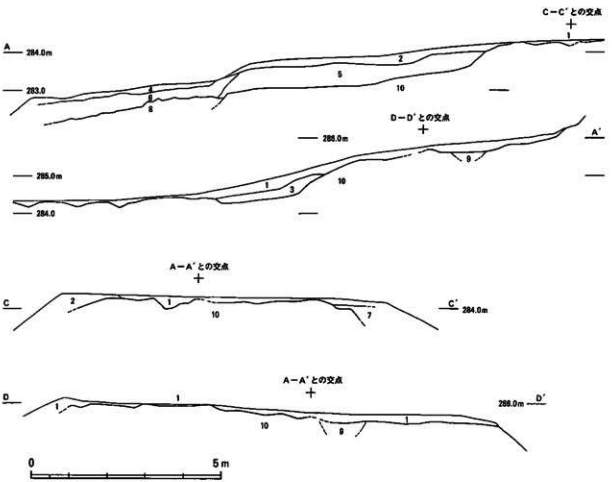


Ⅲ－３－２図　萩原城跡遺構図（１：500）

(2) 遺構と遺物

a 郭1（Ⅲ－3－2・Ⅲ－3－3図，図版3－2a・b・c）

郭1の規模は東西方向30m，南北方向9～12mで，郭東端部で南北方向に広がっている。麓からの比高は約60m，標高は282.4～286.2mになる。東から西へ緩やかに傾斜しているが，東側9m及び西側6mについては，傾斜がやや急になっている。東側の標高差は1.7m，西側の標高差は1.3mである。地山を切り崩した後に土石を積んで整地しているが，地山の岩盤が露出する部分もある。郭の西側12mの造成については，岩盤から切り崩された礫を積んだ後に，礫混じりの土を敷いており，0.6～0.8mの厚さになる。礫層について，礫の径は2～3㎝から30㎝前後にわたるが，10～15㎝程度のものが多い。礫間には空隙も確認され，西側が顕著である。郭の中央部では，整地土は概して薄く，岩盤上に数㎝の場所も多い。切り崩された岩盤の表面は凹凸状態と



1 明褐色土（砂礫を含む）
2 明褐色土（1より砂礫を多く含む）
3 褐色土（礫を含む）
4 黄褐色土（礫を含む）
5 礫層（褐色土を含む）
6 礫層（5より礫は少なく，黄褐色土を含む）
7 暗褐色土
8 明黄褐色土－地山－
9 黄色土－地山－
10 岩盤－地山－

Ⅲ－3－3図 萩原城跡土層断面図1－郭1－（1：100）

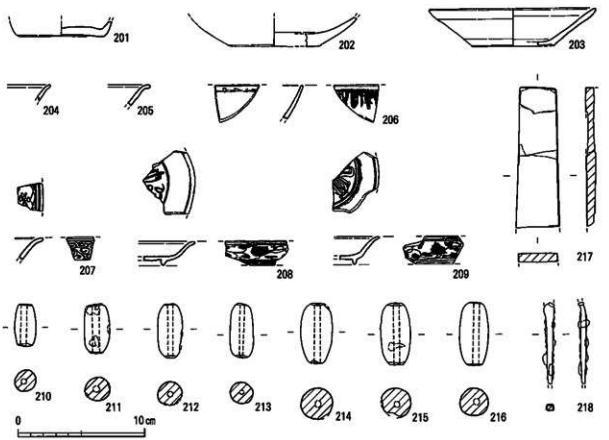
なっており，凹部分を埋めることで整地が進められている。郭の東部では，南側で岩盤が露出し，以北を10～30cmほどの厚さで整地している。

出土遺物（Ⅲ－3－4図，図版3－7・3－8）

郭の地表面や整地土から土器・陶磁器，土錘，砥石，鉄釘，古銭などが出土した。

201～203は土師質土器皿である。201の底部は回転ヘラ切りである。底径は6.6cmで，体部の傾斜からすれば，口径はあまり広がらない小型の皿になるだろう。202の底部は回転糸切りで，推定底径は7.2cmである。203は推定口径13.1cm・器高2.95cmで，202と比較すると，底部から体部下半にかけては器厚が薄手のものになっている。204・205は白磁皿で，共に釉に光沢がある。206は染付碗，207～209は染付皿である。206の割れ面には漆が付着しており，接着剤として補修したものであろう。207～209は何れも口縁部が外反する。文様のモチーフは植物に見受けられ，207外面は唐草，208外面は蓮華を表現したものであろう。このほか，土器・陶磁器類には備前焼の壺甕類，青磁の碗・皿がある。

210～216は土錘で，郭1には計8点の土錘があり，何れも管状になる。現状で，210は長さ3.3cm・重さ6.2g，216は長さ5.0cm・重さ21.7gである。217は砥石で，頁岩製の仕上砥である。図の上・左・右の側面には成形時の切出痕が残る。残存長は11.1cm，幅は上端で2.8cm，下部で3.4



Ⅲ－3－4図　萩原城跡出土遺物実測図1（1：3）

cmになる。石材は京都産のものに類似[4]している。218は鉄釘で，断面は方形，残存上部は頭部直下の部位であろう。古銭は1点あり，「元□□宝」が確認される。

b　郭2（Ⅲ－3－2・Ⅲ－2－5図，図版3－3a・b・c）

郭2の規模は東西方向28m，南北方向で7～12mで，郭の西側で南北方向に膨らんでいる。標高は293.2～294.4mで，東西方向で西端3m分で0.5m，東端2m分で0.2mの標高差になり，両端部を除く23m分の標高差は0.5mと平坦に整えられている。整地に際して，切り崩されて凹凸状態となった岩盤面の凹部分を土で埋めているが，各所で岩盤が露出しており，整地層は概して薄く，数cmから20cm程度の厚さである。ただ，郭の西辺から北辺にかけては，岩盤の上への盛り土によって造成しており，厚さが1mを超える場所もある。この造成は，下方の郭1と通路の配置と連動し，郭縁辺部に高まりをもたせるためのものであろう。郭2西端部と郭1東端部との水平距離は7m，標高差は7mで，斜面は角度が約45°と急傾斜になっている。

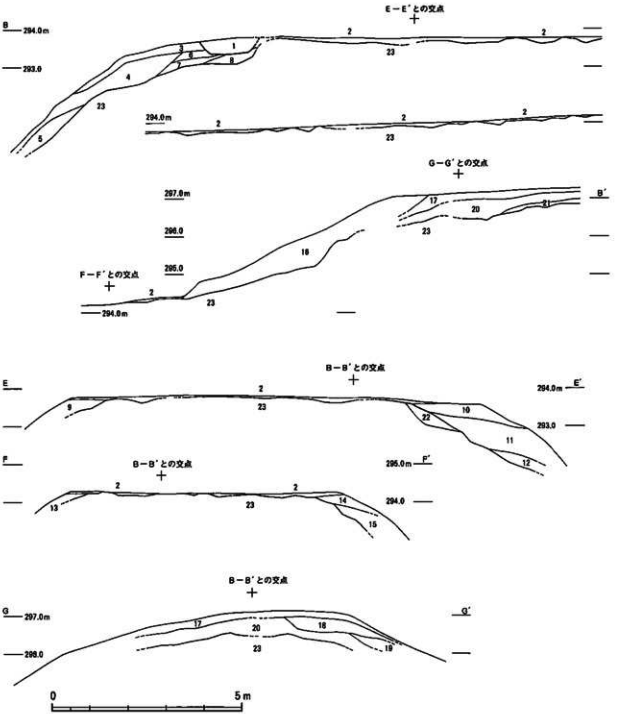
出土遺物（Ⅲ－3－6・Ⅲ－3－7・Ⅲ－3－8・Ⅲ－3－9図，図版3－7・3－8・3－9）

郭の地表面や整地土から土器・陶磁器，土錘，ふいごの羽口，鉄滓，鉄釘，鉄蓋，古銭などが出土した。

219～221は土師質土器皿である。219は底径4.3cmの小型品である。220は推定底径は6.0cm，体部外面下部に明確な稜があり，221の推定底径は8.2cmである。底部については，219・220が回転糸切り，221が回転ヘラ切りになる。なお，郭1の土師質土器皿では，202・203のように，底部から体部下半にかけての器厚が厚手・薄手のものが見られたが，220・221は厚手のものになる。222・223は龍泉窯系の青磁碗である。222は無文で，223は両面に文様があり，外面には雷文が巡る。224・225は染付皿で口縁部が外反する。外面の文様のモチーフは植物に見受けられ，225は蓮華を表現したものであろう。226は備前焼擂鉢で，注口にかかる部位が残存している。口縁部が上下に拡張されており，擂目は10本の条線を単位とするようである。このほか，土器・陶磁器類には備前焼・亀山焼の壺甕類，白磁皿があり，備前焼・亀山焼については前者がほとんどを占める。

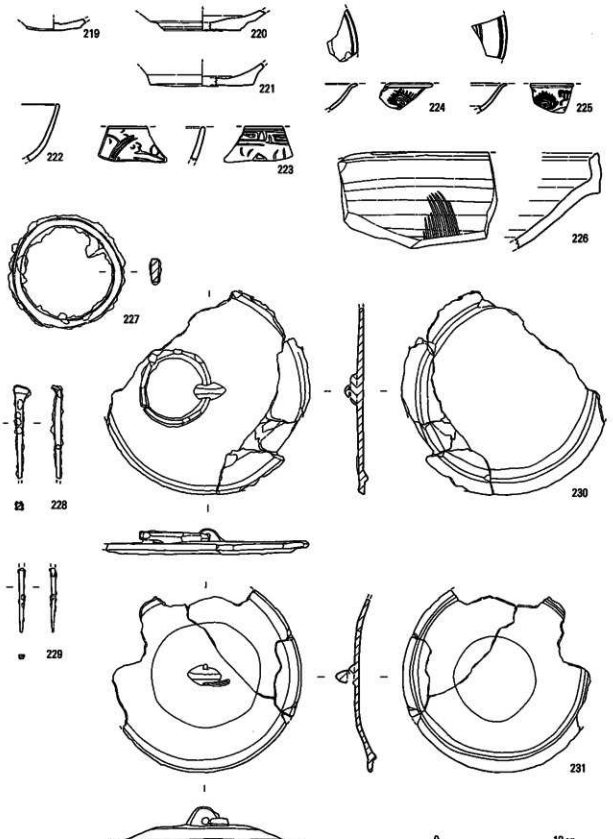
227は環状の鉄製品であるが，名称・用途などは不明である。228・229は鉄釘で，共に断面は方形であり，228は頭部，229は下端部が残存している。230・231は鉄蓋である。230は平板的な形状で，現存の径は16.4cmである。鈕の高さは1.0cmで，吊手の鉄輪が環状で残存している。内面にはかえりがあり，蓋に対応する身の口径は13.5cm前後になる。231は中央部が高まる形状で，現存の径は15.5cmである。鈕の高さは1.5cmで，吊手の鉄輪の一部が残存している。内面にはかえりがあり，蓋に対応する身の口径は13.5cm前後になり，230とほぼ等しくなっている[5]。

232～264は土錘で，郭2には計36点の土錘があり，何れも管状になる。232～247の16点については一括して出土したもので，郭内北西部の造成土に含まれ，その範囲は径50×30cm，深さ10cmほどである。現状で，232は長さ4.55cm・重さ36.8g，247は長さ5.6cm，重さ36.9gになる。16点

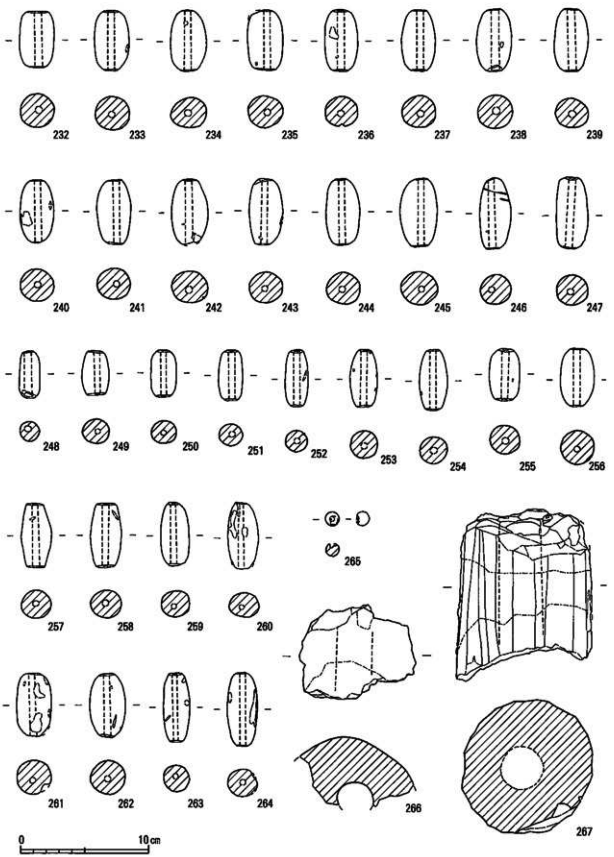


1 礫層－一石経経塚－
2 明褐色土（砂礫を含む）
3 褐色土（礫を含む）
4 明褐色土
（3より色調が明るく，礫を多く含む）
5 暗褐色土（礫を含む）
6 黄灰褐色土
7 暗灰褐色土
8 暗黄灰褐色土
9 褐色土（礫を含む）
10 褐色土
11 明褐色土
12 暗黄褐色土
13 褐色土（礫を含む）
14 褐色土（礫を含む）
15 暗褐色土
16 褐色土（礫を多く含む）
17 褐色土（礫を含む）
18 明黄灰褐色土
19 黄灰褐色土
20 明褐色土（礫を含む）
21 暗褐色土
22 黄色土－地山－
23 岩盤－地山－

Ⅲ－3－5図　萩原城跡土層断面図2－郭2・郭3－（1：100）

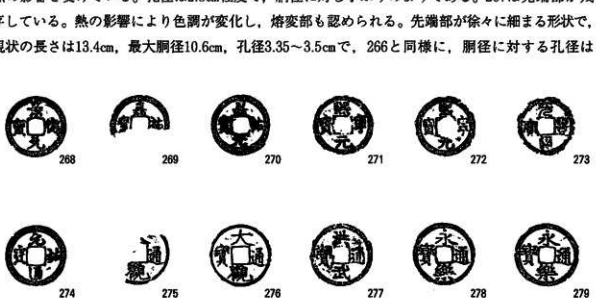


Ⅲ－3－6図　萩原城跡出土遺物実測図2（1：3）



Ⅲ－３－７図　萩原城跡出土遺物実測図３（１：３）

の内，最軽量は246の28.2ｇ，最重量は245の43.2ｇで，14点は32.3ｇから38.3ｇである。248から264について，248は長さ3.7㎝・重さ10.0ｇ，264は長さ5.8㎝・重さ29.3ｇになり，最軽量は248，最重量は261・262の36.4ｇである。265は球形に焼成した土玉で，図上部に穴があった可能性もあり，径は1.1㎝になる。用途は不明である。266・267はふいごの羽口で，棒に粘土を巻き付けて成形したものである。266は部分的な残存になる。表面を平滑に整えており，図下部を除いて熱の影響を受けている。孔径は2.8㎝程度で，胴径に対し小ぶりのようである。267は先端部が残存している。熱の影響により色調が変化し，熔変部も認められる。先端部が徐々に細まる形状で，現状の長さは13.4㎝，最大胴径10.6㎝，孔径3.35～3.5㎝で，266と同様に，胴径に対する孔径は

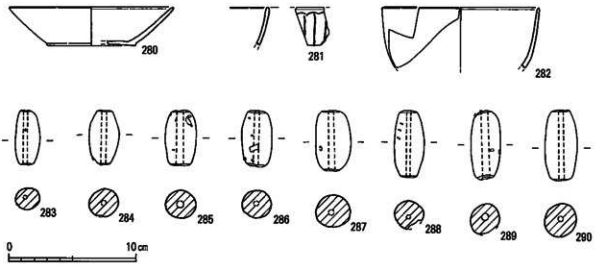


Ⅲ－３－８図　萩原城跡出土古銭拓影（２：３）

Ⅲ－３－１表　萩原城跡出土古銭一覧

番号	掲載番号	出土地	銭　名	国名	初鋳年	西　暦
1		郭１	元□□宝			
2		郭２	天□□宝			
3		郭２	景徳元宝	北宋	景徳元年	AD1004
4	268	郭２	景徳元宝	北宋	景徳元年	AD1004
5	269	郭２	嘉祐□宝	北宋	嘉祐元年	AD1056
6	270	郭２	(嘉)祐元宝	北宋	嘉祐元年	AD1056
7	271	郭２	熙寧元宝	北宋	熙寧元年	AD1068
8	272	郭２	熙寧元宝	北宋	熙寧元年	AD1068
9	273	郭２	元豊通宝	北宋	元豊元年	AD1078
10	274	郭２	元祐通宝	北宋	元祐元年	AD1086
11	275	郭２	(大)観通□	北宋	大観元年	AD1107
12	276	郭２	大観通宝	北宋	大観元年	AD1107
13	277	郭２	洪武通宝	明	洪武元年	AD1368
14	278	郭２	永楽通宝	明	永楽６年	AD1408
15	279	郭２	永楽通宝	明	永楽６年	AD1408

※文字について，欠失・不明は□，推定は(　)で表した。
なお，番号５について，嘉祐元宝・嘉祐通宝ともに初鋳年は嘉祐元年である。



Ⅲ－3－9図　萩原城跡出土遺物実測図4（1：3）

小ぶりになる。

268～279は古銭で，総て中国銭である。銭名について，初鋳年が古いものには AD1004年の景徳元宝（268），新しいものには AD1408年の永楽通宝（278・279）がある。

さて，郭2の北側斜面から通路に至る部分では，表土層からその直下にかけて，土器・陶磁器，土錘が出土した。280は土師質土器皿で，底部は回転ヘラ切りである。推定口径13.0cm，器高3.1cmで，底部から体部下半にかけての器厚は薄手のものになる。281・282は龍泉窯系の青磁碗である。281は外面に蓮弁文がある。282は無文で，推定口径は12.5cmになる。283～290は土錘で，この地区には計9点の土錘があり，何れも管状になる。現状で，283は長さ4.3cm・重さ15.6g，290は長さ5.55cm，重さ38.4gである。

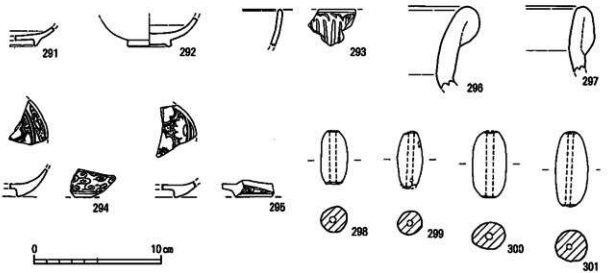
c　郭3（Ⅲ－3－2・Ⅲ－3－5図）

郭3については，郭の西側を一部調査したに過ぎない。西端部が舌状に張り出し，調査区内では東西方向6m，南北方向6mになり，標高は297.0～297.3mである。この地区では，郭の端部にあたることもあり，地山の岩盤の上へ盛り土をして平坦面を造成しており，盛り土の厚さは，郭西端部で0.8m，調査区東端部で0.4mになる。郭3西端部と郭2東端部との水平距離は5m，標高差は2.6mで，斜面の角度は30°弱になり，傾斜が急であった郭2と郭1の間の斜面とは様相を異にしている。斜面部分にも盛り土をしており，1m近い厚みを持つ場所もある。

出土遺物（Ⅲ－3－10図，図版3－7・3－8）

郭の地表面から土器・陶磁器，土錘，鉄滓などが出土した。

291・292は白磁皿である。291は釉に光沢があり，292の高台径は3.5cmになる。293は龍泉窯系の青磁碗で，外面に蓮弁文がある。294・295は染付皿で，底部が碁笥底となっており，同一個体



Ⅲ－3－10図　萩原城跡出土遺物実測図5（1：3）

であろう。内面の文様のモチーフは植物と見受けられ，外面は唐草文である。なお，圏線の一部は鉄絵が施されている。296・297は備前焼甕である。296は頸部が若干外反し，297は玉縁がやや扁平になっている。このほか，土器・陶磁器類には，体部の破片であるが，中国産の褐釉陶器がある。

298～301は土錘で，郭3には計5点の土錘があり，何れも管状になる。現状で，298は長さ4.2cm・重さ19.4g，301は長さ5.9cm・重さ37.6gになる。

Ⅲ－3－2表　萩原城跡出土土錘一覧(1)

番号	掲載番号	出土地	現状	現状寸法（長・幅・孔径はcm，重はg）	備考
1	210	郭1	◎	長3.3　幅1.7　孔径0.45　重 8.9	
2	211	郭1	▲	長3.9　幅2.0　孔径0.55　重14.9	
3	212	郭1	▲	長4.25　幅1.95　孔径0.4　重15.8	
4	213	郭1	○	長4.3　幅1.85　孔径0.4　重14.6	
5	214	郭1	○	長4.8　幅2.5　孔径0.55　重28.0	
6	215	郭1	▲	長4.9　幅2.4　孔径0.5　重28.8	
7	216	郭1	▲	長5.0　幅2.3　孔径0.5　重21.7	
8		郭1	▲	長4.2　幅2.25　孔径0.5　重19.0	長0.1～0.2cmほどの欠失
9		郭1	×	長3.85　幅1.8　孔径0.4　重 6.2	体積は50%強の欠失，長・幅は0.1～0.2cmほどの欠失
10	232	郭2・土錘群	◎	長4.55　幅2.7　孔径0.6　重36.8	
11	233	郭2・土錘群	◎	長4.75　幅2.7　孔径0.5　重36.6	
12	234	郭2・土錘群	◎	長4.9　幅2.85　孔径0.55　重36.2	
13	235	郭2・土錘群	▲	長4.9　幅2.8　孔径0.55　重35.2	
14	236	郭2・土錘群	○	長4.9　幅2.6　孔径0.6　重32.3	
15	237	郭2・土錘群	○	長4.95　幅2.65　孔径0.55　重35.7	
16	238	郭2・土錘群	○	長5.0　幅2.75　孔径0.7　重37.1	
17	239	郭2・土錘群	○	長5.0　幅2.65　孔径0.6　重33.5	
18	240	郭2・土錘群	○	長5.0　幅2.65　孔径0.55　重34.3	

Ⅲ－３－２表　萩原城跡出土土錘一覧(2)

番号	掲載番号	出土地	現状	現状寸法（長・幅・孔径はcm，重はg）	備考
19	241	郭２・土錘群	◎	長5.1　幅2.65 孔径0.5　重34.9	
20	242	郭２・土錘群	▲	長5.1　幅2.85 孔径0.6　重36.8	長0.1～0.2cmほどの欠失
21	243	郭２・土錘群	○	長5.15 幅2.7　孔径0.5　重33.9	
22	244	郭２・土錘群	◎	長5.2　幅2.7　孔径0.5　重38.3	
23	245	郭２・土錘群	◎	長5.4　幅2.95 孔径0.5　重43.2	
24	246	郭２・土錘群	○	長5.6　幅2.45 孔径0.6　重28.2	
25	247	郭２・土錘群	○	長5.6　幅2.5　孔径0.55 重36.9	
26	248	郭２	○	長3.7　幅1.6　孔径0.55 重10.0	
27	249	郭２	◎	長3.5　幅2.1　孔径0.45 重13.3	
28	250	郭２	○	長3.7　幅2.0　孔径0.45 重14.6	
29	251	郭２	◎	長3.95 幅1.9　孔径0.5　重14.2	
30	252	郭２	○	長4.45 幅1.8　孔径0.5　重14.0	
31	253	郭２	○	長4.5　幅2.2　孔径0.5　重19.1	
32	254	郭２	○	長4.8　幅2.2　孔径0.5　重20.1	
33	255	郭２	○	長4.1　幅2.4　孔径0.55 重24.0	
34	256	郭２	▲	長4.6　幅2.7　孔径0.55 重31.1	
35	257	郭２	○	長5.0　幅2.35 孔径0.55 重25.1	
36	258	郭２	○	長5.05 幅2.45 孔径0.55 重29.0	
37	259	郭２	◎	長5.0　幅2.25 孔径0.5　重24.4	
38	260	郭２	▲	長5.25 幅2.35 孔径0.45 重21.8	長0.1～0.2cmほどの欠失
39	261	郭２	▲	長4.95 幅2.7　孔径0.5　重36.4	
40	262	郭２	◎	長5.0　幅2.75 孔径0.55 重36.4	
41	263	郭２	○	長5.4　幅2.1　孔径0.45 重23.8	
42	264	郭２	○	長5.8　幅2.35 孔径0.45 重29.3	
43		郭２	×	長5.2　幅2.2　孔径0.4　重17.6	体積は30%ほどの欠失，長・幅は0.1cmほどの欠失
44		郭２	×	長4.4　幅2.45 孔径0.55 重21.4	幅0.1cmほどの欠失
45		郭２	×	長2.35 幅2.2　孔径0.35 重 6.9	一部が残存
46	283	郭２北側斜面	○	長4.3　幅2.0　孔径0.3　重15.6	
47	284	郭２北側斜面	○	長4.35 幅2.35 孔径0.4　重23.5	
48	285	郭２北側斜面	○	長4.35 幅2.45 孔径0.6　重24.6	
49	286	郭２北側斜面	○	長4.45 幅2.4　孔径0.4　重25.8	
50	287	郭２北側斜面	○	長4.75 幅2.8　孔径0.5　重36.3	
51	288	郭２北側斜面	▲	長5.25 幅2.4　孔径0.35 重27.2	
52	289	郭２北側斜面	▲	長5.45 幅2.5　孔径0.55 重31.7	
53	290	郭２北側斜面	○	長5.55 幅2.7　孔径0.4　重38.4	
54		郭２北側斜面	×	長2.3　幅2.15 孔径0.45 重 6.2	一部が残存
55	298	郭３	○	長4.2　幅2.15 孔径0.5　重19.4	
56	299	郭３	▲	長4.5　幅2.0　孔径0.5　重16.0	
57	300	郭３	▲	長5.25 幅2.65 孔径0.55 重33.1	
58	301	郭３	○	長5.9　幅2.6　孔径0.4　重37.6	
59		郭３	▲	長4.3　幅2.05 孔径0.3　重13.5	

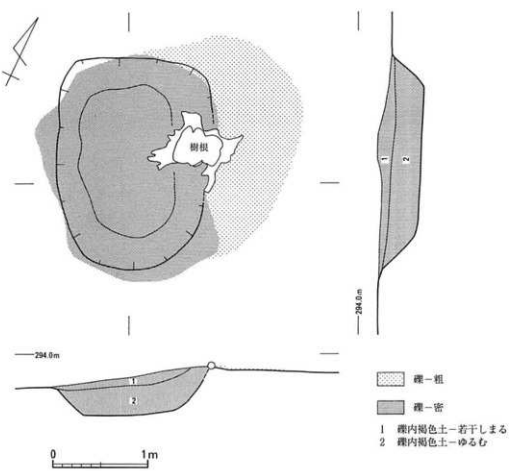
※現状については，◎は完存，○は僅かな欠失（体積の１％未満），▲は体積の10％未満の欠失，×は10％以上の欠失と見受けられるものに分類した。

d　一石経経塚（Ⅲ－3－11・Ⅲ－3－12図，図版3－4c，3－5a・b・c，3－9）

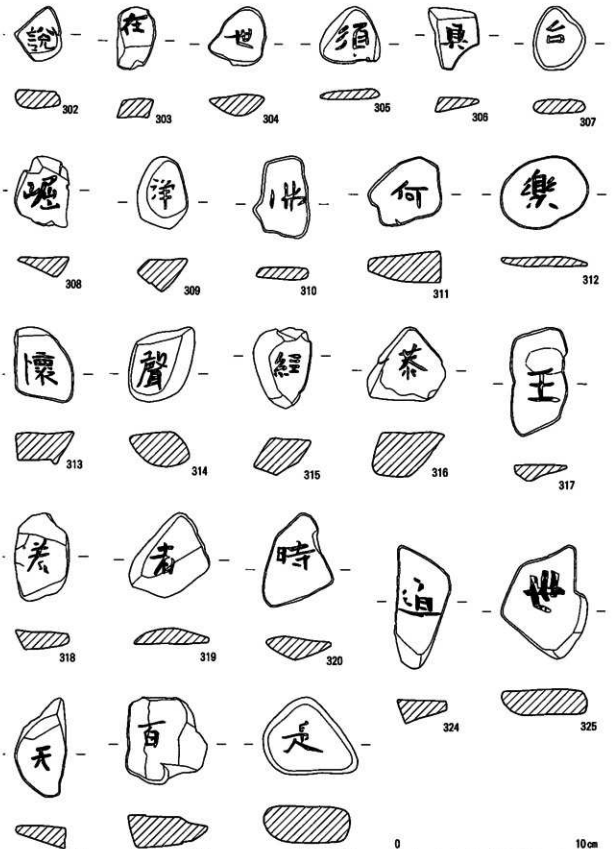
郭2の西端部に位置する。この地区では，表土を除去した段階で径3～8㎝ほどの河原石を中心とする礫群が散布しており，径2.6～2.8mほどで，ほぼ円形のまとまりを見せていた。この礫群を取り上げると，東側では石は重ならず，郭2の整地層の直上に散布するものであった。中央から西側については，2.4×1.8mで礫が密集して重なっており，これに伴って，長径2.2m，短径1.6m，深さ0.3～0.45mの長円形の掘方がある。内部は底部まで礫が充満しており，礫はほとんどが河原石である。密集した礫群の最上部の礫の点数は2,000点弱で，最初に礫群を取り上げた際に，墨書されたものが8点確認された。礫の総数は，掘方に充満していたことからすれば，数万点に及ぶもので，その中の50点ほどに墨書がある。

これらの中で，半数ほどについて文字が判読され，「説」(302)・「在」(303)・「世」(304・325)・「須」(305) などがある。また，判読が困難なものも1文字と推定される。これらは一字一石経の経石になり，礫群を充満・集積した施設は，一石経経塚である。

郭2では，概して整地層が薄く，各所で岩盤が露出している状態であるが，郭の西辺から北辺にかけては，岩盤の上への盛り土によって造成していた。経塚は深さ0.3～0.45mの掘込みとなるが，これは盛り土がなされた地区で，岩盤に比すると掘込みが易しく，造営に際して郭内での



Ⅲ－3－11図　萩原城跡一石経経塚実測図（1：40）



Ⅲ－３－12図　萩原城跡出土墨書経石実測図（１：２）

場所が選定されたことも想定される。なお，掘方内では充満した礫群の中に，須恵器と備前焼の小片が含まれていたが，副納品ではなく，礫の一つとして納められたものだろう。

Ⅲ－３－３表　萩原城跡一石経経塚出土墨書経石一覧

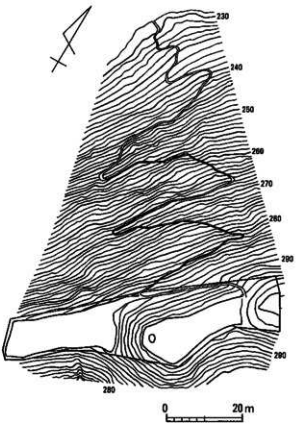
番号	掲載番号	文字	寸法（長・幅・厚ともcm）・備考
1	302	説	長2.95 幅2.45 厚1.1
2	303	在	長3.35 幅2.0 厚1.1
3	304	世	長3.15 幅3.0 厚1.15
4	305	須	長3.05 幅3.15 厚0.6
5	306	具	長3.35 幅2.65 厚1.3
6	307	台	長3.4 幅2.75 厚0.8
7	308	頭	長3.75 幅2.85 厚1.1
8	309	浄	長3.8 幅2.65 厚1.8
9	310	佛	長4.3 幅2.95 厚0.75
10	311	何	長3.7 幅3.9 厚1.8
11	312	樂	長3.8 幅4.6 厚0.6
12	313	憶	長4.0 幅3.1 厚1.8
13	314	聲	長4.0 幅3.45 厚1.95
14	315	経	長4.25 幅3.05 厚2.0
15	316	恭	長3.9 幅4.05 厚2.4
16	317	王	長5.75 幅3.0 厚0.85
17	318	若	長4.75 幅2.85 厚1.05
18	319	者	長4.5 幅4.2 厚0.85
19	320	時	長5.0 幅3.7 厚1.5
20	321	天	長5.25 幅2.7 厚2.05
21	322	百	長4.6 幅4.3 厚2.1
22	323	是	長4.15 幅4.95 厚2.0
23	324	道	長6.55 幅2.95 厚1.65
24	325	世	長6.0 幅4.5 厚1.4
25		□	長2.75 幅4.55 厚1.5 黒ずみの可能性あり
26		□	長3.25 幅2.6 厚1.15 十か
27		□	長3.3 幅2.7 厚1.8
28		□	長3.35 幅2.75 厚1.7
29		□	長3.35 幅3.9 厚1.0
30		□	長3.8 幅4.25 厚1.65
31		□	長3.95 幅2.9 厚1.35 黒ずみの可能性あり
32		□	長3.96 幅2.95 厚1.3
33		□	長4.0 幅3.2 厚1.45 黒ずみの可能性あり
34		□	長4.05 幅3.35 厚2.5
35		□	長4.15 幅4.9 厚1.85
36		□	長4.3 幅3.95 厚1.2
37		□	長4.35 幅3.35 厚2.0
38		□	長4.4 幅3.4 厚1.3
39		□	長4.5 幅2.45 厚0.9
40		□	長4.5 幅3.2 厚1.25 満 or 溜か
41		□	長4.55 幅2.6 厚1.9 梵字の可能性あり
42		□	長4.6 幅4.75 厚1.9
43		□	長4.85 幅2.45 厚1.4
44		□	長4.95 幅3.45 厚1.5
45		□	長5.2 幅2.65 厚1.5
46		□	長5.25 幅3.35 厚1.35 若か
47		□	長5.25 幅3.5 厚1.2
48		□	長5.85 幅3.25 厚2.15 甘か
49		□	長5.95 幅2.65 厚1.5
50		□	長5.95 幅2.65 厚1.5
51		□	長6.0 幅5.0 厚1.6
52		□	長6.05 幅5.05 厚2.5
53		□	長6.3 幅3.8 厚1.8
54		□	長7.3 幅4.1 厚1.8 黒ずみの可能性あり

e　通路（Ⅲ－３－13図，
図版３－４ａ・ｂ）

通路については，北麓から郭２の北東端部に向かって，山の斜面を屈曲しながら通じていることが地表面で確認された。麓からの標高差約10m分については振幅10m以内，その上部の標高差約55m分は振幅30～40mになる。

調査では，郭１から郭２へ結ばれる通路を確認した。郭１北東端部で３mの幅を持ち，徐々に狭くなりながら，東方向へ８m，標高差1.5mの地点で麓からの通路と合流し，幅は１mに満たないものとなる。合流点から東方向へ25m，標高差5.5m延びた後に，ほぼ直角に南方向へ曲がっている。この部分は３mで1.5mの標高差があり，傾斜が急となって郭２と繋がることになる。

なお，郭２から郭３への通路については明確に確認されなかったが，郭２の北側斜面に通路が存在することや，斜面の傾斜からすれば，郭２の東部南側から郭３の西部南側へ通じていたことが想定される。



Ⅲ－３－13図　萩原城跡通路図（１：1,000）

(3) 小　結

萩原城跡の調査は，尾根先端部郭群の西半部が対象であったが，郭群の構築に際して大規模な土木工事を行ったこと，多彩な遺物が出土し，城で生活が営まれていたこと，また，一石経経塚が造営されていたことなどが明らかになった。ここでは，萩原城をめぐる周辺の歴史状況とともに遺構・遺物について触れる。

萩原城と周辺の歴史

戦国時代の山城と伝えられる萩原城について，これを直接語る同時代の史料は確認されていない。江戸時代の文政８年（1825）に完成した広島藩の地誌である『芸藩通志』では，三谿郡（現三良坂町・吉舎町・三次市南部を中心とする地域）について，吉舎・湯谷・和知・江田・徳田の５庄からなり，郡内38村の中の安田・槙原・大谷・灰塚・三良坂の５村が湯谷庄とある。萩原城については，槙原・大谷両村にまたがり，享禄年間（1528～1532）頃に，湯谷久盛の居城であったとしている。

中世，三谿郡において，在地領主・国人として勢力を伸ばしたのは西遷武士である広沢氏の一

族である。後に，南天山城（吉舎町）に拠を置いた和智氏，旗返山城（三次市三若町）の江田氏も広沢氏の分流になる。郡内の上下川流域を支配領域としたのは田利広沢氏の一族で，応永12年（1405）の田利八幡神社（三良坂町田利）への木造神像の寄進者[6]や，応永30年（1423）の福禅寺（三良坂町仁賀）の大仏殿造立の檀那[7]も一族とみられている。

応仁元年（1467），将軍家・守護家の分裂を契機に，東軍方と西軍方の両勢力が争う応仁・文明の乱が勃発する。備後国では，15世紀初めから山名氏が守護職を歴任し，山名宗全（持豊）は西軍の中心的存在であったが，子息で備後守護職の山名是豊は東軍として活動する。備後国内の国人層も，それぞれの支配領域の保持・伸長のために，東西に分かれて争うことになるが，おおむね，備後北部の国人層は西軍方，南部の国人層は東軍方に与している。国内各所で合戦が繰り広げられ，文明７年（1475）には「柚谷」（湯谷）でも戦われた[8]。

この乱の後も，山名氏が備後守護を歴任するが，一族の分裂もあって，国人層に対する影響力を失っていく。そして，山口の大内氏と出雲の尼子氏の動向が，国人層を大きく左右することになる。その中で，大内氏に与した毛利氏が芸備国人の中で強力な存在となってくる。天文９～10年（1540～1541）には，尼子氏による毛利氏の本拠・郡山城（吉田町）への攻撃，天文11～12年（1542～1543）には，大内氏による尼子氏の本拠・出雲への遠征が行われるが，共に失敗に終わっている。やがて，天文22年（1553），毛利氏は備後北部に南下した尼子氏を退却させ，この地域を影響下に置くことになる。なお，江田氏は尼子氏に応じているが，本拠の旗返山城が攻め落とされ滅亡することになる。

上下川流域に拠を置く田利広沢氏は，こうした戦国期の動向の中で，和智氏の勢力下に入っていったようである。湯谷久豊は和智氏からの婿子で，和智豊郷の子，誠春の弟になる[9]。久豊は在地名を姓とし，弘治３年（1557）の「毛利氏親類衆年寄衆并家人連署起請文案」[10]には，「柚谷新三郎元家」と記される。久豊（元家）は，本拠を田利から萩原城の地へ移したと伝えられているが，この背景については，軍事的・経済的要因が推定されている。即ち，和智氏の山城群による情報連絡網構築の一環[11]であること，上下川流域の沖積平地の開発が進んで生産性が向上する中で，上下川と田総川が合流し，商業的機能が高まったであろう霊原周辺の地を掌握するため[12]である。なお，『芸藩通志』では，久豊（元家）の事跡について，大谷村の興聖寺を「萩原城主湯谷久豊」の草創，灰塚村の顕徳寺を「広沢元家」による天文18年（1549）の開基と記しており，興聖寺は萩原城の北麓，顕徳寺は萩原城の南方２km弱の地にある。

和智氏も，大内（毛利）・尼子氏による抗争の動向に左右されているが，豊郷の代より一貫して毛利氏に従っている。誠春・久豊（元家）兄弟も麾下として戦いに赴き，やがて，毛利氏は戦国大名として中国地方に覇を唱えることになる。しかし，永禄12年（1569）年に，毛利氏により兄弟は討たれることになる。

以上，萩原城と周辺の動向について触れてきた。ただ，繰り返すことになるが，萩原城跡を直接語る同時代の史料は確認されていない。

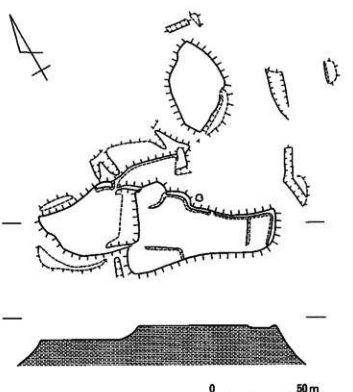
郭群の築造について

次に，尾根先端部郭群の築造と機能した時期について考えてみたい。調査区の基本的な土層の層序は，上位から，腐半土を中心とする表土，整地・造成土，地山の岩盤である。整地・造成土については，郭の周縁部では厚みを持つ地点もあるが，概して薄く，郭の造成・加工が複数時にわたってなされたとは見受けられない。一度造成されたものが，廃絶時まで踏襲されたのであろう。このことから，基本的に，整地・造成土に含まれる遺物が郭群の築造の時期，整地・造成土の直上及び表土からの遺物が郭群の機能の時期に関わるものと整理できる。

具体的な時期を示す遺物に陶磁器類がある。輸入陶磁器には，端反りの白磁皿，端反りや碁笥底の染付皿，無文や細連弁文の青磁碗などがあり，これらは，中世遺跡では15世紀後葉から16世紀前葉にかけての時期に頻出することが明らかになりつつある[03]。また，間壁忠彦氏による備前焼編年[04]で，Ⅳ期の甕やⅤ期の擂鉢なども確認される。調査区全体では，整地・造成土とその上位の間で，陶磁器類の差異は特に認められず，例えば，整地・造成土には端反りの白磁皿・染付皿，備前焼擂鉢などが含まれている。

こうした郭の造成・加工や出土遺物の様相から，調査区の部分については，15世紀後半から16世紀前半の或る段階で郭群が築造され，16世紀後半以降は機能を停止したものと考えられる。そして，整地・造成土に相当数の遺物が含まれているが，これらについては，意図的に地中に埋納した様相は見受けられず，いわば不要品として土中に投入ないし混入したものであろう。このことから，郭群の築造段階に先立つ施設などの存在が想定される。この存在については，調査区内では確認されず，調査区外に可能性があるが，時期的には陶磁器類に見られるように郭群の築造段階と差はないだろう。

さて，郭1は東西方向30m，南北方向9～12mの規模で，西側は厚く造成してはいるが，全体に東西方向に傾斜しており，郭内の地表面の標高差は3.8mになる。郭2は東西方向28m，南北方向7～12mで，郭1と同程度の規模で，北西部を厚く造成している。全体に平坦に整えられ，郭内の地表面



Ⅲ－3－14図　萩原城跡高所部郭群測量図
（1：2,000，方位の北は磁北）

の標高差は1.2mであり，郭1とは様相が異なる。尾根先端部郭群については，郭1・郭2・郭3はある程度の規模であるが，以東は小郭が並ぶものである。そして，郭1と郭2の様相の差異や，郭1と郭2の間の標高差が7mで傾斜が約45°，郭2と郭3の間では標高差が2.6mで傾斜が30°弱であることなどからすれば，郭群の中で，郭2と郭3が中心的なものと考えられよう。

この尾根先端部郭群の東側に，萩原城の中核をなす高所部の郭群がある。ただ，両者は距離を置くと共に，構築内容に差があることから，同時期に存在したことへの疑問も持たれている[25]。今回，高所部の郭群について，地権者の了解を得て，中心部の現状での地形を測量した（Ⅲ－3－14図）。最高所の郭は東西方向80m，南北方向20～45mで，西側で南北方向に広がり，北側・東側に土塁がある。西側の郭はほぼ三角形になり，東西方向45m，南北最大幅35mである。北東隅を虎口としており，最高所及び北側の郭方向へ通路がある。北側の郭は紡錘形で，南北方向45m，東西最大幅30mになる。最高所と北側の郭の間には谷が入り，最高所の郭の北側斜面には井戸がある。こうした3カ所の郭周辺が萩原城の中心部の様相である。

出土遺物について

調査では，整地・造成土及びその直上を中心に，土器・陶磁器，土錘，ふいごの羽口，古銭，砥石などが出土した。土器・陶磁器には，貯蔵・調理・飲食の際に使用されるものがある。具体的には，備前焼・亀山焼の壺甕類，備前焼擂鉢，土師質土器皿，輸入陶磁器の碗皿類などで，人の生活が営まれたことを示している。これらの特徴としては，壺甕類はほとんどが備前焼であること，碗皿類については輸入陶磁器の比率が高いことなどが挙げられる。ちなみに，出土総数は土師質土器が46片，輸入陶磁器が53片になる。なお，土師質土器の用途に，灯明皿として使用される例も知られているが，出土品にはその明確な痕跡は確認されなかった。調理具としては，備

Ⅲ－3－4表　萩原城跡土師質土器・輸入陶磁器出土数一覧

品種 ＼ 出土地点・層位		郭 1		郭 2		郭2北側斜面	郭 3	計
		整地層	上 層	整地層	上 層	上 層	上 層	
土師質土器	皿	3	1	14		2		20
	片	2	7	12	1	3	1	26
青磁	碗	1	2	4	2	1	3	13
	皿	1						1
白磁	皿	1	1	1			2	5
	片		2	1	2			5
染付	碗	2	6				1	9
	皿	2	5	2			5	14
	片		1	1			3	5
褐釉陶器	片						1	1

※層位については，整地・造成土を整地層，その直上及び表土を上層とした。
品種について，器種の判明しないものは片とし，数値は出土した破片の総点数である。

前焼擂鉢のほかに，表土に含まれるものであるが，湯釜などに用いられる鉄釜が2点ある。形状の差異はあるが，釜に対応する身の口径は共に13.5cm前後と等しくなっている。

生産に関わるものとして，ふいごの羽口が2点あり，共に郭2の整地・造成土に含まれる。また，郭2・郭3からは鉄滓も出土しており，鍛冶が行われたことが想定されるが，関連施設は調査区内では確認されなかった。

漁網錘として使われる土錘は，管状のものが59点あり，うち16点は郭2の整地・造成土から一括して出土している。Ⅲ－3－15図は土錘の長さ及び幅と重さの関係を表したものである。○・●は完存及び僅かな欠失（体積の1％未満），△・▲は10％未満の欠失に見受けられるもので，●・▲は一括して出土したものである。基本的に重さは体積に比例しており，実際の数値としては，長さは3.3cmから5.9cm，幅は1.6cmから2.95cm，重さは8.9ｇから43.2ｇになる。長さ3㎝台では8ｇ台から14ｇ台，4㎝台で13ｇ台から37ｇ台，5㎝台で21ｇ台から43ｇ台である。幅は1.6・1.7㎝で8.9・10.0ｇ，2.0cm前後で15ｇ前後，2㎝台前半で20ｇ弱から30ｇ未満，2㎝台後半で28.0ｇから43.2ｇになる。

一括品については，長さが4.55㎝から5.6㎝，幅が2.45㎝から2.95㎝，重さが28.2ｇから43.2ｇで，平均は35.6ｇほどになる。こうした土錘の重さや形状などは，漁網の種類や使用する環境，網漁の方法と深く関わるものであろう。

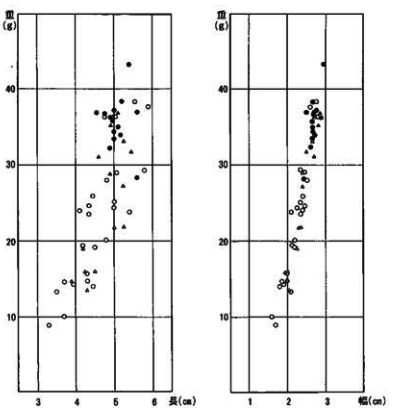
萩原城跡の南麓では，田総川が上下川と合流している。この田総川での伝来の漁法が明らかにされているので，ここに引用しておく[88]。

網漁には，投網（投げ網・打ち網），寄せ網（引網），ほうろく網（張り網・目刺し網）などの漁法があり，投網については「メセキ」網，「中目」網，「鯉網」に大別される。

「メセキ」網はハエや小アユを獲るもので，網目は小さく，1点が15ｇほどの鉛製の錘をつける。

「中目」網は主にアユ漁に使い，「メセキ」より網目がやや大きく，1点が20ｇから25ｇほどの鉛製の錘をつける。

「鯉網」は鯉など大形魚を獲るのに使われ，網目が大き



Ⅲ－3－15図　萩原城跡出土土錘寸法分布図

く，１点が４ｇほどの鉄製の錘をつける。

また，寄せ網にも鉄製の錘をつける。ほうろく網は主にハエを獲るもので，ほうろく（焙烙）の名は，使われる粘土素焼きの錘に由来するといわれている。

広島県内の中世城跡で土錘がまとまって出土した例には，広島市安佐北区の亀崎城跡[22]・横山城跡[28]，竹原市高崎城跡[29]，三次市加井妻城跡[21]がある。亀崎城跡からは560点出土し，長さ・幅が4.5・1.3cmから6.4・1.6cm程度のものがある。横山城跡からは40点出土し，長さは4.0cmから6.0cm，幅は1.0cmから1.5cmである。高崎城跡では１カ所の井戸から44点出土し，長さは2.95cmから4.65cm，幅は0.7cmから1.05cm，重さは2.4ｇから4.4ｇである。加井妻城跡からは284点出土し，重さは3.2ｇから21.4ｇまでになり，５ｇ台・10ｇ台・７ｇ台の順に出土数が多い。これらの城跡について，亀崎城跡・横山城跡は三篠川，加井妻城跡は可愛川とその支流の上村川，高崎城跡は瀬戸内海に臨むものである。また，芦田川が瀬戸内海に注ぎ出る河口付近に成立した中世の港町として，福山市の草戸千軒町遺跡がある。この遺跡からは1,800点を超える土錘が出土しており，形状は大きく４種類に分類され，重さを対象に入れて25種類に細分されている[20]。管状の土錘は８種類になり，小型のものから３種類（①・②・③）についての長さ（平均値・標準偏差），幅（平均値・標準偏差），重さ（平均値・標準偏差）は，①4.42・0.63cm，1.22・0.18cm，6.2・2.0ｇ，②4.44・0.69cm，1.75・0.19cm，12.9・2.0ｇ，③5.61・1.02cm，2.44・0.23cm，33.6・7.2ｇである。こうした遺跡出土の多様な土錘は，それぞれ使用される水域の環境や網漁の方法に沿うものであっただろう。

土錘の機能は，水中の網の形状を保つことで，重さが重要である。あらためて萩原城跡からの土錘を見ると，寸法の上では，長さでなく幅の数値の大小が重さに比例するものになっている。そして，一括品が28.2ｇから43.2ｇまであることを踏まえると，30ｇ台を中心にさらに前後するものが１つの種類と考えられる。これより軽量のものについては，寸法の分布から，10ｇ程度，15ｇ前後の種類があり，さらに20ｇ弱から30ｇ弱のものが存在する。出土状況と幅・重さの関係から，萩原城跡の土錘には，４種類はあったと言えるだろう。

古銭は郭１から１点，郭２から14点出土し，郭２の13点は整地・造成土に含まれていた。銭名は北宋銭の他に，明銭の洪武通宝・永楽通宝がある。砥石は頁岩製の仕上砥で，石材は京都産のものに類似している。当時，国内外の陶磁器類は商品として流通していたが，こうした硯も同様のことが想定される。

一石経経塚について

郭２の西端部で，一石経経塚を確認した。長径2.2m，短径1.6m，深さ0.3～0.45ｍの掘方に，河原石を中心とする礫が充満するものである。礫の点数は数万点に及び，その中の50点ほどにそれぞれ１文字の墨書がある。広島県内の一石経経塚の調査例としては，東広島市の善福寺跡[23]がある。隣接する基壇と高さが等しくなるように土を盛り，外周に石積みを築くもので，盛り土の上部に最大30cmの厚みで経石が納められている。経石は１～４cm大の扁平な河原石で，数百点に

「遍」・「生」・「知」・「其」・「阿」などの墨書があり，時期的には江戸時代以降と考えられている。また，世羅郡甲山町の万年寺跡[94]に近接して，室町時代から江戸時代初期の墓石群が並ぶ墓地があり，この墓地に接して一石経経塚が確認されている。経石は３～６㎝大の河原石で，「訶」・「語」・「衆」・「羅」・「故」などの墨書がある。万年寺は室町時代後半期に盛んな寺勢が示し，江戸時代初期から衰退するが，地域の人々の信仰により，跡地の小堂は維持されてきたものである。

こうした一石経経塚については，上部に立つ石碑の碑文の内容や発掘調査の成果から，以下の点が指摘[95]されている。時期的には室町時代後半から造られ，江戸時代に最盛期を迎え，全国各地で見られる。地中に坑を掘り，経石を納める施設を設けるが，経石を坑に直接納める場合もかなりあり，経石の点数は数万点に及ぶことも少なくない。一石に一字ずつ「法華経」を墨書した例が多いが，墨書がなされず，石のみが納められる例もあり，副納品はほとんど見つからない。経塚造営に込められた願意は，追善供養や現世利益に基づくものが多く見られ，鎮魂，五穀豊穣，病魔退散，無病息災，渇水時の雨乞，地鎮などがある。そして，造営に多数の人々が参加している点に特徴があり，多数の人と多量の経石により功徳が増大すると考えられると共に，造営の願意には，村落や地域共同体の日常的な生活と密接に関わるものが含まれている。

萩原城跡の一石経経塚は，数万点の石を坑に直接納めたもので，副納品は見られない。大多数の石に墨書は確認されなかったが，地中に納められたままの状況であり，墨書された石と同じ環境であったことからすれば，本来，墨書はほとんどなかったものであろう。墨書された石は50点ほどであるが，教典を明らかにするまでには至らない。造営の時期については，郭２の整地・造成土の上部から掘り込まれているので，郭群の築造以降になることは確かである。

三良坂町には，一石経経塚が数例造営されている。町内三良坂地区には，石室を組んでその中に「法華経」を記した一石経を納めた経塚が，文化11年（1814）に造られている[96]。石室の上部には石碑が立ち，「南無妙法蓮華経　一字一石印塔也」と共に，「天下太平　国土安穏　法界萬霊　抜苦与楽　五穀成就　万民快楽　施主面々　現安後善」と刻まれ，光善寺の住職が造営に携わっている。町内灰塚地区では，萩原城跡から１㎞ほど西方の廃白鷺寺に，享保13年（1728）の「一石一字　大乗妙典」とある石塔，北麓の興聖寺の近傍に，天明元年（1781）の「妙法蓮華経　菩□回向経　一字一石塔」とある石塔が確認[97]されている。また，興聖寺内には享保８年（1723）に建立された地蔵堂があり，地下に組まれた石室の中に経石が納められていた[98]。こうした周辺の一石経経塚に関わる事例は，江戸時代の18世紀から19世紀にかけての時期になり，記された教典には「法華経」がある。そして，寺院の境内や近傍に造営され，住職が関与している。

こうした周辺の事例から，萩原城跡の一石経経塚の造営は江戸時代の可能性があり，この地が選ばれた背景に，萩原城跡が地域のシンボルであったと推測されることが挙げられよう。明治22年（1899）の町村制施行により，三谿郡内の灰塚・萩原・大谷・仁賀・光清の５村が合併して萩原村を称したのは，城名による[99]ものである。そして，地域の人々の結び付きを基盤に共同して造営したことも想定され，城跡で郭２の地が選ばれたのは，地表面で確認されたように，北麓からの通路が到達している点と関連することが考えられる。

総　括

最後に，あらためて，萩原城跡の調査成果についてまとめておく。調査区は，尾根先端部郭群の西半部で，この郭群では郭２と郭３が中心的なものになる。郭群は15世紀後半から16世紀前半の戒る段階に築造されており，先立つ施設などの存在が調査区外に推定されるが，郭群の築造と時期差は特に認められない。また，造成・加工などの工事が複数時にわたってなされたとは見受けられず，一度築造されたものが廃絶時まで踏襲されたことが推定される。なお，廃絶は16世紀後半であろう。

出土遺物には，貯蔵・調理・飲食の際に使用されるものがあり，この地で人の生活が営まれていたことを示す。また，生産活動に関わるものとして，ふいごの羽口や鉄滓，土錘がある。土錘は総計59点になり，機能として重要な重さから４種類に分類され，用途により使い分けられていたことが想定される。

郭２の西端部では，一石経経塚が確認された。時期は明言できないが，郭群の築造以降であることは確かで，周辺の造営例などから江戸時代の可能性がある。また，願意も明らかではないが，萩原城跡が地域のシンボルであり造営の場所として選ばれたこと，地域の人々が共同して造営したことも想定される。

註

(1) 新祖隆太郎「広島県灰塚ダム周辺の歴史環境－中世考古資料－」(「灰塚ダム湖とその周辺の生活」編集委員会編『灰塚ダム湖とその周辺の生活』) 灰塚ダム建設三町連絡協議会　1998年

(2) 郭１の西端部の東西方向５ｍ分について，三良坂町教育委員会が調査を実施した。

(3) 岡秀夫『経塚』 ニュー・サイエンス社　1985年
岡秀夫『経塚の諸相とその展開』 雄山閣出版　1989年

(4) 草戸千軒町遺跡出土の砥石を参照した。文献は，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編「遺物　砥石の分類と用途」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』 広島県教育委員会　1996年

(5) 三次市の加井要城跡から鉄壺が出土しており，形状は231に類似し，壺に対応する身の口径は14cm前後である。文献は，広島県教育委員会「加井要城跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)』 1979年

(6) 『広島県史・古代中世資料編Ⅳ』「田利八幡神社・木造神像底面墨書銘」

(7) 『広島県史・古代中世資料編Ⅳ』「福禅寺・福禅寺大仏宝殿造立棟札」

(8) 『萩藩閥閲録』巻89　田総悠左衛門９号

(9) 天文年間（1532～1555）の半ば以降に，和智誠春・湯谷久盧兄弟の事跡が多く明らかになっている。文献は，吉舎町史編集委員会編「中世編・社寺編」『吉舎町史・上巻』 吉舎町教育委員会　1988年

(10) 『大日本古文書・毛利家文書』 225号

(11) 註(1)と同じ

(12) 藤村耕市「広島県灰塚ダム周辺の歴史環境－通史－」(「灰塚ダム湖とその周辺の生活」編集委員会編『灰塚ダム湖とその周辺の生活』) 灰塚ダム建設三町連絡協議会　1998年

(13) 櫻伸一郎「中世後期の貿易陶磁器」(中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』) 真陽社　1995年

(14) 間壁忠彦『備前焼』 ニューサイエンス社　1991年

(15) 註(1)と同じ

(16) 総領町誌編さん事務局編「総領町の産業　漁業」『総領町誌』 総領町　1994年

(17) 広島県教育委員会「亀崎城跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年

(18) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『横山城跡』 1984年

(19) 竹原市教育委員会『広島県竹原市　高崎城跡発掘調査報告』 1986年

(20) 広島県教育委員会「加井妻城跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)』 1979年

(21) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編「遺物　土製品」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ』 広島県教育委員会　1995年

(22) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「善福寺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)』 1983年

(23) 向田裕始「禅宗僧・扶岩叡樹墓について」『芸備』第29集　芸備友の会　2000年

(24) 註(3)と同じ

(25) 三良坂町誌編集委員会編『三良坂町誌』 三良坂町　1973年

(26) 藤村耕市・中畑和彦「広島県灰塚ダム周辺の歴史環境－歴史資料－」(「灰塚ダム湖とその周辺の生活」編集委員会編『灰塚ダム湖とその周辺の生活』) 灰塚ダム建設三町連絡協議会　1998年

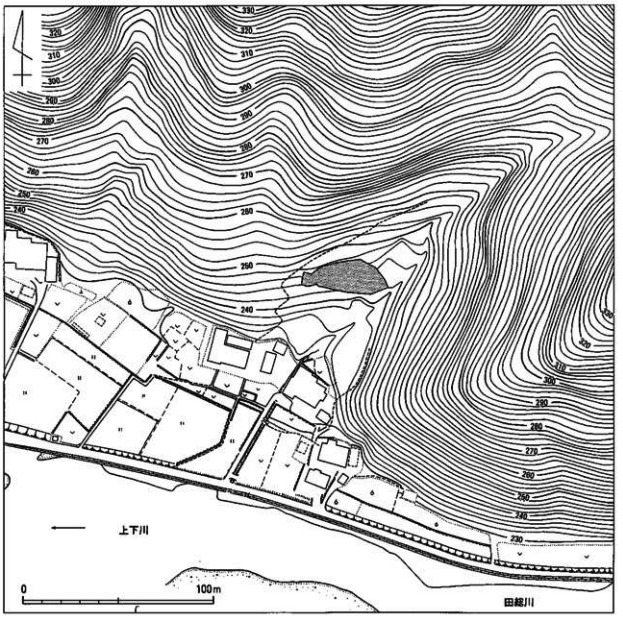
(27) 三良坂町教育委員会より，経石の存在と共に，石室は地蔵堂建立の際に造営されたものであろうという教示を得た。

(28) 『日本歴史地名体系35　広島県の地名』「双三郡」 平凡社　1982年

4　清替屋古墓・清替屋遺跡

(1)　調査の概要

清替屋古墓・清替屋遺跡は，三良坂町大字壬生原字瀧山に所在する。上下川と田総川の合流地点に接する北側の谷筋に立地し，合流地点からの距離は約150mになる。この谷筋は，中世の山城である萩原城跡の南側斜面にあたり，近年まで耕作地として利用されていた。谷筋の規模は，開口部50m，奥行き100m，標高差20mほどになる。清替屋古墓はこの谷筋の中位の西側にあり，調査以前には宝篋印塔を中心に石塔類が集積[1]されていた（Ⅲ－4－2図）。宝篋印塔は中世後期のものと考えられ，花崗岩製で，相輪部を失うものの笠部以下が残っている。こうした状況か



Ⅲ－4－1図　清替屋古墓・清替屋遺跡周辺地形図（1：2,000，アミ目は調査区）

Ⅲ－4－2図　調査前の清替屋古墓

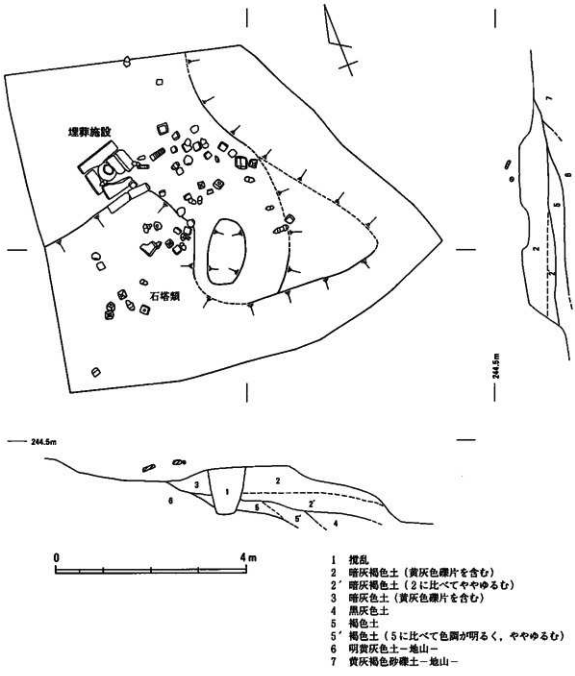
ら，墓石である石塔類に関連した施設の存在が推定されていた。調査の結果，備前焼壺に焼骨を納め，その周りを花崗岩の切石で囲んだ埋葬施設の存在が明らかになった。この施設の下部には中世以前の遺物を含む造成面がある。また，表土層に散乱した状態で含まれるものであるが，56点の石塔類を確認した。

清替屋遺跡は谷筋の中央を占める。古墓に接しており，その地点では標高が2ｍ低い。耕作地として利用されていたこともあって，2段の平坦面に分かれていた。この場所でも，古墓に隣接することから関連施設の存在が推定されていた。調査の結果，中世の関連施設は確認されなかったが，4基が並ぶ近世の墓坑群を検出した。また，古墳時代の祭祀の存在が推定されることとなった。

(2)　**清替屋古墓**（Ⅲ－4－3図，図版4－2ａ）

清替屋古墓の調査区の規模は東西5.0～8.4ｍ，南北6.0～7.0ｍである。調査区内の東側から南側にかけては遺構面が低くなり，斜面となる。これは土砂の崩落等により削平された可能性や，あるいは造成による本来的な地形であることも考えられる。表土を除去した段階で調査区北西端部の標高は244.9ｍ，中央部北西寄りの地点で標高243.9ｍ，中央部南東寄りの地点で243.9ｍとなり，全体的に北西から南東に向かって緩やかな傾斜がついている。調査区北西部では地山の上部に灰褐色土があり，この面から埋葬施設が築造されていた。また，中央部については，ほぼ平坦面となっており，地山の上部に褐色土，黒灰色土，暗灰褐色土などが盛られている。この平坦面では，近年に掘り込まれた坑があるが，ほかの施設は確認されなかった。

出土遺物は，中央部の盛り土に土師器，須恵器が含まれていた。また，表土には，土師器，須恵器，土師質土器，備前焼，古銭などがある。なお，埋葬施設の東側から南側にかけて，56点の石塔類を確認した。五輪塔が46点，宝篋印塔が10点で，ほとんどは結晶質石灰岩製のものである。



Ⅲ－4－3図　清替屋古墓遺構図（1：80）

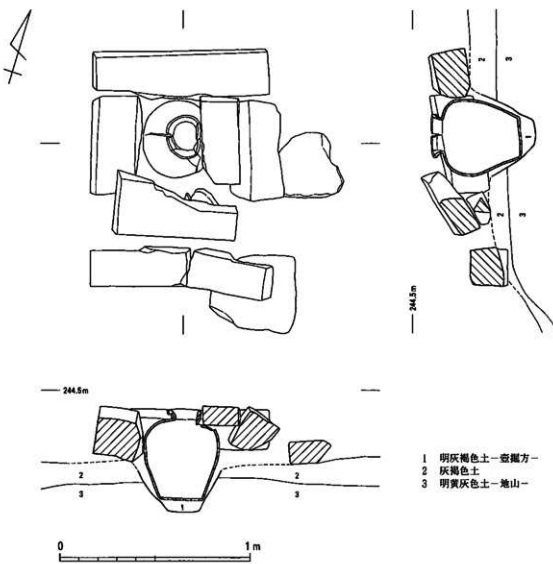
埋葬施設（Ⅲ－4－4図，図版4－2b・c）

埋葬施設は調査区中央部の北西寄りに位置している。備前焼壺に焼骨を納め，周りを花崗岩切石で囲むものである。

ただ，調査時には，大型の礫が流れ込み，切石が移動するなど，原状が変容していたが，これは土砂の崩落等によるものだろう。この施設の築造に際しては，まず径45cm，深さ35cmの坑を掘り，壺を据えている。壺は口径20cm，高さ47cm，最大胴径37cmで，肩部近くまでが坑内に据わる

が，坑の底と壺底部の間には空隙がある。壺に納められた焼骨は破砕されたものと見受けられ，四肢骨・頭骨などが確認された。

次に，東西南北４辺に矩形の切石を配置して，１辺90cmほどの方形の石組みとしている。切石に伴う掘方は確認されず，本来地表に据えられたのであろう。切石は，北辺・南辺のものが長く，北辺・西辺・南辺・東辺のそれぞれの長さ・幅は90×25・50×20・90×20・53×20cmで，厚さは４辺とも20cm程度になる。これらの切石の中で，南辺については，大きく移動し，折れてもいる。この方形の石組みの南辺・東辺の上にも切石があり，東辺は長さ45cm×幅20cmの矩形で，壺の口縁部に接している。南辺の切石については，３辺は直線的に切り整えられているが，壺の口縁部に向かう辺は弧状になっており，長さ60cm×幅15～30cmである。北・西側には上部の切石は確認されなかったが，２段目の石組みとして，壺の口縁部を取り巻くように，切石が方形に組まれていたことも想定される。なお，上部の切石の厚さは10cm程度で，下部の切石より薄くなっている。



Ⅲ－４－４図　清替屋古墓埋葬施設実測図（１：20）

そして，切石による石組みは台石となり，上部に石塔が置かれた可能性も想定される。

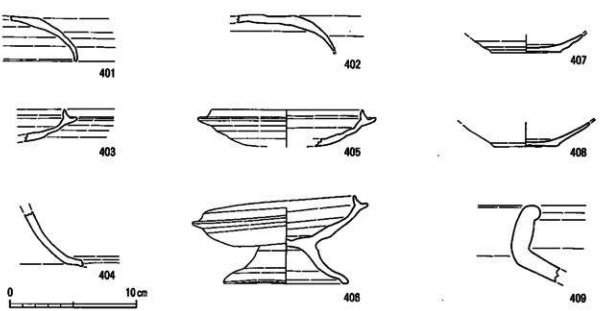
この埋葬施設について，坑が掘り込まれ，切石が据えられたのは灰褐色土層である。これは地山の上の層になり，埋葬施設の周囲で15cmほどの厚みがあり，須恵器が含まれていた。なお，壺内にも周辺から流入したと考えられる須恵器片が確認された。

出土遺物（Ⅲ－4－5・Ⅲ－4－6図，図版4－6）

調査区の中央部から北西部に広がる地山の上部の造成土に，土師器，須恵器が含まれ，土師器には高杯，須恵器には杯身・杯蓋・壺・甕などがある。404は土師器高杯の脚部で，端部は失われている。内外面とも回転ナデが施される。401・402は須恵器杯蓋で，401の口縁部はほぼ垂直気味に下りる。403はかえりを持つ須恵器杯身である。これらの須恵器は体部から口縁部にかけて，内外面とも回転ナデが施され，401・402の天井部外面は，共に回転ヘラ削りである。

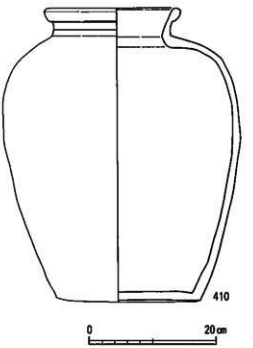
表土には，土師器，須恵器，土師質土器，備前焼，古銭などが含まれる。須恵器には杯身・杯蓋・高杯・甕などがある。405は須恵器杯身で，復元口径は11.8cmである。406は須恵器高杯で，杯部と脚部には歪みが生じている。口径11.8cm，最大器高7.0cmになる。脚部は下端部が内湾し，底径9.8cm，高3.5cmで，内外面とも回転ナデが施される。405と406杯部については，体部から口縁部にかけて内外面とも回転ナデ，底部外面はヘラ切りの後にナデが施されている。

407・408は土師質土器皿である。ともに底部は回転糸切りで，それぞれの底径は5.5cm・5.1cmになる。409は備前焼壺で，頸部はやや外半し，口縁部は玉縁に整えている。備前焼には小壺もある。古銭で銭種の判明するものに元豊通宝（1078年初鋳），また，聖宋元宝（1101年初鋳）と見受けられるものがある。



Ⅲ－4－5図　清替屋古墓出土遺物実測図1（1：3）

410は埋葬施設に使用された備前焼壺で，口径20.0cm，底径22.4cm，胴部最大径36.9cm，器高47.0cmになる。口縁部は玉縁に整え，頸部は外反し中央に沈線が入る。内外面に縦方向のハケ目があり，肩部に自然釉が見られる。



Ⅲ－4－6図　清替屋古墓出土遺物
実測図2（1：6）

石塔類（Ⅲ－4－7・Ⅲ－4－8・Ⅲ－4－9・Ⅲ－4－10図，Ⅲ－4－1表，図版4－4・4－5）

表土に含まれるものであるが，埋葬施設の東側から南側にかけて，56点の石塔類を確認した。五輪塔が46点，宝篋印塔が10点で，宝篋印塔の3点が花崗岩製，ほかの53点は結晶質石灰岩製である。

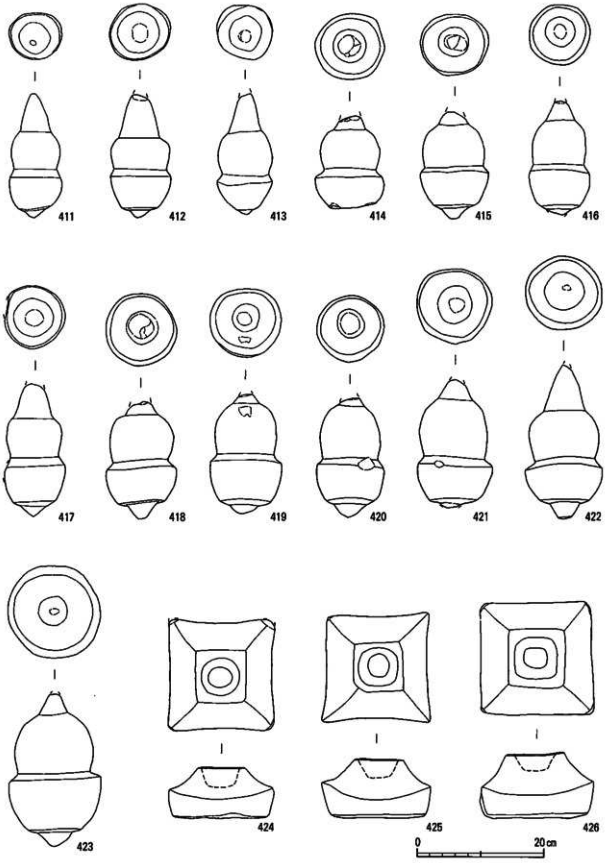
五輪塔には空風輪・火輪・水輪・地輪の各部位がある。

空風輪（411～423）は13点あり，空輪部・風輪部が単独のものは確認されない。現存値で空輪部径は7.8～12.5cm，風輪部径は8.4～14.6cmになる。411・412・413・417・422は明らかに空輪部の頂部が発達している。最大品は423で，現存高24.1cm，空輪径12.5cm，風輪径14.6cmになり，空輪部頂部の発達は顕著ではない。なお，412・413は空輪部と風輪部の径の差が小さく，414は現状では下部のほぞを確認できない。

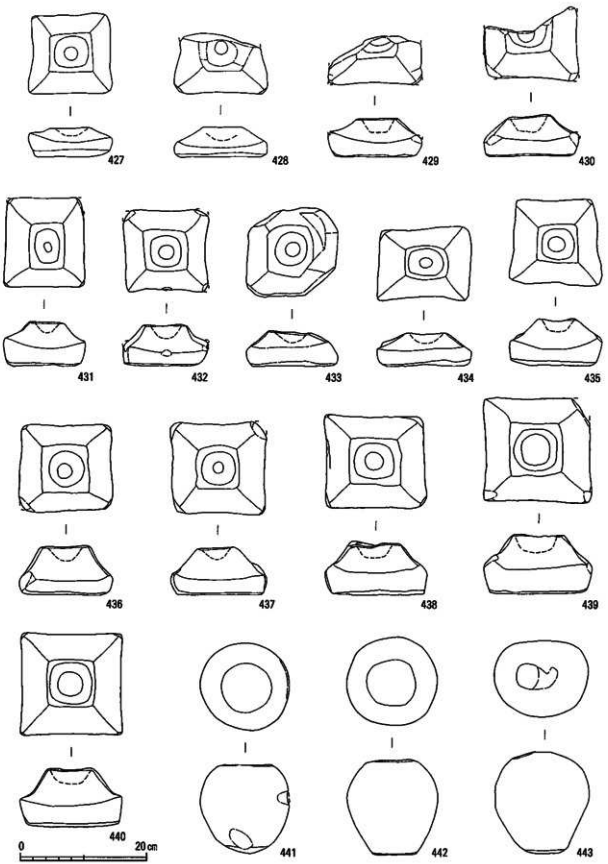
火輪（424～440）は17点あり，428・429・430は欠失が著しい。現存値で高さは4.7～10.3cm，長さ・幅は11.8～17.8cmになる。431・434は平面形が長方形を呈している。435の平面形はやや不整形であるが，本来的な形状に見受けられる。425は四隅が張り出し，反り上がるものである。最大品は426で，平面形が整っており，現存高10.3cm，長さ・幅は17.8・17.cmになる。

水輪（441～447）は7点ある。443の横断面は扁平なものになっており，本来の形状から相当部分が失われたものであろう。441～446については，現存値であるが，それぞれの個体の高さと径の寸法値は近似しており，高さは13.8～17.9cm，径は13.9～18.8cmになる。最大品は446で，現存高17.9cm，径18.8cmである。ただ，447は側面形が扁平で，現存高13.3cm，径21.3cmになり，本来的に他の6点とは形状が異なるものであろう。

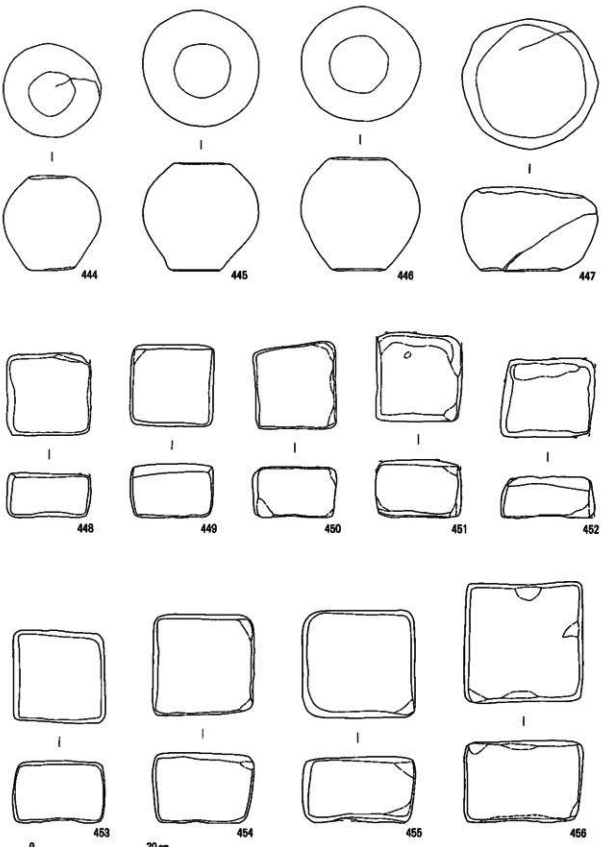
地輪（448～456）は9点ある。現存値で高さは6.5～12.9cm，長さ・幅は12.4～19.0cmになる。450・452は平面形が不整形なものになっている。側面形は高さが扁平なもの（452）や厚みのあるもの（451・453・456）が確認される。最大品は456で，現存高12.9cm，長さ・幅は19.0・18.9cmである。なお，453・456の底面には，刳り込んだ際のノミの痕跡が見られる。



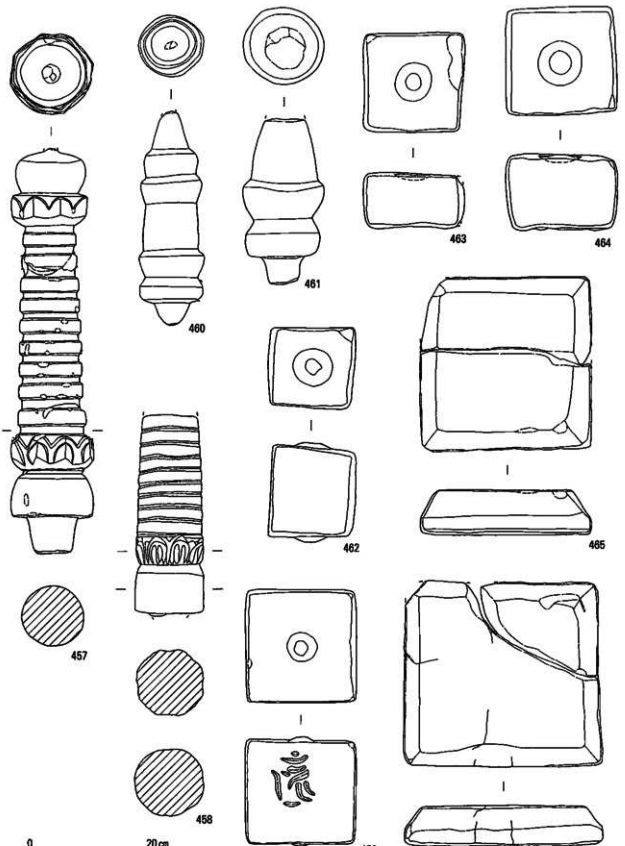
Ⅲ－４－７図　清替屋古墓出土石塔類実測図１（１：６）



Ⅲ－4－8図　清替屋古墓出土石塔類実測図2（1：6）



Ⅲ－4－9図　清替屋古墓出土石塔類実測図3（1：6）



Ⅲ－４－10図　清替屋古墓出土石塔類実測図４（１：６）

宝篋印塔には相輪（457・458・460・461），塔身（459・462），基礎（463・464），基壇（465・466）の各部位があり，457～459が花崗岩製，460～466が結晶質石灰岩製である。ただ，笠部は確認されなかった。

457は宝珠部の頂部が若干欠失している。上下の請花部には共に各8葉の蓮弁が表現され，九輪部は上部に向かうにつれて径が徐々に小さくなる。458は宝珠・上部請花部が失われており，現存高は31.8cmである。下部請花部には8葉の蓮弁が表現され，九輪部の各輪の間隔は，457に比すると狭くなっている。460・461は，九輪や請花蓮弁などの表現はデフォルメされている。460の宝珠部頂部は発達するもので，461の現存高は26.3cmで相輪下部になる。

塔身の459・462は上下面にほぞがあり，459は4面に梵字の「 」「 」「 」「 」を刻んでいる。

基礎の463・464は上面にほぞ穴があり，側面形について，463の高さは扁平，464は厚みを持つものである。

基壇の465・466の側面形は扁平な台形で，前者は後者に比して長さ・幅は小型であるが，高さに厚みがある。

Ⅲ－4－1表　清替屋古墓出土石塔類一覧(1)

番号	種類・部位	材　質	現存寸法（cm）	備　考
411	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高19.5　空輪径 7.8　風輪径 8.4	空輪部頂部が発達
412	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高19.4　空輪径 9.1　風輪径 9.4	空輪部頂部が発達
413	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高19.1　空輪径 8.5　風輪径 8.7	空輪部頂部が発達
414	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高14.7　空輪径 9.5　風輪径10.9	
415	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高17.0　空輪径 9.7　風輪径10.8	
416	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高17.9　空輪径 8.4　風輪径 9.5	
417	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高20.7　空輪径 8.5　風輪径 9.9	空輪部頂部が発達
418	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高18.4　空輪径10.2　風輪径11.4	
419	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高18.6　空輪径 9.6　風輪径11.3	
420	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高18.5　空輪径 9.5　風輪径10.7	
421	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高20.0　空輪径10.8　風輪径11.9	
422	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高23.8　空輪径10.8　風輪径11.9	空輪部頂部が発達
423	五輪塔・空風輪	結晶質石灰岩	高24.1　空輪径12.5　風輪径14.6	
424	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 8.0　長・幅 17.5・16.8	
425	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 9.3　長・幅 17.2・17.2	四隅が張り出す
426	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高10.3　長・幅 17.8・17.8	
427	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 4.7　長・幅 13.2・12.8	
428	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 4.8　長13.8	欠失顕著
429	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 6.1　長14.9	欠失顕著
430	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 6.5　長15.9	欠失顕著
431	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 6.9　長・幅 14.1・12.9	平面形長方形
432	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 6.5　長・幅 13.5・12.9	

Ⅲ－4－1表　清替屋古墓出土石塔類一覧(2)

番号	種類・部位	材　質	現存寸法(cm)	備　考
433	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 5.5　長・幅 14.5・14.0	
434	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 5.2　長・幅 14.9・11.8	平面形長方形
435	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 7.3　長・幅 14.7・13.6	平面形不整形
436	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 7.4　長・幅 15.1・14.6	
437	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 7.7　長・幅 14.7・13.9	
438	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 8.4　長・幅 16.1・14.8	
439	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 9.3　長・幅 17.0・16.6	
440	五輪塔・火輪	結晶質石灰岩	高 9.2　長・幅 16.2・16.0	
441	五輪塔・水輪	結晶質石灰岩	高13.8　径13.9	
442	五輪塔・水輪	結晶質石灰岩	高14.3　径14.3	
443	五輪塔・水輪	結晶質石灰岩	高15.9　径14.9	
444	五輪塔・水輪	結晶質石灰岩	高15.0　径15.4	
445	五輪塔・水輪	結晶質石灰岩	高17.1　径18.5	
446	五輪塔・水輪	結晶質石灰岩	高17.9　径18.8	
447	五輪塔・水輪	結晶質石灰岩	高13.3　径21.3	偏面形扁平
448	五輪塔・地輪	結晶質石灰岩	高 7.0　長・幅 13.1・12.9	
449	五輪塔・地輪	結晶質石灰岩	高 8.5　長・幅 13.3・12.7	
450	五輪塔・地輪	結晶質石灰岩	高 8.1　長・幅 13.7・13.3	平面形不整形
451	五輪塔・地輪	結晶質石灰岩	高 9.1　長・幅 13.7・13.6	
452	五輪塔・地輪	結晶質石灰岩	高 6.5　長・幅 14.8・12.4	平面形不整形
453	五輪塔・地輪	結晶質石灰岩	高 9.7　長・幅 14.6・14.6	
454	五輪塔・地輪	結晶質石灰岩	高10.1　長・幅 16.1・15.8	
455	五輪塔・地輪	結晶質石灰岩	高 9.3　長・幅 17.7・16.8	
456	五輪塔・地輪	結晶質石灰岩	高12.9　長・幅 19.0・18.9	
457	宝篋印塔・相輪	花崗岩	高64.1　宝珠径11.0	上下請花部に蓮弁を表現
			上部請花径11.8　九輪径 8.3～10.7	
			下部請花径12.9　伏鉢径12.8	
458	宝篋印塔・相輪	花崗岩	九輪径 9.0～10.1	請花部に蓮弁を表現
			下部請花径10.6　伏鉢径10.8	
459	宝篋印塔・塔身	花崗岩	高17.2　長・幅 17.8・17.6	四面に梵字を刻む
460	宝篋印塔・相輪	結晶質石灰岩	高33.5　宝珠径 8.5	細部の表現を省略,
			上部請花径 9.5　九輪径 8.7	宝珠部頂部が発達
			下部請花径10.2　伏鉢径 9.9	
461	宝篋印塔・相輪	結晶質石灰岩	下部請花径12.7　伏鉢径11.7	細部の表現を省略
462	宝篋印塔・塔身	結晶質石灰岩	高15.7　長・幅 13.8・12.8	
463	宝篋印塔・基礎	結晶質石灰岩	高 8.8　長・幅 16.1・15.8	
464	宝篋印塔・基礎	結晶質石灰岩	高11.9　長・幅 17.5・17.1	
465	宝篋印塔・基壇	結晶質石灰岩	高 7.1　長・幅 27.2・27.0	
466	宝篋印塔・基壇	結晶質石灰岩	高 6.6　長・幅 31.4・29.5	

(3) 清替屋遺跡（Ⅲ－4－11・Ⅲ－4－12・Ⅲ－4－13図，図版4－1c，4－3a・b）

清替屋遺跡の調査区の規模は東西40m，南北は7～18mである。遺跡は上下2段の平坦面に分かれている。

上段の規模は東西28m，南北3～9mである。表土を除去した段階で，標高は南西端部で243.0m，北西端部で243.8m，中央部で243.5m，南東端部で244.6m，北東端部で245.0mとなり，北から南にかけて緩やかに傾斜し，東側が高くなっている。

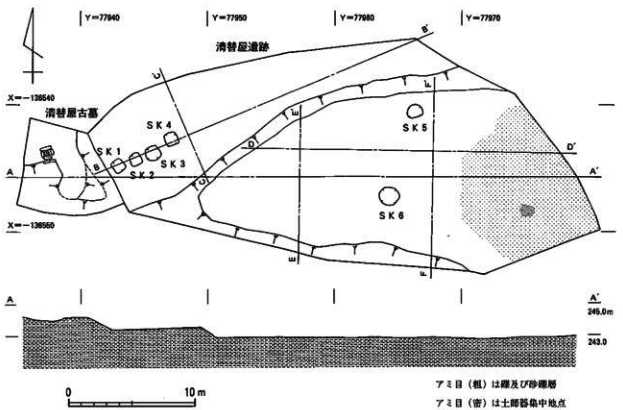
表土を除去すると，南西部を除いて地山の岩盤や砂礫層が現れたが，南西部では斜面に沿って，暗灰色土や褐色土の盛り土をして平坦面を造成しており，特に，南端部では厚さが1mを超える。盛り土には，土師器，須恵器，土師質土器が含まれる。遺構では，西側に近接する4基の土坑（SK1～SK4）があり，これらは形状や出土遺物から墓坑になる。いずれも盛り土の上から掘り込まれ，平面形は方形を基調としている。

SK1

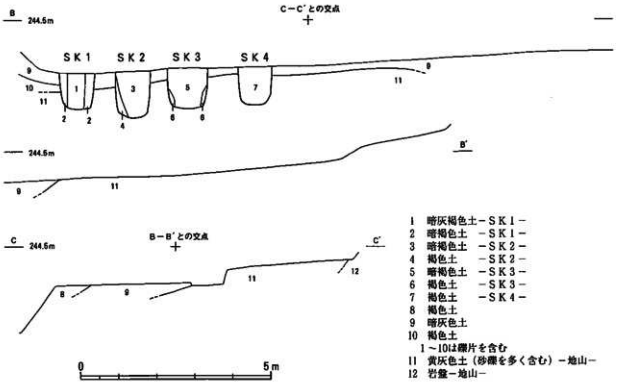
長辺1.0m，短辺0.95m，深さ0.9mで，坑内埋土については中央部が暗灰褐色土，周縁部が暗褐色土となっており，土質に差異が見られる。出土遺物には陶器皿，鉄釘，煙管，古銭（寛永通宝）がある。

SK2

長辺1.0m，短辺0.9m，深さ1.2mで，坑内埋土は暗褐色土が中心であるが，周縁部の土質に若



Ⅲ－4－11図　清替屋遺跡遺構配置図（1：300）



Ⅲ－4－12図　清替屋遺跡土層断面図1－上段－（1：100）

干の差異が見られる。出土遺物には陶器皿がある。

SK3

一辺1.2m，深さ1.0mで，坑内埋土は暗褐色土が主であるが，周縁部に褐色土がある。出土遺物には陶器皿，煙管，人骨がある。

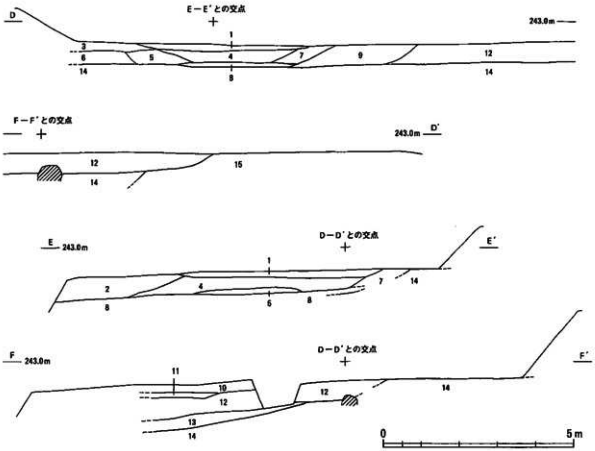
SK4

一辺1.0m，深さ1.0mで，出土遺物には煙管，古銭（寛永通宝），鉄釘，刀子，加工木片，人骨がある。

なお，これらの墓坑について，SK1は，土質の状態から中央に棺桶が据えられ，埋葬されたと推定される。SK4は加工木材が棺材の可能性がある。

下段の規模は東西32m，南北は最大14mである。表土を除去した段階で，標高は調査区西端部で242.3m，中央部で242.5m，北東端部で242.5m，南東端部で242.4mとなり，ほぼ平坦地となっている。上段から下段にかけては急傾斜の斜面となっており，標高差は0.9～2.0mである。

北部では，表土を除去すると，地山の砂礫層があるが，その南側は造成土が堆積し，南下するほど厚くなっている。地山の上に暗褐色土，暗灰褐色土，明褐色土などの盛り土をしており，その厚さが1mを超える場所もある。これらの盛り土は，土質を見ると，単に地山を切り崩しただけのものではなく，他の場所から運んできたことが考えられる。なお，盛り土の間には数10cmの厚さで礫を多量に含む部分があり，地山を切り崩した際に生じた礫を造成時に積み重ねたもので



Ⅲ－４－13図　清替屋遺跡土層断面図２－下段－（１：100）

あろう。これらの造成土には，土師器，須恵器，土師質土器，瓦質土器，近世以降の陶磁器，土錘，鉄釘，鉄滓などが含まれる。遺構については，土坑が２基（ＳＫ５，ＳＫ６）確認された。

ＳＫ５

調査区中央北側にあり，砂礫層を掘り込んでいる。長円形で径は1.1ｍ～1.3ｍ，深さ0.45ｍである。出土遺物には近世以降の陶磁器，煙管があり，廃棄坑の可能性もある。

ＳＫ６

調査区中央南寄りにあり，長円形で径は1.4ｍ～1.7ｍ，深さ0.4ｍで，土坑中央に径１ｍほどの巨石が据わっていた。土坑は造成土中に掘り込まれており，巨石は次に触れるように，本来近辺に存在したことからすれば，平坦地を造成・整備する際に，坑内へ埋められたものであろう。

また，調査区の東端部にかけて東西10ｍ，南北12ｍの範囲で，大小の礫が密集して分布する様

相を確認した。標高は南西部で241.3m，中央部で242.3m，北東部で242.6mとなり，礫群は北から南にかけて緩やかに傾斜している。南側では，径１ｍを超える巨石も存在している。この礫・石の分布は人為的なものではなく，地表に現れていた本来の景観と考えられる。礫の上面や間隙に，主に土師器が散在的に含まれており，１ｍ四方の範囲内に土師器の甕片やミニチュア土器等が集中する地点もある。土器類は多くが摩耗して細片となっており，往時の地表に散布されたものであろう。これらの自然石・礫群の露頭，ミニチュア土器を含む土師器の散布は，古墳時代の祭祀に関連することが推定される。

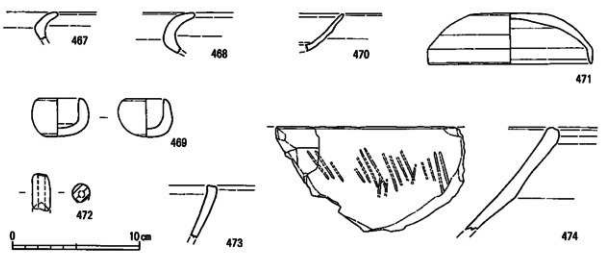
出土遺物（Ⅲ－４－14図，図版４－６）

上段の造成土に，土師器，須恵器，土師質土器が含まれ，須恵器には杯身・杯蓋がある。470は須恵器杯身，471は杯蓋で，ともに体部から口縁部にかけて，内外面とも回転ナデが施される。471の天井部外面はヘラ削りがなされ，器高4.0cm，復元口径13.7cmである。

下段の東側では，かつて自然石・礫群が地表に現れていたと考えられ，その上面や間隙に主に土師器が含まれている。467・468は土師器甕で，ともに内面の頸部下半にはヘラ削り，468の口縁部から外面の頸部上半には回転ナデが施される。469は手捏ねのミニチュア土器で，口径3.1cm，器高3.1cmである。また，自然石・礫群の上面には，須恵器，土師質土器，瓦質土器なども確認され，474は瓦質土器擂鉢，473も瓦質土器の鉢類である。474の内面は摩耗が顕著であるが，擂目は交叉するもので，上部では斜め方向に施されている。

下段の造成土には，土師器，須恵器，土師質土器，瓦質土器，近世以降の陶磁器，土錘，鉄釘，鉄滓などが含まれる。472は土錘で，管状の小型品である。

また，表土には，土師器，須恵器，土師質土器，瓦質土器，古銭などが含まれる。



Ⅲ－４－14図　清替屋遺跡出土遺物実測図（１：３）

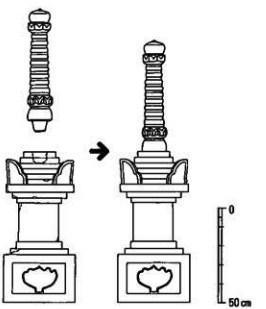
(4) 小 結

清替屋古墓・清替屋遺跡の調査では，備前焼壺に焼骨を納めてその周りを花崗岩切石で囲んだ埋葬施設や，自然石・礫群が露頭する地表に土師器が散布された様相などが明らかになった。この点を踏まえて，この地の推移についてまとめてみたい。

ミニチュア土器をはじめとする土師器の散布は，古墳時代の祭祀に関連するものであろう。自然石・礫群が，祭祀の対象または介在するものと推定される例に，東広島市の胡麻２号遺跡[2]がある。礫群の近辺に，ミニチュア土器を含む土師器群が分布し，礫群の間隙には，奈良～平安時代にかけての須恵器や土師質土器が含まれていた。祭祀の内容としては，礫群の露頭という景観そのものが対象であることや，交通路・湧水などとの関連が想定されている。清替屋遺跡の自然石・礫群の範囲は，調査区外の東側から南側へ広がっており，東側の近接した場所には山の岩肌の間を谷川が流れている。谷川はやがて田総川と合流した上下川に入る。現在，遺跡から上下川・田総川の合流点までは約150ｍの距離である。この点から，祭祀の一つの可能性として，河川・水に関わることが想定される。

その後，この地での営みに，清替屋古墓での土地の造成がある。造成土に含まれる土器類は，土師器と須恵器のみで，中世に下る時代のものはない。造成面からは備前焼壺と花崗岩切石による埋葬施設が築造されている。備前焼壺の製作年代は，間壁忠彦氏による備前焼編年[3]のⅢ期後半に位置づけられ，14世紀後半のものになる。切石は土砂の崩落等により原状が変容していたが，２段分を確認し，上段は壺の口縁部を取り巻くように組まれていたものだろう。そして，切石による石組みは台石となり，上部に石塔が置かれていたことも想定される。

この埋葬施設の近辺で，表土に含まれるものであるが，56点の石塔類を確認した。五輪塔が46点，宝篋印塔が10点で，宝篋印塔の３点が花崗岩製，ほかの53点は結晶質石灰岩製である。また，調査前には，中世後期のものと見受けられる宝篋印塔を中心に石塔類が集積されていた。出土した五輪塔について，原状を保ちにくい結晶質石灰岩製ではあるが，空風輪の頂部や火輪の四隅の形状などから，近世に至る時代のものも含まれるようである。これらのことから，清替屋古墓の地は，中世後期から近世にかけて埋葬施設や石塔類が営まれた地と言えよう。Ⅲ－４－15図は，調査前に置かれていた宝篋印塔[4]の笠部以下と出土した相輪部で，両者は同一品の可能性もある。



Ⅲ－４－15図　清替屋古墓の宝篋印塔（１：20）

次に，清替屋遺跡の上段の地の造成がなされる。造成土に含まれる土器類は，土師器，須恵器，土師質土器である。造成面からは４基の墓

坑が掘り込まれており，近世以降のものになり，いずれも平面形は方形を基調としている。墓坑の場所は清替屋古墓に近接する地点で，埋葬の場としての認識が存在したのであろう。

やがて，清替屋遺跡の下段の地の造成がなされる。造成土には近世以降の陶磁器類が含まれており，上段の地とは造成の時期と目的に差があったことが想定される。造成土中に掘り込まれたものとしてＳＫ５があり，中央に巨石が据わっていた。巨石は本来は近辺の地山に含まれていたもので，平坦地を造成・整備する際に，坑内へ埋められたのであろう。この下段の平坦地，そして，やがては上段の平坦地も，耕作地として近年まで利用されることになる。なお，清替屋古墓の地は，石塔類が存在することもあって，東側が耕作地として利用されるようになっても，高まりとして残されたのであろう。

以上が清替屋古墓・清替屋遺跡の地の推移の概略で，古墳時代の祭祀や，中世後期から近世にかけての埋葬施設や石塔類が確認された。また，このほかにも，土師器，須恵器，土師質土器，瓦質土器などが出土している。これらについて，遺跡が立地する谷筋周辺は急峻な斜面で，前面には河川と氾濫原が広がっており，日常的な居住を推定するのは困難な様相であり，可能性としては，祭祀や一時的な営みが近辺でなされたことが挙げられよう。

註

(1) これらの石塔類は，灰塚ダム建設に伴う灰塚生活再建地（のぞみが丘）に移転されている。

(2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「胡麻２号遺跡」『東広島ニュータウウン遺跡群Ⅰ』 1990年

(3) 間壁忠彦『備前焼』 ニューサイエンス社 1991年

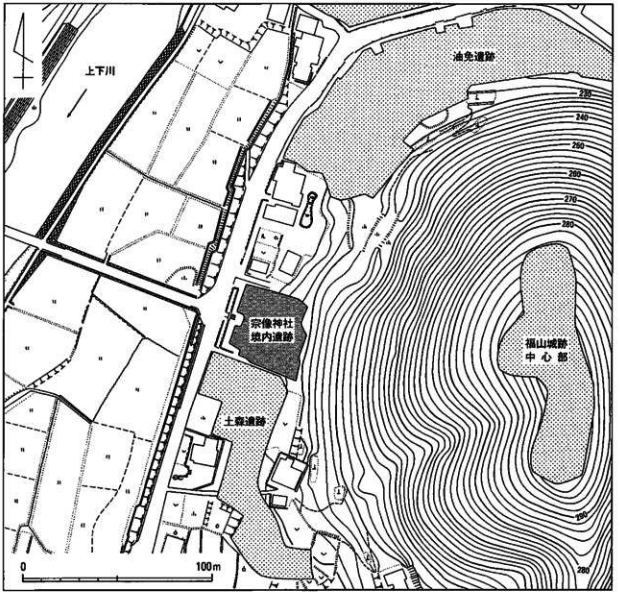
(4) この宝篋印塔について，荻原城の城主であった柚谷元家（湯谷久盛）の墓という伝承がある（三良坂町教育委員会『矢田古墓』1999年）。

また，Ⅲ－４－15図の下部は，藤村耕一・中畑和彦「広島県灰塚ダム周辺の歴史環境－歴史資料－」（「灰塚ダム湖とその周辺の生活」編集委員会編『灰塚ダム湖とその周辺の生活』灰塚ダム建設三町連絡協議会 1998年）より引用した。

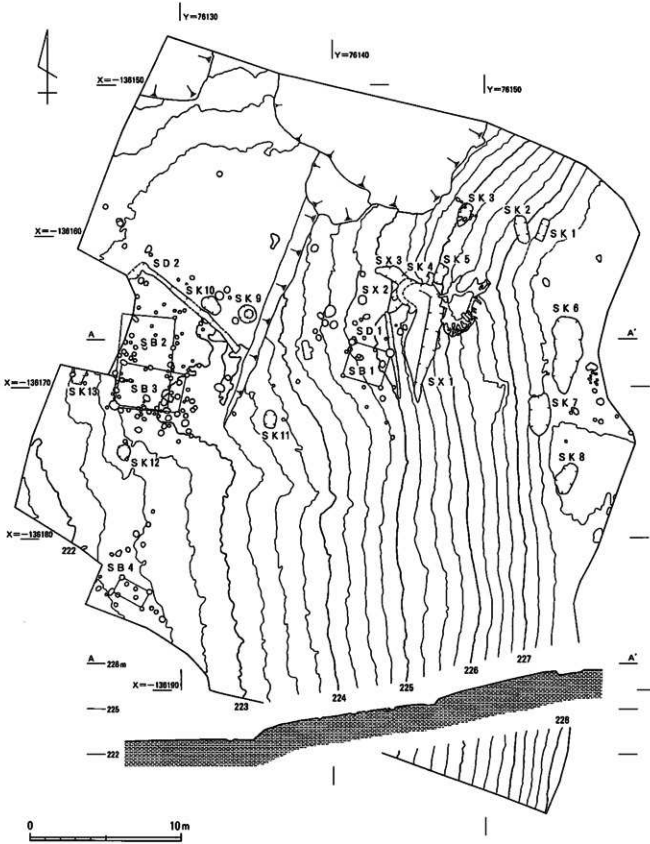
5　宗像神社境内遺跡

(1)　調査の概要

宗像神社境内遺跡は，三良坂町大字灰塚に所在する。福山城跡がある丘陵の西側裾部に立地し，北側には油免遺跡，南側には土森遺跡が広がる。遺跡の西側を流れる上下川とは120mの距離になる。宗像神社については，天文年間（1532～1555）に，萩原城主とされる湯谷久豊[1]が筑前国の宗像神社より勧請したと伝えられる。文政８年（1825）に完成した広島藩の地誌である『芸藩通史』には，三谿郡灰塚村の図に「宗像明神」が記され，祠廟の項にも「宗像神社」が現れる。明治44年（1911）に祭神を１kmほど東方の八坂神社に合祀した後，小祠美保神社を迎え，社名を美保神社と改めている。境内には貞享２年（1685）銘の石灯籠，文政13年（1842）銘の石製狛犬



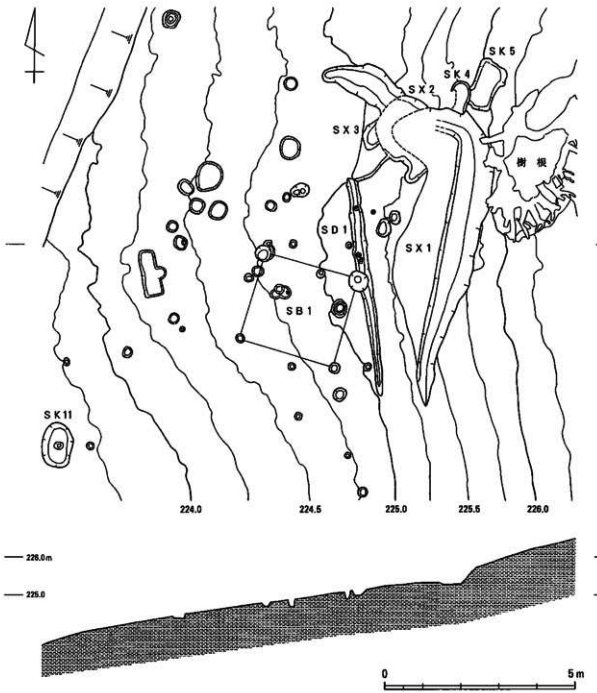
Ⅲ－５－１図　宗像神社境内遺跡周辺地形図（１：2,000）



Ⅲ－5－2図　宗像神社境内遺跡遺構配置図（1：250）

が置かれていた[12]。

調査区の規模は，東西方向が35～40m，南北方向が33～42mである。東から西へ傾斜しており，表土を除去した段階で，調査区のそれぞれの標高は，北西端部222.1m，南西端部221.6m，南東端部228.0m，北東端部227.6mである。検出した遺構には，溝，土坑，柱穴・ピット群などがある。これらの遺構は，調査区の中央から北寄りの地点に集中しており，南側では西部を除いて遺構は確認されなかった。出土遺物には，土師質土器，陶磁器，鉄釘などがある。

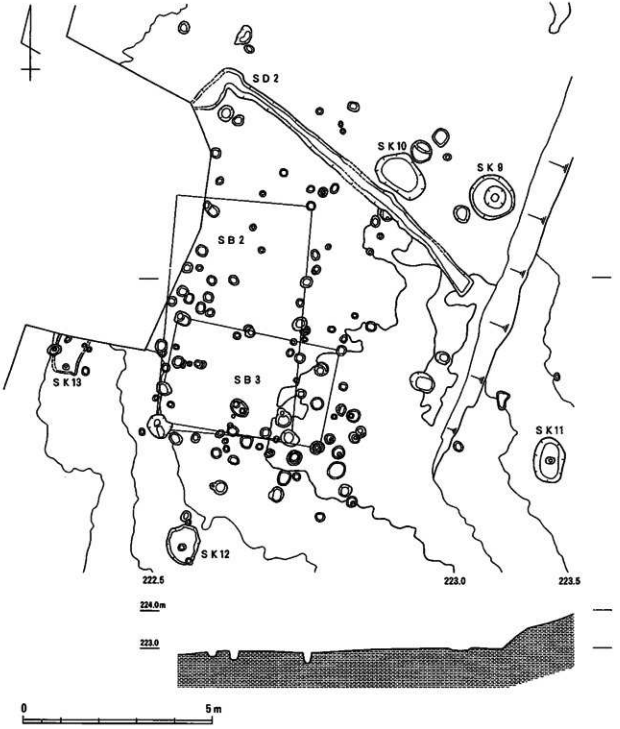


Ⅲ－5－3図　宗像神社境内遺跡中央部北寄り地区遺構配置図（1：100）

(2) 遺構と遺物

a 各地区の様相

調査区の中央部北寄り，中央部西側，南西部では遺構が密集しており，まず，それぞれの様相をまとめておきたい。

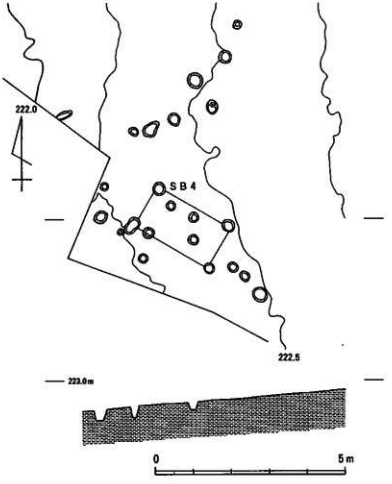


Ⅲ－5－4図 宗像神社境内遺跡中央部西側地区遺構配置図（1：100）

1　中央部北寄り

（Ⅲ－5－3図）

平坦面を造成した痕跡と想定されるＳＸ１があり，地盤の斜面をカットしている。ＳＸ１の現存規模は南北8.0mである。斜面をカットした際，北側のＳＫ４を切り込んでおり，ＳＫ４はＳＫ５を切り込んでいる。また，ＳＸ１の下部にＳＸ２，ＳＸ２の下部にＳＸ３がある。ＳＸ１の西側には現存長5.8mの溝であるＳＤ１や柱穴・ピット群があり，掘立柱建物跡になるＳＢ１が復元される。



Ⅲ－5－5図　宗像神社境内遺跡南西部地区遺構配置図（1：100）

2　中央部西側

（Ⅲ－5－4図，

図版5－1ｂ）

調査区の中で地盤が平坦な地区である。ＳＤ２が北西方向へ8.7m走った後に，南西方向へ直角に曲がっている。この溝の主に南側に柱穴・ピット群が広がり，共に掘立柱建物跡であるＳＢ２・ＳＢ３が復元される。また，ＳＤ２の北側にＳＫ９・ＳＫ10，柱穴・ピット群の南東から南西にかけてＳＫ11・ＳＫ12・ＳＫ13がある。

3　南西部（Ⅲ－5－5図）

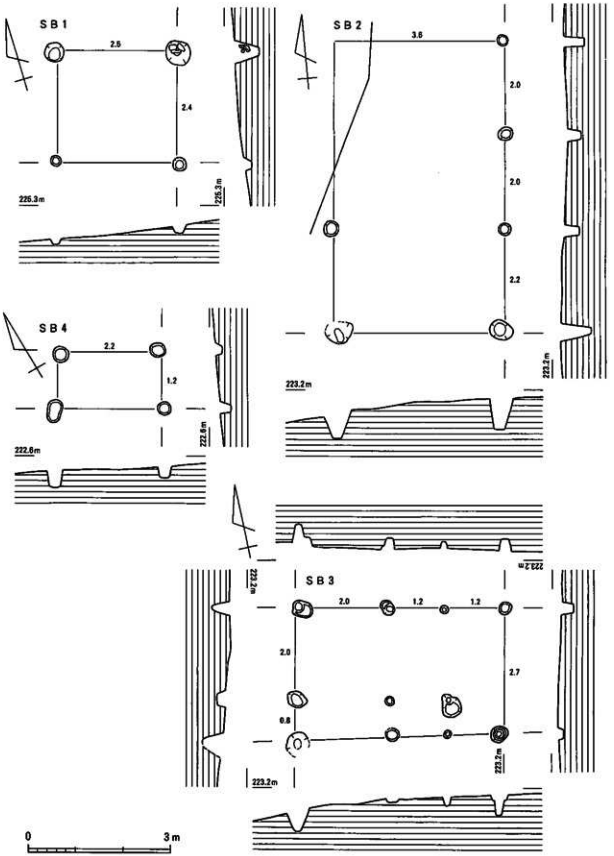
柱穴・ピット群があり，掘立柱建物跡であるＳＢ４が復元される。

ｂ　個別の遺構

1　掘立柱建物跡

ＳＢ１（Ⅲ－5－6図）

調査区中央部北寄りにあり，ほぼ方形になる。東西１間（2.5m），南北１間（2.4m）で，面積は6.0㎡である。北東の柱穴には石が入り，柱の詰め石と想定される。



Ⅲ－5－6図　宗像神社境内遺跡遺構実測図1－SB1・SB2・SB3・SB4－（1：80）

ＳＢ２（Ⅲ－５－６図）

調査区中央部西側にある南北棟で，北西側の柱穴は調査区外へ延びるものであろう。東西１間（3.6m），南北３間（2.0m＋2.0m＋2.2m）で，面積は約22.3㎡になる。南西端の柱穴はＳＢ３の柱穴と重複するが，新旧関係は明白ではない。

ＳＢ３（Ⅲ－５－６図）

南西端の柱穴がＳＢ２の柱穴と重複し，東西棟になる。東西３間（2.0m＋1.2m＋1.2m），南北は西側が２間（2.0m＋0.8m），東側が１間（2.7m）で，面積は約12.1㎡である。

ＳＢ４（Ⅲ－５－６図）

調査区南西部にある。東西１間（2.2m），南北１間（1.2m）で，面積は約2.6㎡である。

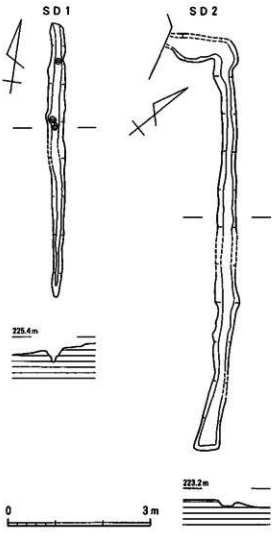
２　溝

ＳＤ１（Ⅲ－５－７図，図版５－１ｃ）

調査区中央部北寄りにあり，南北方向に走る。長さ5.8m，幅0.2～0.4m，深さ20cm弱を検出し，底面で径10cm前後，深さ４～10cmの小ピットを３点確認した。底部のレベルはほぼ平坦である。中央部で，ＳＢ１の柱穴に切り込まれている。また，北側でＳＸ３と接するが，新旧関係は明白でない。遺物は出土していない。

ＳＤ２（Ⅲ－５－７図）

調査区中央部西側にある。南東から北西方向へ8.7m走った後に，南西方向へ直角に1.5m曲がり，調査区外へ続いている。幅0.3～0.6m，深さ10cm強を検出した。底面のレベルは，地盤の傾斜に沿うかたちで南東から北西方向へ向かって低くなっており，この部分で約20cmの高低差になる。また，南西方向については，距離が短いためにこの点は明らかでない。遺物は出土していない。



Ⅲ－５－７図　宗像神社境内遺跡遺構実測図２
－ＳＤ１・ＳＤ２－（１：80）

３　土坑

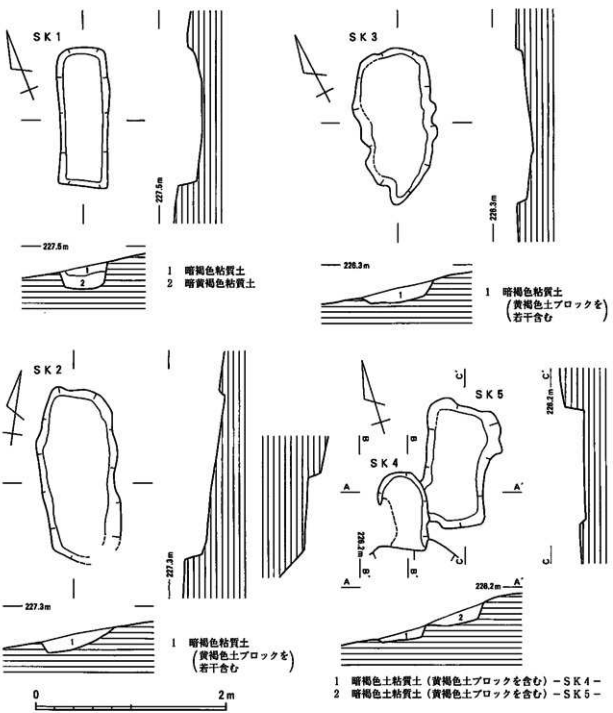
調査区北東部にＳＫ１・ＳＫ２・ＳＫ３，中央部北寄りにＳＫ４・ＳＫ５，中央部東側にＳＫ６・ＳＫ７・ＳＫ８，中央部西側にＳＫ９・ＳＫ10・ＳＫ11・ＳＫ12・ＳＫ13がある。

ＳＫ１（Ⅲ－５－８図，図版５－２ｂ）

平面形はほぼ長方形になり，長さ1.5m，幅0.5m，深さ0.3mで，底面はほぼ平坦である。埋土は２層の粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ２（Ⅲ－５－８図）

ＳＫ１の西側１mにあり，やや不整形な長方形になる。長さ1.85m，幅0.85m，深さ0.2mであ



Ⅲ－５－８図　宗像神社境内遺跡遺構実測図３－ＳＫ１・ＳＫ２・ＳＫ３・ＳＫ４・ＳＫ５－（１：40）

る。斜面に沿うかたちで，底面は西側・北側のレベルが低くなっている。埋土は粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ３（Ⅲ－５－８図，図版５－２ｃ）

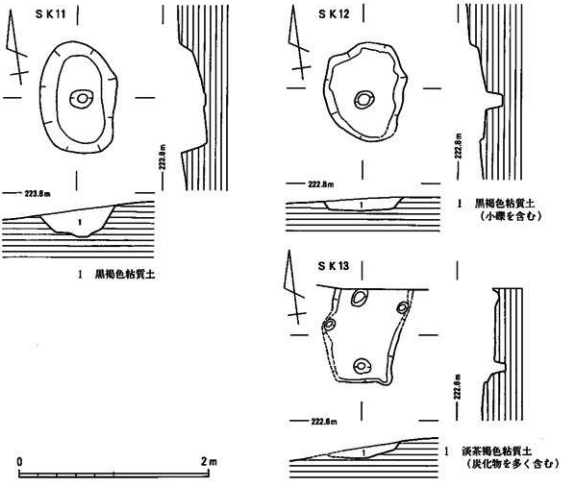
ＳＫ２の西側３ｍにあり，やや不整形な長円形になる。長径1.7m，短径0.9m，深さ0.2mである。斜面に沿うかたちで，西側のレベルが低くなっている。埋土は粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ４（Ⅲ－５－８図，図版５－３ａ）

南側をＳＸ１で切り込まれているが，本来は長円形と想定される。長径0.8m，短径0.5m，深さ0.15mである。東側のＳＫ５を一部切り込んでいる。埋土は粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ５（Ⅲ－５－８図，図版５－３ａ）

ＳＫ４により南西側を一部切り込まれているが，やや不整形な隅丸長方形と想定される。長さ1.3m，幅0.8m，深さ0.2mである。埋土は粘質土である。遺物は出土していない。



Ⅲ－５－９図　宗像神社境内遺跡遺構実測図４－ＳＫ11・ＳＫ12・ＳＫ13－（１：40）

ＳＫ６

やや不整形な長円形になり，長径5.1m，短径2.0m，深さ0.3mである。埋土は粘質土である。出土遺物には，土製人形，陶磁器片，鉄製品などがある。掘方の規模は大ぶりで，近現代の土坑と考えられる。

ＳＫ７

ＳＫ６の南西１mにあり，やや不整形な長円形になる。長径2.55m，短径1.4m，深さ0.35mである。埋土は粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ８

ＳＫ７の南東３mにあり，やや不整形な長円形になる。長径2.1m，短径1.25m，深さ0.35mである。埋土は粘質土である。出土遺物には，陶器，瓦片がある。近現代の土坑である。

ＳＫ９

円形で二段に掘り込まれている。上段は径1.2m，深さ0.15m，下段は径0.6m，深さ0.25mである。埋土は粘質土である。出土遺物には陶器片がある。近現代の土坑である。

ＳＫ10

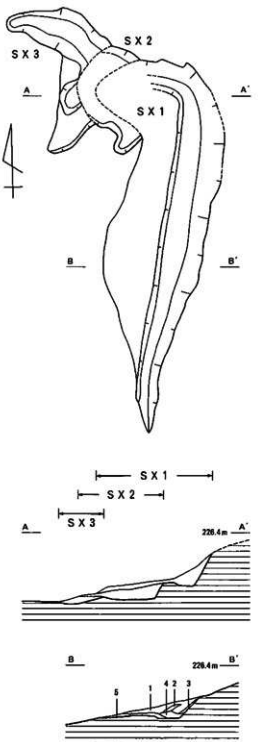
ＳＫ９の西側1.5mにあり，やや不整形な長円形になる。長径1.4m，短径1.0m，深さ0.45mである。埋土は粘質土である。出土遺物には，陶磁器片，鉄製品がある。近現代の土坑である。

ＳＫ11（Ⅲ－５－９図，図版５－３ｂ）

ほぼ長円形になり，長径1.2m，短径0.8m，深さ0.3mで，底面中央で径20～25cm，深さ３cmのピットを確認した。埋土は粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ12（Ⅲ－５－９図，図版５－３ｃ）

やや不整形な長円形になり，長径1.05m，



Ⅲ－５－10図　宗像神社境内遺跡遺構実測図５
－ＳＸ１・ＳＸ２・ＳＸ３－（１：80）

短径0.85m，深さ0.15mで，底面中央で径15～20cm，深さ19cmのピットを確認した。埋土は粘質土である。遺物は出土していない。

ＳＫ13（Ⅲ－５－９図）

やや不整形な長方形になり，北側は調査区外へ続く。長さ1.0m，幅0.8m，深さ0.1mで，底面で径10～20cm，深さ８～15cmのピットを４点確認した。埋土は粘質土で，炭化物を多く含んでいる。遺物は出土していない。

４　その他の遺構

ＳＸ１（Ⅲ－５－10図，図版５－１ｃ）

調査区中央部北寄りにあり，現存では南北8.0m，東西で最大2.5mの規模になる。北側のＳＫ４を切り込んでおり，北西部では下部にＳＸ２がある。地盤の斜面を掘り込んで平坦地を造成した痕跡と推定される。掘り込みは，北東部の深さが0.7mになり，南側・西側にかけて浅くなる。る。掘り込み内の埋土は数層の粘質土であるが，西側底部の層については締まった部分も見られ，平坦地造成の際の盛り土にあたるだろう。また，掘り込みの東側から北側のラインに沿って，溝状に低くなっており，底部の幅は0.2～0.5m，深さは10cm程度である。この部位は，平坦
地を維持するための排水溝の可能性がある。なお，遺物は出土していない。

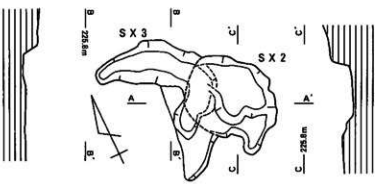
ＳＸ２

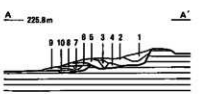
（Ⅲ－５－10・Ⅲ－５－11図，図版５－２ａ）

中央から東側にかけて，上部にＳＸ１がある。また，西側の下部にＳＸ３がある。径4.0～4.9m，北壁部分で深さ0.4mを検出した。底部は北側が15cmほど一段深くなっている。埋土は数層の粘質土で，土師質土器皿が出土した。

ＳＸ３

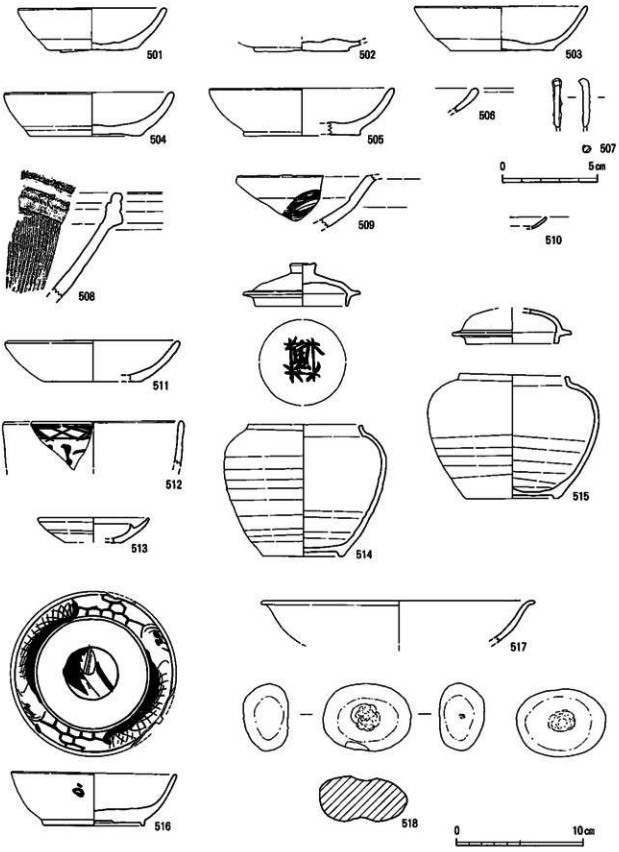
（Ⅲ－５－10・Ⅲ－５－11図，図版５－２ａ）





ＳＸ２　1　暗茶褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
3　暗茶褐色粘質土（淡黄褐色土を含む）
4　淡灰褐色粘質土
5　暗茶褐色粘質土（淡黄褐色土ブロックを含む）
6　暗茶褐色粘質土（淡黄褐色土ブロックを含み，しまる）
ＳＸ３　7　黒褐色粘質土
8　淡黄褐色粘質土
9　暗茶褐色粘質土（淡黄褐色土ブロックを含む）
10　淡灰褐色粘質土

Ⅲ－５－11図　宗像神社境内遺跡遺構実測図６
－ＳＸ２・ＳＸ３－（１：80）



Ⅲ－5－12図　宗像神社境内遺跡出土遺物実測図（1：3，507は1：2）

東側の上部にＳＸ２がある。また，南側でＳＤ１と接するが，新旧関係は明らかでない。三日月状に東西2.4m，南北3.2m，北壁部分で深さ0.3mを検出した。底部は中央部から北側にかけて，10cmほど一段深くなっている。埋土は数層の粘質土で，土師質土器皿，鉄釘が出土した。

c　出土遺物（Ⅲ－５－12図，図版５－４・５－５）

ＳＸ２，ＳＸ３，中央部西側柱穴・ピット群などから土師質土器，陶磁器，鉄釘などが出土したが，点数は少ない。

501～506・511は土師質土器皿で，501・502はＳＸ２，503～506はＳＸ３，511は調査区からの出土である。いずれも内外面の調整は回転ナデが施される。501～505・511の６点は底部が残存し，切り離しはいずれも回転ヘラ切りで，501～503・511はヘラ切り後にナデが施される。

508～510は中央部西側柱穴・ピット群から出土したものである。508は陶器擂鉢で，擂目が密に施されている。18世紀代の明石や堺系のものであろうか。509は陶器鉢で，外面に透明釉，内面には白土・緑色・褐色・透明の釉が施される。510は陶器小皿で，色調は褐色，外面は無釉，内面には鉄釉が施される。

512・513は調査区内の出土である。512は陶胎染付の碗で，外面に文様がある。513は陶器の灯明受皿で，内面には灰釉が施される。底部外面には，墨書らしきものの端部が若干認められる。514・515は試掘時に出土した陶器の蓋付き小壺である。514の蓋は，外面に白濁・透明の釉が施され，内面に「鬼」とこれを囲うデザインの墨書がある。壺は内外面ともに透明・白濁の釉が施され，３枚の古銭が納められており，銭名の判明するものに寛永通宝がある。515は中央部西側柱穴・ピット群の一つからの出土になる。蓋は外面に白濁釉が施される。壺は内面に白濁釉，外面に透明釉・灰釉が施され，頭髪と明治期の古銭が納められている。516・517は調査区内の出土である。516は肥前系の磁器皿で，19世紀代のものであろう。底部は蛇の目高台で，外面には同一の文様が３カ所，内面には植物・波などが描かれている。517は青磁皿である。

507は鉄釘で，ＳＸ３からの出土である。頭部が残存する。518は凹石で，調査区内の出土である。材質は細粒花崗岩[3]である。

Ⅲ－５－１表　宗像神社境内遺跡出土遺物計測表(1)

番号	品　種	出　土　地　点	計測値（単位はcm，復元値は〔　〕，現存値は（　）で示す）
501	土師質土器皿	ＳＸ２	口径〔11.8〕　底径　7.2　器高 3.5
502	土師質土器皿	ＳＸ２	底径〔7.4〕
503	土師質土器皿	ＳＸ３	口径　13.6　底径　8.1　器高 3.55
504	土師質土器皿	ＳＸ３	口径〔13.4〕　底径　8.7　器高 3.5
505	土師質土器皿	ＳＸ３	口径〔14.6〕　底径〔9.2〕　器高 3.75
506	土師質土器皿	ＳＸ３	
507	鉄釘	ＳＸ３	長（2.6）　径 0.45
508	陶器擂鉢	中央部西側柱穴・ピット群	－
509	陶器鉢	中央部西側柱穴・ピット群	－

Ⅲ－５－１表　宗像神社境内遺跡出土遺物計測表(2)

番号	品　種	出　土　地　点	計測値（単位はcm，復元値は〔　〕，現存値は（　）で示す）
510	陶器小皿	中央部西側柱穴・ピット群	－
511	土師質土器皿	調査区内	口径〔13.8〕 底径〔7.6〕 器高 3.25
512	陶胎染付碗	調査区内	口径〔14.3〕
513	陶器灯明受皿	調査区内	口径 〔8.7〕 底径〔4.5〕 器高 1.95
514	陶器小壺蓋	調査区内	口径　7.3　最大径 9.2　器高 3.4
	陶器小壺		口径　9.0　底径 6.4　最大径 12.7　器高 10.4
515	陶器小壺蓋	中央部西側柱穴・ピット群	口径　7.3　最大径 9.4
	陶器小壺		口径　8.6　底径 7.3　最大径 13.5　器高 9.8
516	磁器皿	調査区内	口径 13.0　底径 7.9　器高 4.35
517	青磁皿	調査区内	口径〔21.6〕
518	凹石	調査区内	長 7.0　幅 5.3　厚 3.55　重 176.9ｇ

(3) 小　結

宗像神社境内遺跡の調査区は，南側で土森遺跡と接し，北側に60m離れて油免遺跡がある。ここでは，両遺跡の調査成果を参考にしながら，この地の推移をまとめてみたい。

宗像神社境内遺跡では，溝，土坑，柱穴・ピット群などを検出した。掘立柱建物跡も復元されるが，構造や規模などから住居とは捉えにくい。また，出土遺物も少量であることから，調査区の地は日常的な居住の場所ではなかったと想定される。ただ，土森遺跡では弥生時代から古代，油免遺跡では弥生時代から古代，中近世の集落などが明らかになっている。

遺跡の時期に関わるものとして，中世に遡る土師質土器皿があり，上下に重なるＳＸ２・ＳＸ３から出土している。場所は調査区中央部北寄り地区である。ただ，点数が少ないことや共伴する遺物がないことから，具体的な時期までは捉えられない。この土師質土器皿は，底部の切り離しは何れも回転ヘラ切りである。土師質土器は，儀式や祭礼などの際に調えられたり，灯明皿として使用されたことが知られ[4]，日常的な食器とは異なる性格を持つ場合もある。調査地は日常的な居住の場を想定しにくいことを併せると，ＳＸ２・ＳＸ３は土師質土器の性格を反映し，例えば儀式などと関連する可能性もある。なお，出土品には灯明皿としての痕跡は確認されない。

ＳＸ２の上部にはＳＸ１があり，ＳＸ１は地盤の斜面を掘り込んで平坦地を造成した痕跡と推定される。西側底部の部分的な締まった土層は，平坦面の地盤として盛られたもの，掘り込みの東側から北側のラインに沿う溝状の落ち込みは，平坦面を維持するための排水溝の可能性がある。ＳＸ１とＳＸ２の時期について，ＳＸ１の北西部はＳＸ２に沿うようなプランに見受けられ，両者は断絶するものではなく，継続的なものの可能性がある。

平坦面としてのＳＸ１の上部から築造された遺構は確認されなかったが，西側に見られる遺構がＳＸ１との関連が想定される。柱穴・ピット群があり，その中にＳＢ１が復元され，東西１間（2.5m），南北１間（2.4m）のほぼ方形の掘立柱建物跡になる。そして，ＳＢ１とＳＸ１の掘り込み東側のラインは方向がほぼ一致する。こうした点から，ＳＸ１は西側の施設の背後に造成さ

れた平坦地と想定され，東側の斜面には遺構は確認されない。

宗像神社については，天文年間（1532～1555）に勧請されたことが伝えられる。また，貞享２年（1685）に寄進された石灯籠があり，この時での存在は確かであろう。ＳＸ２・ＳＸ３やＳＸ１と西側の施設は，こうした経緯と関連することも想定される。

調査区中央部西側では，柱穴・ピット群が広がり，さらに調査区外の西側に続くようである。少量ではあるが，18世紀代の明石や堺系の陶器擂鉢や，明治期の銭貨を納めた陶器壺などが出土しており，近世以降の遺構群になるだろう。また，直角に曲がる溝のＳＤ２や，近現代の土坑になるＳＫ９・ＳＫ10もある。ＳＤ２は地盤の標高に沿うかたちで底面が傾斜しており，この地区の区画や排水のためのものであろう。掘立柱建物跡はＳＢ２・ＳＢ３が復元され，作業小屋や物置などの性格が想定される。なお，調査区南西部のＳＢ４も小型の掘立柱建物跡である。

調査区中央部東側には近現代の土坑になるＳＫ６・ＳＫ８があり，位置的にＳＫ７も近現代の可能性が高い。土坑について，遺物が出土したものについては廃棄坑の用途が考えられるが，近現代に限られる。遺物の見られないものは用途を明らかにできない。

注目される遺物には，試掘時に出土した陶器の蓋付き小壺がある。蓋の内面に「鬼[5]」を囲うデザインの墨書があり，人に不幸をもたらす「鬼」を封じ込めることを意とし，神社に願ったものであろう。壺には３枚の古銭が納められ，銭名の判明するものには寛永通宝がある。近世以降のものになる。

Ⅲ－５－13図　宗像神社境内遺跡
出土の陶器小壺

以上が宗像神社遺跡の概略である。若干ではあるが中世の遺物・遺構が確認された。周辺では，東側の丘陵に福山城跡があり，油免遺跡では中世の掘立柱建物跡群が広がる。この遺物・遺構の様相について，伝えられる宗像神社の創建との関連性は否定できない。その後も近世から近現代にかけて，この地で何らかの営みがなされることになる。ただ，出土資料が少ないことなどから，具体的な様相は不明な点が多い。なお，油免遺跡では近世の掘立柱建物跡が広がっている。

神社について，調査前に建てられていた神社本殿は，切目長押東南隅金具に「是□嘉永五壬子年□事調之」とあり，様式や彫刻内容からも嘉永５年（1852）の建立と考えられている[6]。

そして，明治44年（1911）に社名を美保神社に改めるのである。

註

(1) 弘治３年（1557）の「毛利氏親類衆年寄衆并家人連署起請文案」（『大日本古文書・毛利家文書』225号）には，「柚谷新三郎元家」と記される。

(2) 藤村耕市・中畑和彦「広島県灰塚ダム周辺の歴史環境－歴史資料－」（「灰塚ダム湖とその周辺の生活」編集委員会編『灰塚ダム湖とその周辺の生活』） 灰塚ダム建設三町連絡協議会　1998年

(3) 地質考古学研究所・柴田喜太郎氏より教示を得た。

(4) 下津間康夫「広島県内の「かわらけ」・「土器」について－土師質土器に係わる記録の紹介－」『草戸千軒』№226　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1994年

(5) 水野正好「魑魅魍魎・鬼鬼鬼鬼鬼」『草戸千軒』№196　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1989年

(6) 坂田泉「広島県灰塚ダム周辺の民俗資料」（「灰塚ダム湖とその周辺の生活」編集委員会編『灰塚ダム湖とその周辺の生活』） 灰塚ダム建設三町連絡協議会　1998年

Ⅳ まとめ

本書では，横谷第９号古墳，寺山第１～４号古墳，萩原城跡，清替屋古墓・清替屋遺跡，宗像神社境内遺跡の５カ所について報告した。これらは，上下川に沿って東西約３kmの範囲に位置している。ここでは，これらの遺跡の調査成果についてまとめておきたい。

横谷古墳群（11基）と寺山古墳群（27基）は谷を挟んで200mの距離にあり，横谷古墳群の南側150mに野竹古墳群（10基），野竹古墳群の東側250mに杉谷古墳群（10基）があり，一帯は古墳が密集する地点である。何れも径が10m前後の円墳を中心とする古墳群で，石室部分と見られる石材は露出しておらず，横穴式石室の導入以前の古墳群である可能性が高い。寺山古墳群，野竹古墳群，杉谷古墳群については，丘陵上にまとまった状態でそれぞれの古墳が見られるのに対して，横谷古墳群については，やや散在的な状態で，様相を異にしている。

横谷第９号古墳は，横谷古墳群の中で最も標高の低い場所に位置し，墳丘は一辺が９m程度の方墳であった可能性がある。埋葬施設には石材を用いており，竪穴式石室の可能性を指摘できる。原位置から移動していたが，埋葬施設に近接して，須恵器の蓋杯，蓋付短頸壺，短頸壺，甕，無蓋長脚高杯が出土した。年代は６世紀前半と考えられる。

寺山第１号古墳は，丘陵最先端部に位置し，径7.5mの円墳である。埋葬施設は土坑で，鉄刀と鉄鏃が出土した。年代は６世紀前半から中頃と考えられる。第２号古墳は，第１号古墳と接しており，径9.5～10.5mの円墳である。埋葬施設は土坑で，鉄剣が出土した。年代は５世紀後半頃と考えられる。第３号古墳は，径9.5mの円墳である。墳丘はかなり流出しており，埋葬施設は確認できなかった。年代については，横穴式石室の導入以前の可能性が高い点が指摘できる程度である。第４号古墳は，調査区外へ延びると共に，墳丘の流出が激しい。埋葬施設は箱式石棺で，蓋石の上から須恵器の高杯脚部が出土した。年代は５世紀後半から６世紀前半と考えられる。

また，杉谷第９号古墳は，杉谷古墳群の中で標高の高い場所に位置している。径15mの円墳で，埋葬施設は箱式石棺が２基ある。年代は５世紀初頭から６世紀初頭の間[1]と考えられている。

近接する４カ所の古墳群について，以上の６基が発掘調査例である。その成果を踏まえると，古墳群は５世紀代から６世紀中頃までの年代が考えられる。埋葬施設の構造，出土遺物の構成などは一様でないが，これは時期的なもの，被葬者の社会的地位を反映するものであろう。そして，寺山第１～４号古墳は，横谷第９号古墳，杉谷第９号古墳と時期的に重なる部分があり，近接する地点で古墳群が並立したことになる。また，先に触れたように，横谷古墳群はそれぞれの古墳が散在的に立地し，ほかの古墳群とは異なっている。こうした古墳群相互の関係・位置づけを，社会の様相を踏まえて明らかにしていくことが今後の課題の一つである。

清替屋遺跡は，上下川と田総川の合流地点に接する北側の谷筋に立地する。自然石・礫群が露頭する地表に，ミニチュア土器などの土師器が散布しており，古墳時代の祭祀の痕跡と考えられ

る。近接して山の岩肌を谷川が流れ，まもなく上下川に注いでおり，祭祀の対象は，礫群の露頭という景観や，河川・水に関わる可能性がある。

清替屋古墓は，中世後期から近世にかけて埋葬施設や石塔類が営まれた場所である。埋葬施設は，備前焼壺に焼骨を納めてその周りを花崗岩切石で囲むもので，備前焼壺の製作年代は14世紀後半である。切石による石組みは台石となり，上部に石塔が置かれていた可能性がある。この埋葬施設の近辺で，表土に含まれるものであるが，五輪塔46点，宝篋印塔10点を確認した。また，隣接して近世以降の土坑墓が4基並んで造られていた。

このほか，土師器，須恵器，土師質土器，瓦質土器などが出土している。清替屋古墓・清替屋遺跡が立地する谷筋周辺は急峻な斜面で，前面には河川と氾濫原が広がっている。日常的な居住を推定するのは困難な様相であり，これらの遺物の背景として，古墳時代から中世にかけて，祭祀や一時的な営みが近辺でなされたことが考えられる。

萩原城跡は，山の尾根筋に沿って築かれており，高所部の郭群と南西に延びる尾根先端部の郭群に分かれている。両者を合わせると，東西600m，高低差120mになる。発掘調査は，尾根先端部の郭群の西半部について実施した。

調査区内では，郭群と通路の一部を確認したが，土塁・櫓・建物などは構築されていなかった。郭群は15世紀後半から16世紀前半の或る段階に築造されている。先立つ施設の存在が推定されるが，郭群の築造と時期差は特に認められない。また，郭群の造成・加工などの工事が複数時にわたってなされたとは見受けられず，一度築造されたものが廃絶時まで踏襲されたのであろう。出土遺物には，貯蔵・調理・飲食の際に使用される土器・陶磁器，鍛冶に関わるふいごの羽口や鉄滓，漁網錘の土錘，砥石，古銭などがあり，この地での生活や生産活動を示している。なお，廃絶は16世紀後半であろう。

萩原城跡の中核は，高所部の郭群である。地形測量の結果，最高所の郭は東西方向80m，南北方向20～45mで，北側・東側に土塁，北側斜面に井戸がある。西側の郭は東西方向45m，南北最大幅35m，北側の郭は南北方向45m，東西最大幅30mになる。調査区の郭は東西方向30m，南北最大幅12m及び東西方向28m，南北最大幅12mで，高所部の郭群とは規模・構築内容に差がある。

また，土坑に河原石を中心とする礫が充満した一石経経塚を確認した。礫は数万点に及び，その中の50点ほどに墨書がある。時期は明言できないが，周辺に残る一石経経塚に関わる石塔の碑文[22]などからすれば，江戸時代の可能性がある。なお，この地に造営されたことについて，萩原城跡が地域のシンボル的な存在であった点が背景に挙げられよう。

宗像神社境内遺跡は，福山城跡がある丘陵の西側裾部に立地する。調査では，溝，土坑，柱穴・ピット群などを検出した。掘立柱建物跡が復元されるが，構造や規模などから住居とは捉えにくい。出土遺物には，中世の土師質土器や近世以降の陶磁器類などがあるが，出土量は少ない。こうした点から，調査区の地は中世以降の営みがなされているが，日常的な居住の場所ではなかっ

たと考えられる。

中世に遡る可能性があるものとして，地盤の斜面を掘り込んで造成された平坦地を確認した。関連する遺構に，1間×1間の掘立柱建物跡や排水溝などがある。宗像神社については，天文年間（1532～1555）に勧請されたものと伝えられ，また，貞享2年（1685）に寄進された石灯籠が残っている。上記の施設は，こうした経緯と関連する可能性も考えられる。

その後，近世以降のものであるが，作業小屋や物置，区画・排水用の溝や土坑などが設けられている。

以上，5カ所の遺跡の調査成果について整理してみた。年代は主に古墳時代と中世後期から近世で，一端ではあるが，この地に生きた人々の姿が明らかになった。なお，宗像神社境内遺跡に近接して，北側に油免遺跡，南側に土森遺跡，萩原城跡の西側に大谷遺跡がある。これらの遺跡の調査成果と併せて，本書が上下川沿いの地域の歴史を見つめる上での一助となれば幸いである。

註

(1) 三良坂町教育委員会『杉谷第9号古墳』 1999年

(2) 藤村耕市・中畑和彦「広島県灰塚ダム周辺の歴史環境－歴史資料－」（「灰塚ダム湖とその周辺の生活」編集委員会編『灰塚ダム湖とその周辺の生活』） 灰塚ダム建設三町連絡協議会 1998年

a　調査前全景
（東から）

b　全景
（南東から）

c　遠景
（南東から）

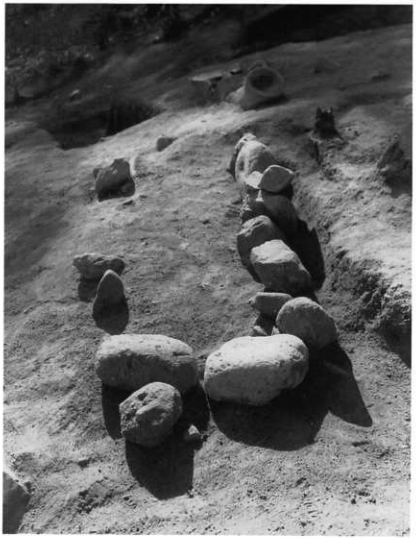
a　墳丘・周溝
（北西から）

b　墳丘・周溝
（南東から）

c　周溝
（南西から）

a　埋葬施設遺物出土状況（南西から）

b　埋葬施設遺物出土状況（北東から）



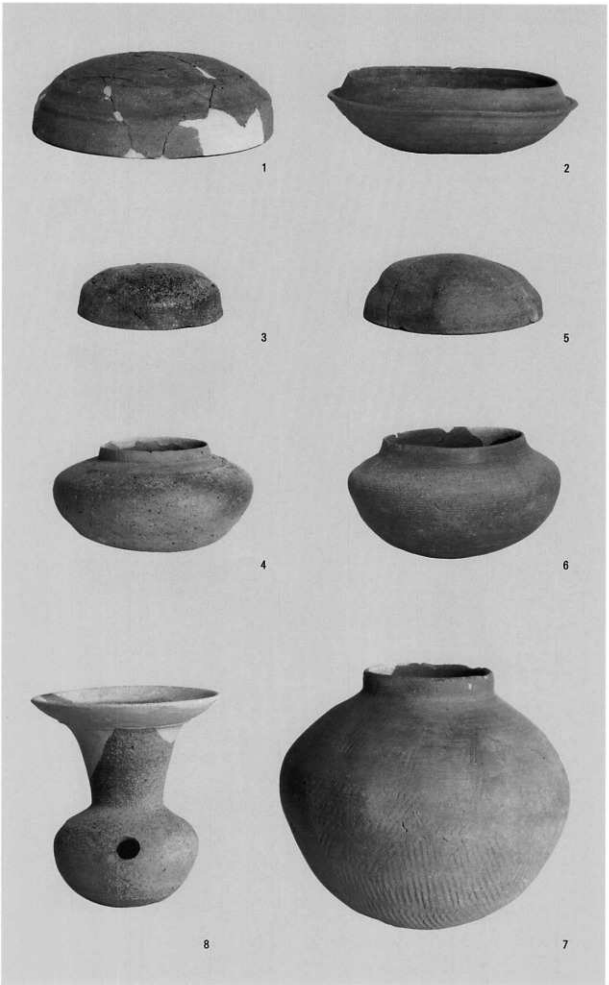
c　埋葬施設
（北東から）

横谷第 9 号古墳

a　埋葬施設
（北西から）

b　埋葬施設完掘
（北西から）

c　作業風景
（北から）



出土遺物１　須恵器

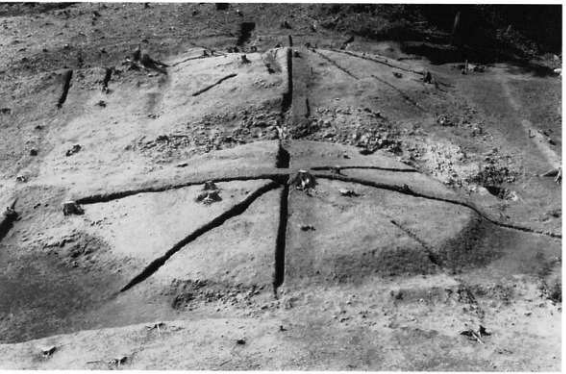
出土遺物２　須恵器，土師器

a　丘陵先端部
調査前全景
（南西から）

b　調査前全景
（南から）

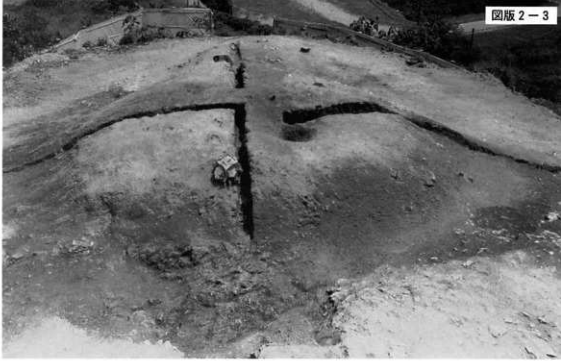
c　遠景
（東上空から）

a　東側調査区
（南西から）

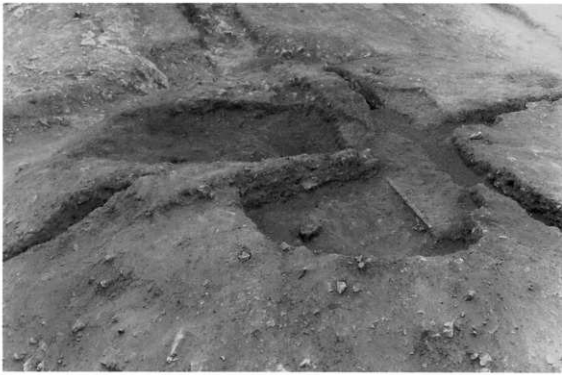


b　西側調査区
（北東から）

c　遺跡見学会
（南西から）



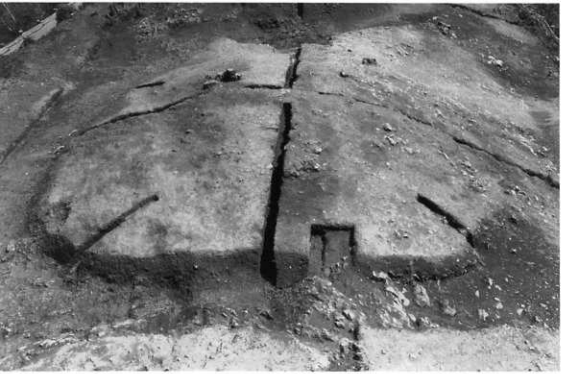
a　第１号古墳
墳丘・周溝
（南西から）



b　第１号古墳埋葬施設
（東から）

c　第１号古墳埋葬施設
遺物出土状況
（南から）

a　ＳＸ１
（東から）



b　第２号古墳
墳丘・周溝
（南西から）

c　第２号古墳埋葬施設
遺物出土状況
（南から）

a　第２号古墳
埋葬施設完掘
（東から）

b　第３号古墳
墳丘・周溝
（北西から）

c　土器状遺構
（南西から）

a　第 4 号古墳埋葬施設検出状況（西から）

b　第 4 号古墳埋葬施設蓋石除去後（西から）

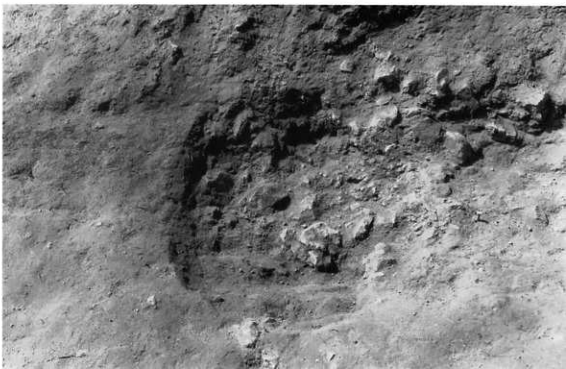
c　第 4 号古墳埋葬施設検出状況（北から）

d　第 4 号古墳埋葬施設蓋石除去後（北から）

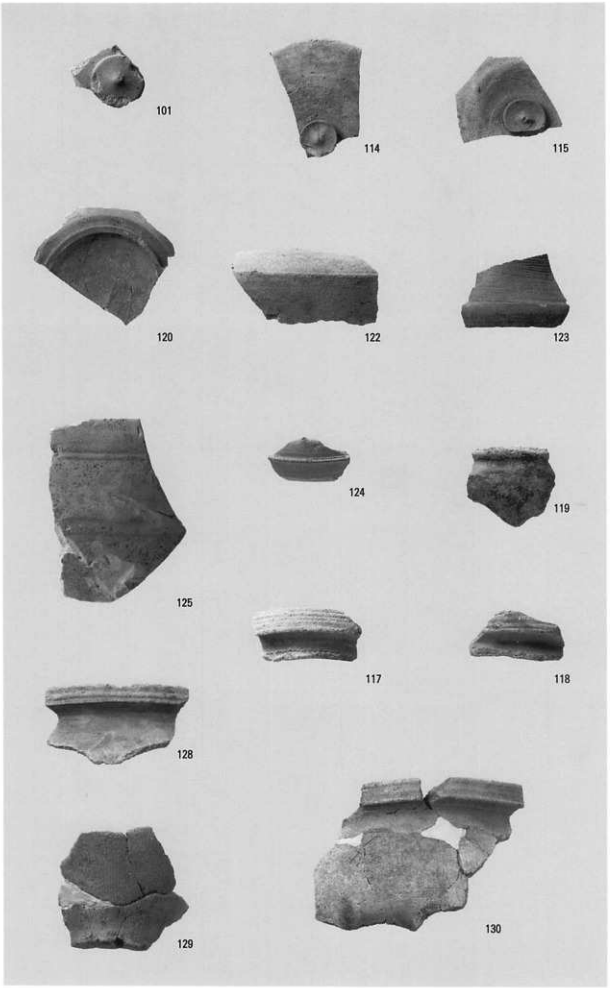
e　第 4 号古墳埋葬施設完掘（西から）

a　ＳＫ１
（北東から）

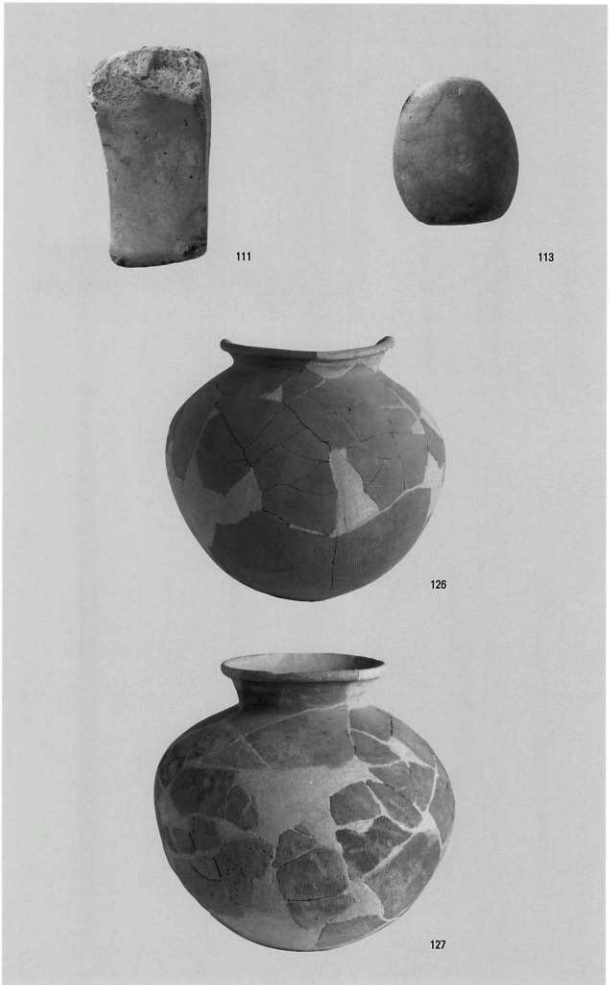
b　ＳＫ２
（東から）



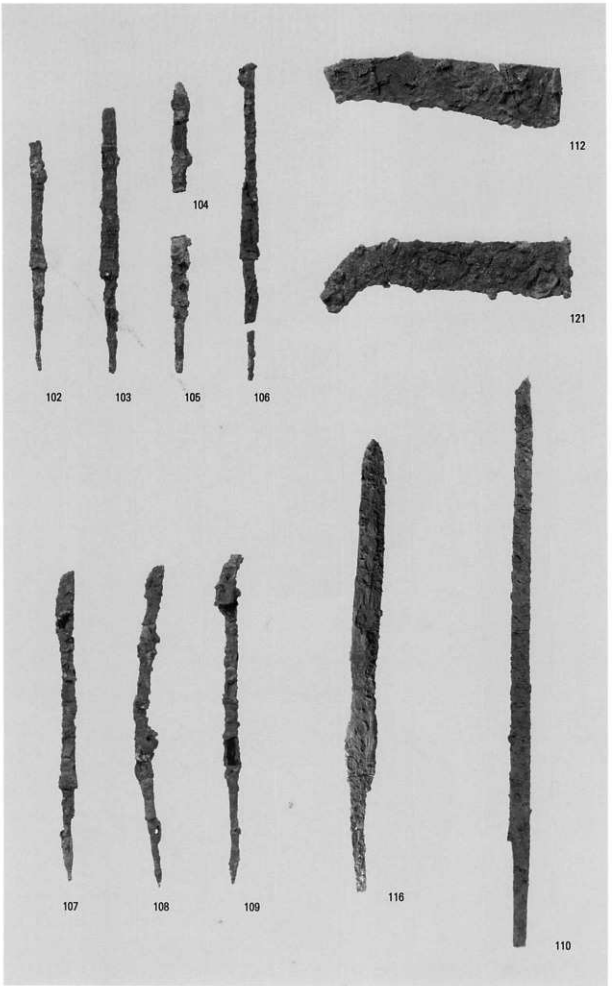
c　ＳＫ３
（北東から）



出土遺物１　須恵器，土師器，弥生土器



出土遺物２　須恵器，石製品



出土遺物３　鉄製品

萩原城跡

a　遠景
（南西上空から）

b　遠景
（北西上空から）

c　全景
（北西上空から）

a　郭１全景
－表土除去後－
（北東から）

b　郭１全景
－掘下げ後－
（北東から）

c　郭１西側造成状況
（東から）

a　郭２全景
－表土除去後－
（北東から）

b　郭２全景
－掘下げ後－
（北東から）

c　郭２岩盤面
（南西から）

a　郭１から
郭２への通路
（南西から）

b　郭１から
郭２への通路
（南東から）

c　一石経経塚
上部礫群
（南から）

a　一石経経塚
掘方内礫群
（南から）

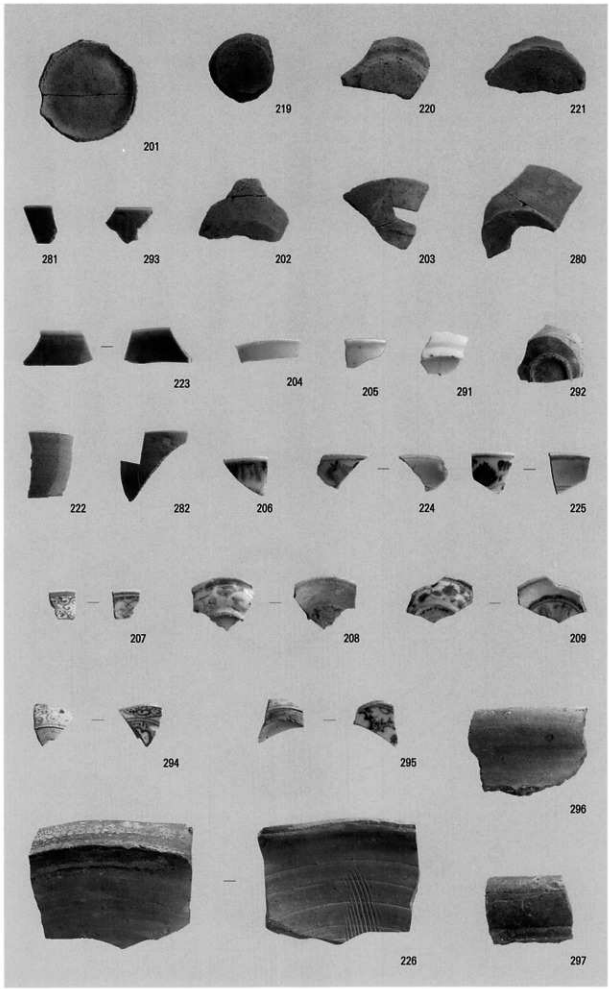
b　一石経経塚
掘方内半割
（南から）

c　一石経経塚完掘
（南から）

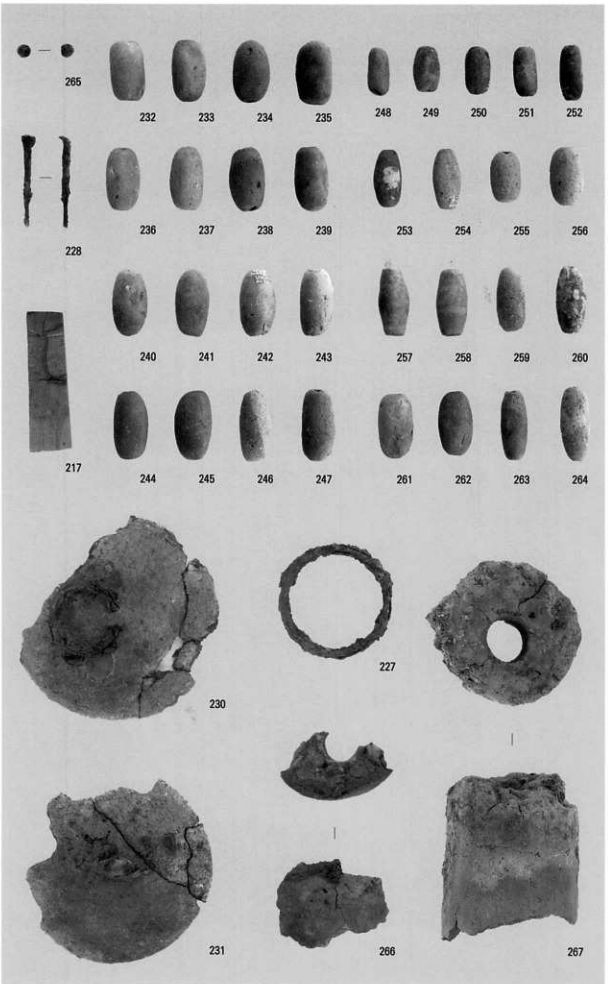
a　一石経経塚
墨書経石出土状況
（北から）

b　郭２土錘出土状況
（東から）

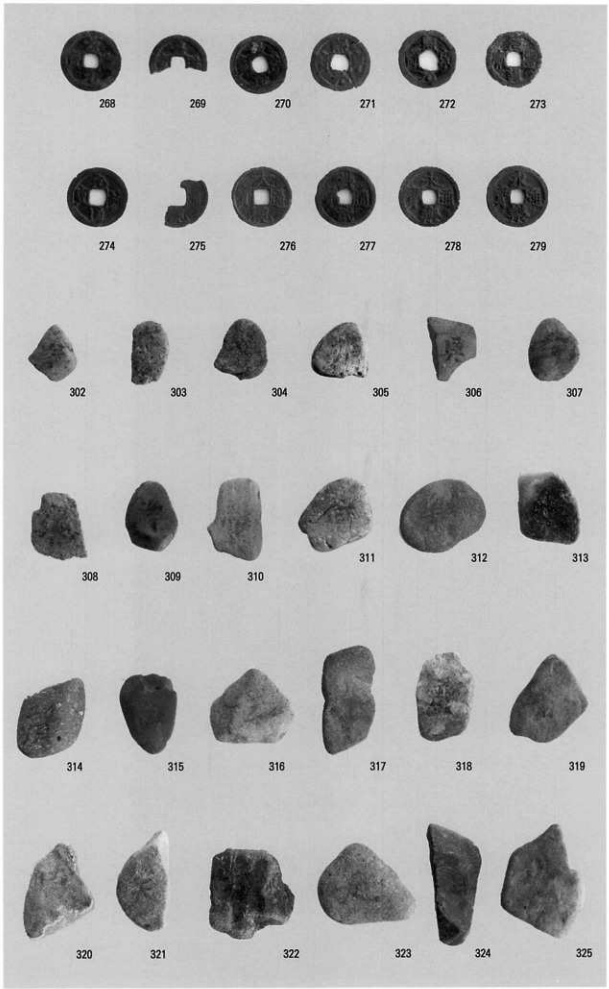
c　郭２ふいごの羽口
出土状況
（南東から）


201
219
220
221
281
293
202
203
280
223
204
205
291
292
222
282
206
224
225
207
208
209
294
295
296
226
297

出土遺物1　土器、陶磁器



出土遺物２　土製品，石製品，鉄製品

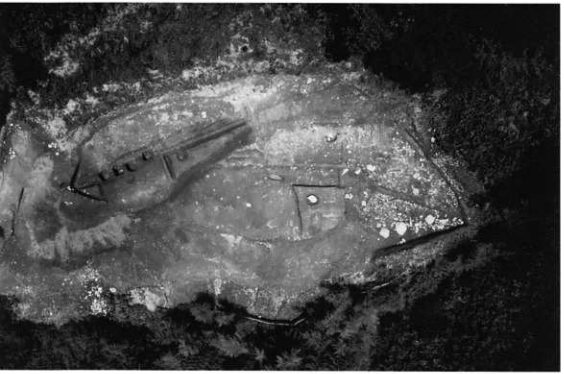


出土遺物3　古銭，墨書経石

図版 4 — 1

清替屋古墓
・清替屋遺跡

a　遠景
（南西上空から）

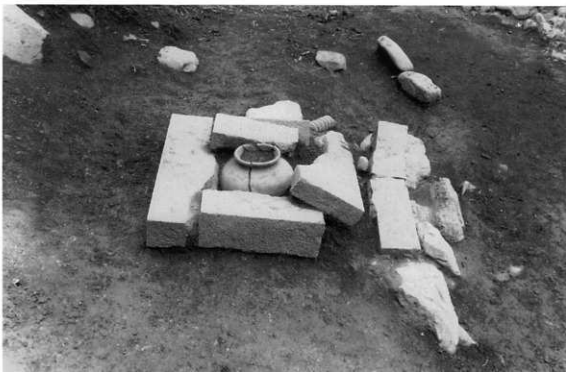


b　全景
（上空から）

c　清替屋遺跡全景
（西から）

a　清替屋古墓
埋葬施設および
石塔類出土状況
（北から）

b　清替屋古墓
埋葬施設
（北から）

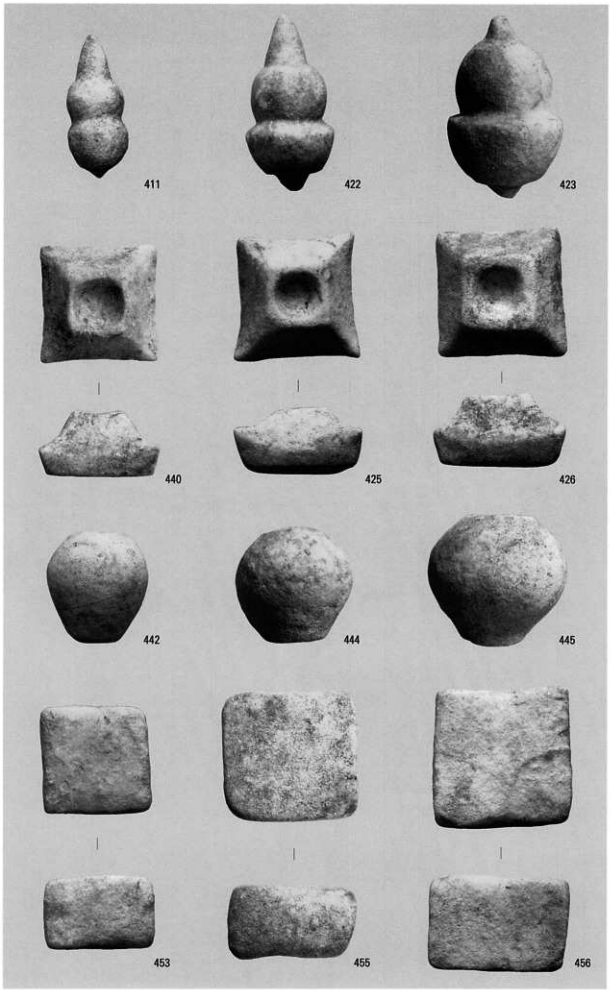


c　清替屋古墓
埋葬施設
（西から）

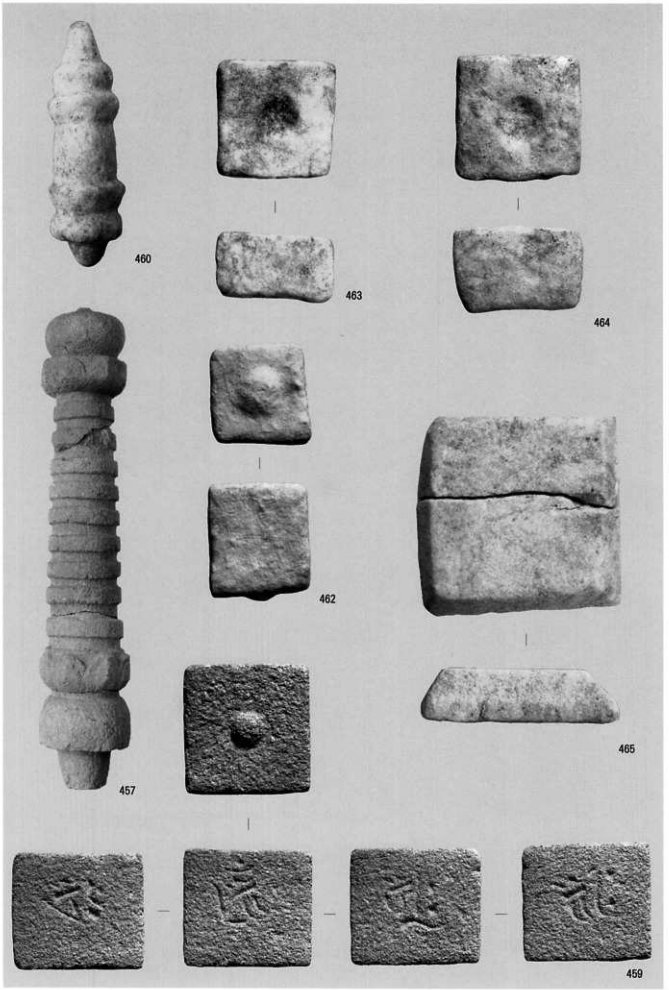
a　清替屋遺跡
下段東側の
自然石・礫群
（北西から）

b　清替屋遺跡
下段東側の
自然石・礫群
（南西から）

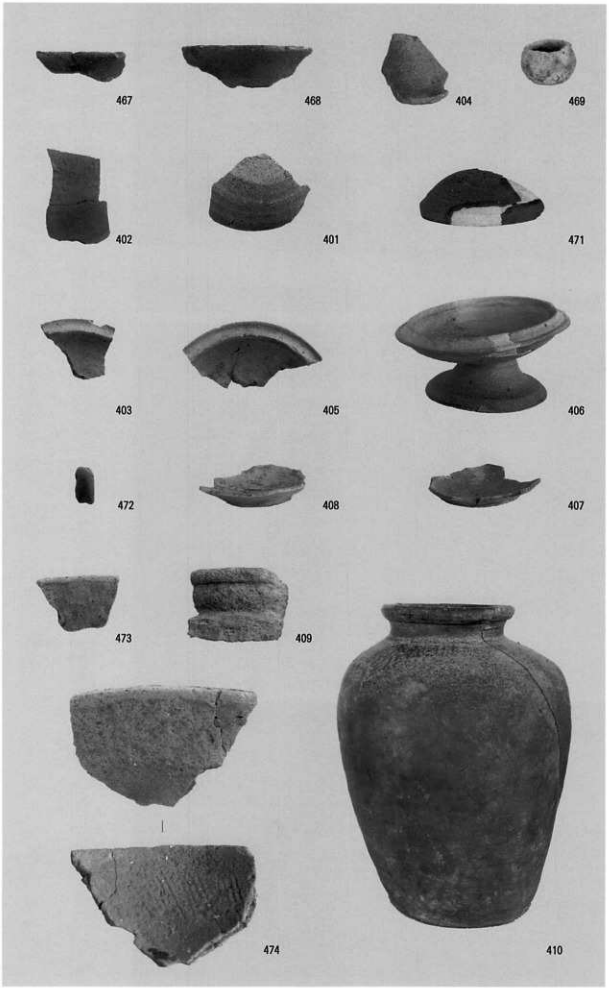
c　清替屋遺跡
ミニチュア土器
出土状況
（東から）



出土遺物 1　石塔類

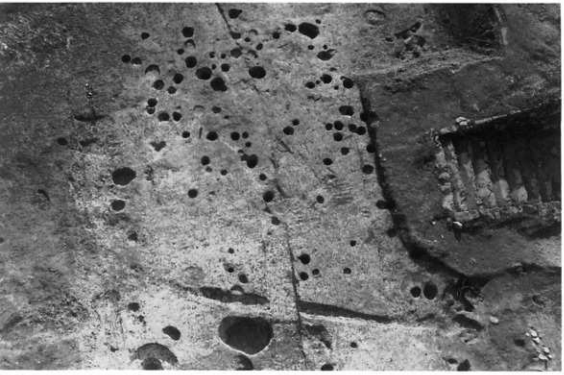


出土遺物 2　石塔類



出土遺物 3　土器，陶器，土製品

a　全景
（西上空から）



b　中央部西側地区
遺構群
（北から）

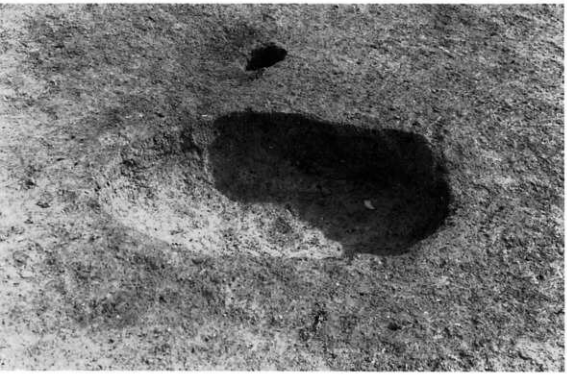
c　ＳＸ１・ＳＤ１
（西から）

a　ＳＸ２・ＳＸ３
（南西から）

b　ＳＫ１
（西から）

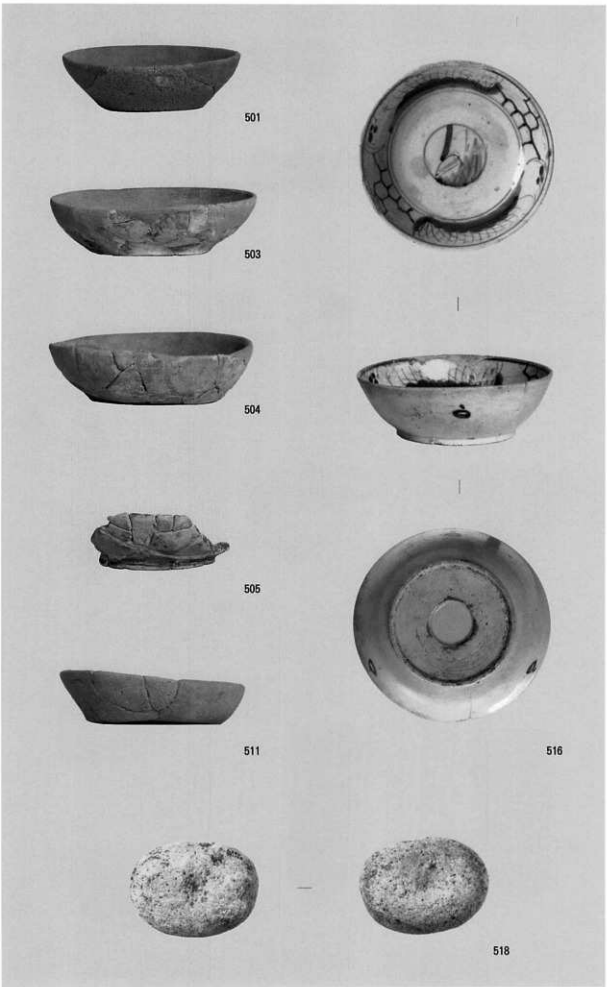
c　ＳＫ３
（南から）

a　ＳＫ４・ＳＫ５
（西から）

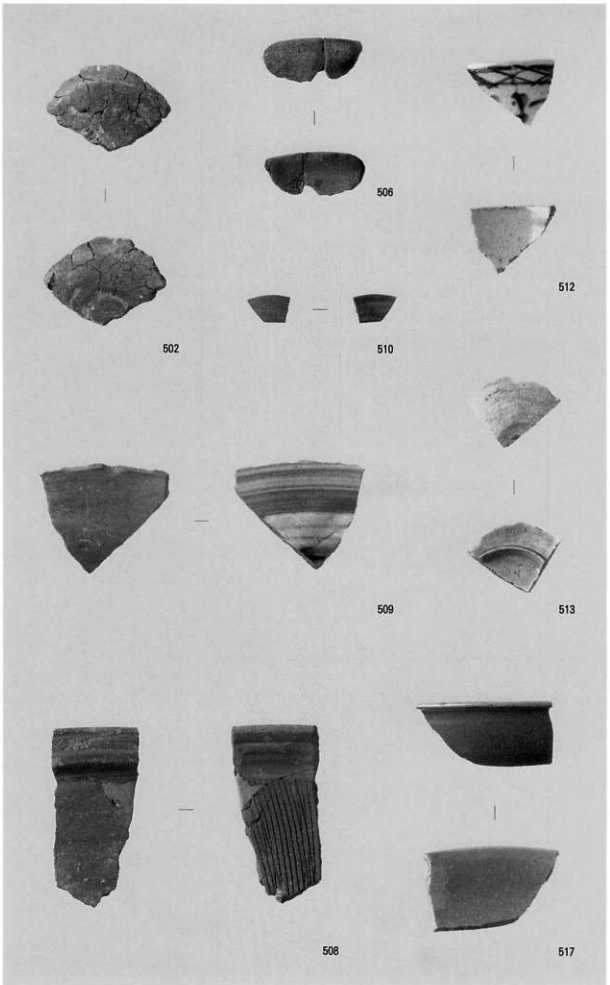


b　ＳＫ11
（西から）

c　ＳＫ12
（南西から）



出土遺物１　土器，磁器，石製品



出土遺物２　土器，陶磁器

報告書抄録

ふりがな	はいづかだむけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ（ご）
書名	灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅴ）
副書名	横谷第９号古墳，寺山第１～４号古墳，萩原城跡，清替屋古墓・清替屋遺跡，宗像神社境内遺跡の調査
巻次	5
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第203集
編著者名	下津間康夫・横坂久己
編集機関	財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目８番49号　TEL 082-295-5751
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
横谷第９号古墳	広島県双三郡三良坂町大字灰塚字横谷1525番地１	34585	548	34度 45分 51秒	132度 59分 24秒	20001010 ～ 20001201	225	灰塚ダム建設に伴う発掘調査
寺山第１号古墳	広島県双三郡三良坂町大字灰塚字横谷1540・1543番地	34585	513	34度 45分 56秒	132度 59分 36秒	20000522 ～ 20001006	190	
寺山第２号古墳	広島県双三郡三良坂町大字灰塚字横谷1540・1543・1548番地		514				380	
寺山第３号古墳	広島県双三郡三良坂町大字灰塚字横谷1540・1544番地		515				250	
寺山第４号古墳	広島県双三郡三良坂町大字灰塚字横谷1540・1544番地		516				180	
萩原城跡	広島県双三郡三良坂町大字大谷字大谷平53番地２，大字東原字瀧山150・151・152番地，大字灰塚字貝ノ平791番地	34585	592	34度 46分 0秒	133度 0分 49秒	20000703 ～ 20001027 20010403 ～ 20010406	950	
清替屋古墓・清替屋遺跡	広島県双三郡三良坂町大字東原字瀧山29・30・32番地	34585	594	34度 45分 57秒	133度 1分 5秒	20000410 ～ 20000623	550	
宗像神社境内遺跡	広島県双三郡三良坂町大字灰塚字土森1492番地外	34585	579	34度 46分 10秒	132度 59分 56秒	19991011 ～ 19991222	1,850	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横谷第９号古墳	古墳	古墳時代	古墳１基	須恵器	方墳・竪穴式石室の可能性
寺山第１～４号古墳	古墳	古墳時代	古墳４基・土坑墓１基	須恵器，鉄剣，鉄刀鉄鏃，砥石	埋葬施設は土坑２基・箱式石棺１基
萩原城跡	城跡	中世	郭群	土師質土器，国産陶器輸入陶磁器，土錘，ふいごの羽口，古銭	一石経経塚に数万点の礫うち墨書礫が約50点
清替屋古墓	古墓	中世～近世	埋葬施設１基	備前焼，須恵器石塔類	埋葬施設は備前焼壺を切石で囲む
清替屋遺跡	祭祀遺跡	古墳時代	土師器散布地	ミニチュア土器	自然石・礫群が露頭近世以降に埋葬地
宗像神社境内遺跡	集落	中世以降	掘立柱建物跡４棟溝２条，土坑13基	土師質土器，陶器	日常的な居住以外の場

※緯度・経度は，日本測地系の値

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第203集

灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（V）
―横谷第９号古墳、寺山第１～４号古墳、萩原城跡、
清替屋古墓・清替屋遺跡、宗像神社境内遺跡の調査―

発 行 日　平成15（2003）年３月31日

編集・発行　財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号
TEL（082）295-5751　FAX（082）291-3591

印 刷 所　至誠堂印刷株式会社